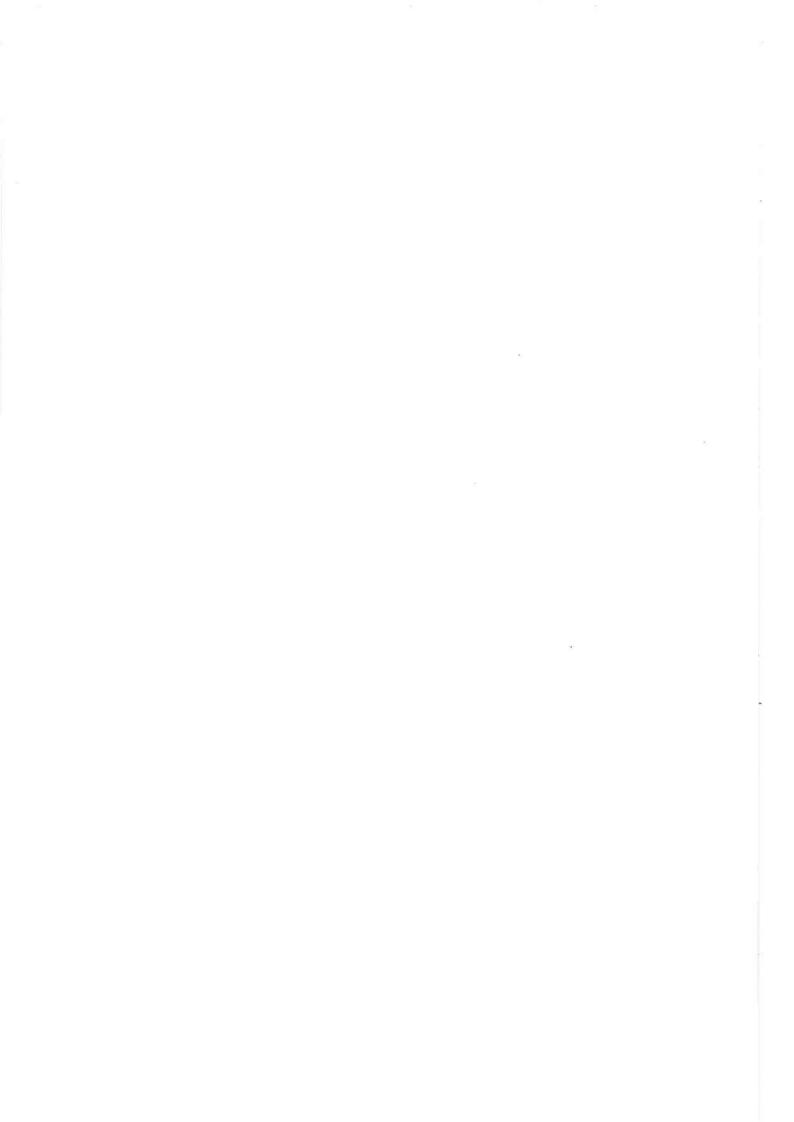
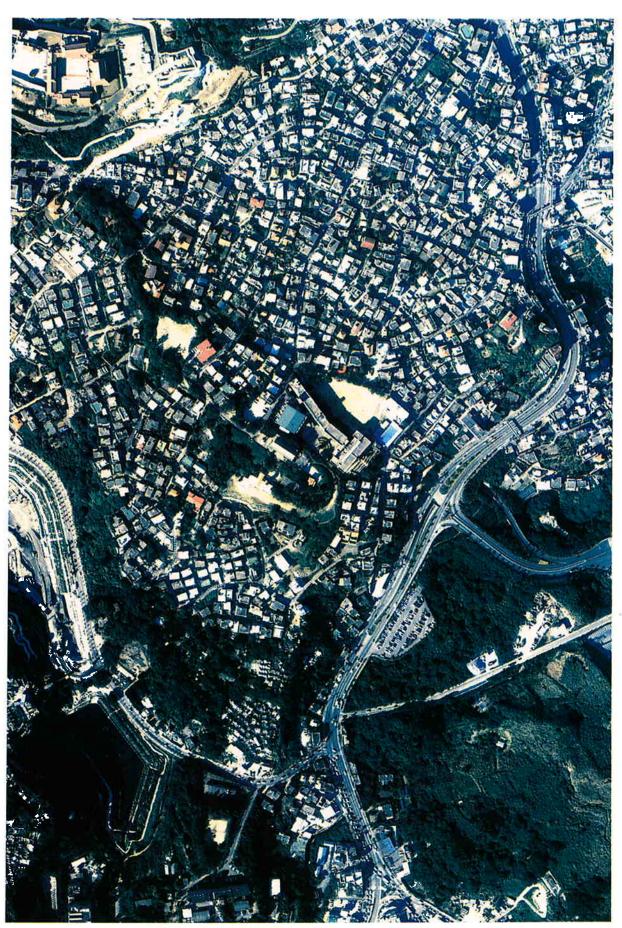
御茶屋御殿跡

遺構確認調查報告書

2003年(平成15) 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター





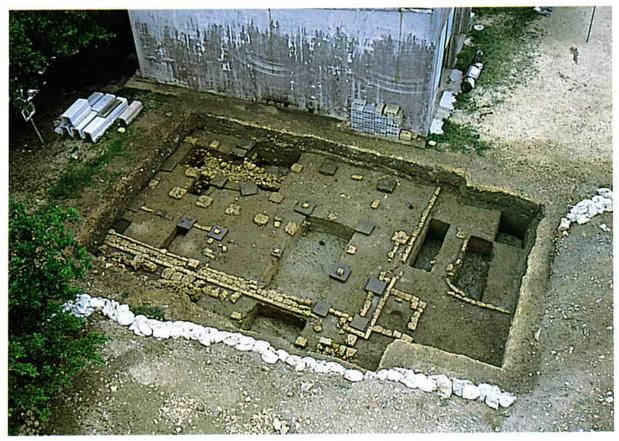
巻頭図版1 御茶屋御殿跡(航空写真:1998年)





巻頭図版2 御茶屋御殿(航空写真:1945年)





巻頭図版3 遺構検出状況1 上:Ⅰ地区 下:Ⅱ地区



埋甕遺構



建物跡(Ⅲ地区 S.T.1 検出)



石積遺構1



方形石組遺構 (平面)

巻頭図版 4 遺構検出状況 2



埋甕



建物跡(Ⅲ地区 S.T.5 検出)



石精谱構:



方形石組遺構 (立面)



この調査報告書は、文化庁の補助を受けて平成 12 ~ 14 年度に実施した、那覇市首里にある「御茶屋御殿(うちゃやうどうん)跡」の発掘調査の成果を記録したものです。

御茶屋御殿は 1677 年に琉球王国の王家の別邸として創建されました。首里城の東側に位置していることから、琉球国王尚貞の冊封に中国清朝から派遣された正使汪楫はこれを「東苑」の名で記録しています。この別邸は国王の遊覧や国賓の歓待などに使用され、その際に詩歌、管弦、茶、生花、芸能などが催されました。昭和初期には国宝の候補にもなりましたが、建物は去る第二次大戦により消失しました。現在は首里カトリック教会、城南小学校の敷地となっており、往時の苑の様子をうかがうことができなくなっています。

今回は茶亭跡の検出を主な目的として、首里カトリック教会敷地内における遺構確認調査を実施しました。その結果、茶亭の一部と玄関部分の基礎遺構を検出し、戦前の消失前の写真とも照合することができました。基礎遺構は茶亭の柱を据える礎石と地覆石がほぼ往時の配列のまま検出されています。また、厠跡とみられる方形石組も見つかりました。さらに茶亭の基礎遺構の下層にも石積があり、別の施設が以前に存在していたことがわかりました。

この調査報告書が、王国時代の首里王府に関連する施設、建造物の様相を知るための基礎資料として、さらに沖縄の歴史と文化を理解するための研究、学習資料として広く活用されることを期待します。

末尾ながら、このたびの遺構発掘調査に格別のご理解とご協力を賜りました宗教法人カトリック沖縄教区、宗教法人首里カトリック教会、発掘調査および出土品の同定・分析等でご指導を賜りました諸先生方、ならびに事業の実施に際しご協力いただきました関係各位に厚く感謝申し上げます。

2003年(平成15)3月

沖縄県立埋蔵文化財センター 所 長 安 里 嗣 淳

例 言

- 1. 本書は、2000 (平成 12) 年度から 2002 (平成 14) 年度にかけて実施した「御茶屋御殿跡」の発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2. 発掘調査は文化庁の補助を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。
- 3. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000 地形図、沖縄県公文書館保管の米軍作成地図、沖縄県立博物館保管の首里古地図を使用した。
- 4. 本書に掲載した航空写真は、国土地理院 98 OKINAWA C60 48 と沖縄県公文書館保管の米軍撮影写真 (CV20 103 63) を使用した。
- 5. 土壌分析等はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、同社による分析結果を第Ⅵ章に掲載した。
- 6. 出土遺物の同定及び分析は下記の方々にご協力をいただいた。記して謝意を表します(職名等は 当時、敬称略)。

陶磁器類 大橋 康二 (佐賀県立九州陶磁文化館)

手塚 直樹 (青山学院大学)

向井 互(金沢大学大学院)

獣·魚骨 金子 浩昌(東京国立博物館)

なお、獣・魚骨については金子浩昌氏より玉稿を賜った。記して謝意を表します。

7. 本書は知念隆博・新垣力を中心に、又吉純子ほかの協力を得て編集を行った。各節の執筆者は以下に記す通りである。

知念 隆博 第 I 章 · 第 II 章 · 第 IV 章 · 第 V 章 2 、 3 、 5 、 14 ~ 19 節 · 第 III 章

新垣 力 第Ⅱ章·第Ⅲ章·第Ⅳ章·第Ⅴ章第1、4、6~13節·第Ⅵ章

金子 浩昌 第 V 章第 20 節

- 8. 引用・参考文献は末尾に一括して記載した。
- 9. 本書に掲載された出土遺物の撮影及び現像・焼付は宮崎典子・光嶋香(埋文センター賃金職員)が行った。
- 10. 今回の調査は、地権者の宗教法人カトリック沖縄教区、並びに首里カトリック教会の協力及び関係者のご厚意のもと、円滑に実施することができました。記して謝意を表します。
- 11. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

報告書抄録

ふりがな	うちゃやうどう	1 ± L					
		N d) C					
	御茶屋御殿跡	/ 上:事					
	遺構確認調查報	百 音					
卷次		71.11.1 S & -= ====	±0 4+ ±+				
	2 1 1 1	化財センター調査	報古書				
シリーズ番号							
編著者名	知念隆博・新垣						
編集機関	沖縄県立埋蔵文						
所 在 地		中縄県中頭郡西原町	町字上原	₹ 193 —	7 Tel 0:	98-835-8	8751 · 8752
発行年月日	2003年 3月	25 日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村 遺跡番号	0 / //	0 / "	□ □ □ 1//1 □ □	m²	Md H. W. E.
うちゃをうりぬを 御茶屋御殿跡	おきなわけれる。 は、対 れ れ れ れ れ い れ れ い れ れ い れ れ い う い う い う	472018	26°	127°	2000.7.3	177	重要遺跡確認調査
	4丁目60番地		23″	22"	2002.8.30		HILL M. G. EL.
所収遺跡名	種別時代	遺構		遺	物	特記	事 項
御茶屋御殿跡	庭園近世	建物跡		青磁		琉球国王の別邸であっ	
	近代	石列遺構		白磁		た御茶屋	御殿内の茶亭
		石積遺構		染付		遺構を確認し、礎石等	
		方形石組遺構		褐釉陶器		の検出状況から茶亭の	
		拝所様遺構		色絵		規模、構成を推定する	
				タイ産半練		ことが可能となった。	
				本土産	陶磁器		
				沖縄産施釉陶器			
			沖縄産業	無釉陶器			
			陶質土物				
				瓦質土器			
				土器			
				瓦			
				円盤状態	製品		
				銭貨			
				煙管			
				金属製品			
				石製品	,		
			貝類遺体				
				動物遺化			
				判(2)(2)	т.		

目 次

巻頭図版
序
例言
報告書抄録

第 [章]	調査に至る経緯	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	
第1節	調査に至る経緯	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	1
第.2節	調査体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		1
第Ⅱ章	位置と環境		9
第1節	地理的環境		9
第2節	歴史的環境	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	3
44± m -≠- =	m ★ 4▽ `□		
第Ⅲ章 訁	調査経過·····		8
***** F	5 t 1 t 1 t 1 t 1 t 1 t 1 t 1 t 1 t 1 t		
	層序と遺構		
第1節	層序		
第2節	遺構	•••••	20
第V章 道	貴物	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	30
第1節	青磁30	第11節	瓦質土器53
第2節	白磁······33	第12節	土器
第3節	染付33	第13節	瓦······55
第4節	褐釉陶器34	第14節	円盤状製品58
第5節	色絵36	第15節	銭貨58
第6節	タイ産半練36	第16節	煙管59
第7節	本土産陶磁器37	第17節	金属製品59
第8節	沖縄産施釉陶器42	第18節	石製品61
第9節	沖縄産無釉陶器48	第19節	貝類遺体62
第10節	陶質土器52	第20節	動物遺体66
第VI章	『茶屋御殿跡の自然科学分析		68
第VII章 紹	語		71

挿 図 目 次

図 目 次

第1図	沖縄本島の位置5	第16図	白磁·染付······35
第2図	御茶屋御殿跡の位置及び周辺の遺跡	第17図	褐釉陶器・色絵・タイ産半練36
	6	第18図	本土産陶磁器 140
第3図	古地図に見る御茶屋御殿の位置7	第19図	本土産陶磁器 241
第4図	平面・立面図凡例9	第20図	沖縄産施釉陶器 146
第5図	調査範囲11	第21図	沖縄産施釉陶器 247
第6図	土層図 116	第22図	沖縄産無釉陶器51
第7図	土層図 217	第23図	陶質土器・瓦質土器54
第8図	土層図 318	第24図	瓦 1 ·····56
第9図	土層図 419	第25図	瓦 257
第10図	茶亭見取図(参考資料)22	第26図	円盤状製品58
第11図	建物跡・石積遺構1・石列遺構23	第27図	銭貨59
第12図	石積遺構 225	第28図	煙管59
第13図	方形石組遺構27	第29図	金属製品60
第14図	石積遺構 329	第30図	石製品61
第15図	青磁32		
· 무료 [57] III		目次	
卷頭図版	页1 御茶屋御殿跡(航空写真:1998年)	図版13	上:本土産陶磁器1
巻頭図版	反 2 御茶屋御殿(航空写真:1945年)		下:本土産陶磁器 2 ·····86
巻頭図版	反3 遺構検出状況1	図版14	上:沖縄産施釉陶器1
卷頭図版			下:沖縄産施釉陶器 287
図版 1	拝所様遺構29	図版15	沖縄産無釉陶器88
図版 2	I 地区調査状況 1 ······75	図版16	陶質土器·瓦質土器······89
図版 3	I 地区調査状況 2 ······76	図版17	上:瓦1 下:瓦290
図版 4	I 地区調査状況 3 ······77	図版18	円盤状製品58
図版 5	I 地区調査状況 4 ······78	図版19	銭貨59
図版 6	Ⅱ 地区調査状況 179	図版20	煙管59
図版 7	Ⅱ 地区調査状況 280	図版21	上:金属製品 下:石製品91
図版 8	Ⅱ 地区調査状況 381	図版22	貝192
図版 9	Ⅲ 地区調査状況 182	図版23	貝 293
図版10	Ⅲ 地区調査状況 283	図版24	上:ノコギリガサミ・サメ・魚類・
図版11	上:青磁 下:褐釉陶器・色絵・		カモ類(アイサ)・ニワトリ
	タイ産半練84		下:ブタ・ヤギ95
図版12	白磁·染付·····85	図版25	寄生虫卵分析プレパラート内の状況
			70

表 目 次

第1表	青磁出土状況31	第14表	銭貨観察一覧······58
第2表	青磁観察一覧31	第15表	貝類出土状況(巻貝)63
第3表	白磁出土状況33	第16表	貝類出土状況(二枚貝)65
第4表	染付出土状況34	第17表	ノコギリガサミ出土一覧67
第5表	褐釉陶器出土状況34	第18表	サメ出土一覧67
第6表	本土産陶磁器出土状況38	第19表	魚類出土一覧67
第7表	本土産陶磁器観察一覧38	第20表	カモ類 (アイサ) 出土一覧67
第8表	沖縄産施釉陶器出土状況43	第21表	ニワトリ出土一覧67
第9表	沖縄産施釉陶器観察一覧44	第22表	ネズミ出土一覧67
第10表	沖縄産無釉陶器出土状況49	第23表	ブタ出土一覧67
第11表	沖縄産無釉陶器観察一覧49	第24表	ウシ出土一覧67
第12表	陶質土器出土状況52	第25表	ヤギ出土一覧67
第13表	陶質土器観察一覧53		

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

御茶屋御殿は1677(尚貞9)年に創建された王家の別邸である。国王の遊覧及び国賓の歓待に使用された施設で、詩歌管弦の催しや茶道・生花・武道・囲碁など多様な芸能が披露された。首里城の東方に位置することから「東苑」とも称され、また南苑(識名園)とともに琉球文化の発信地としても認知されていた。

御茶屋御殿及び首里城が所在する首里は琉球王国の政治・文化の中心地であり、特に国王の居城である首里城の周辺には様々な施設が並んでいた。しかし第二次世界大戦の際に、第32軍司令部壕が構築されていた首里城及びその一帯は米軍の集中砲火を浴び、貴重な文化遺産もことごとく灰燼に帰した。御茶屋御殿も他の文化財と同様に戦渦からは逃れられず、茶亭南側の石積を残し、建物は全て焼失してしまった。その後、跡地には首里カトリック教会が建てられ、昔日の面影をほとんど残さない状態にまで変貌を遂げた。

戦後、昭和30年代に行われた園比屋武御嶽石門の復元修理を嚆矢として、被災した首里城跡及びその周辺文化財の復元・修復が次々と着手された。首里城跡も1972(昭和47)年の本土復帰直後に歓会門及び久慶門等の整備が実施され、1984(昭和59)年の旧琉球大学の移転完了に伴い、「首里城公園基本計画」や「国営沖縄記念公園首里城地区基本計画」を基軸とする本格的な復元整備が始動した。ちなみに御茶屋御殿関連では「東苑八景」にも詠まれた石造獅子が修復され、1986(昭和61)年に那覇市の有形民俗文化財の指定を受けている。

このように首里城跡を中心とした文化財の整備が進行し、往時の歴史的景観が復元されていく中で、かつて王家の別邸として使用され、中山有数の景勝地でもあった御茶屋御殿の整備を望む声が県民の間に広がりを見せた。また2000(平成12)年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として、首里城を含む9つの文化財が世界遺産に指定されたことも、御茶屋御殿への関心を高める要因となった。そのため、沖縄県教育委員会は地下の遺構の確認調査が必要との判断から、2000(平成12)年度から2002(平成14)年度までの3ヶ年事業として、文化庁の補助を得て発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査体制

発掘調査から資料整理及び報告書の刊行(平成 12 年度~平成 14 年度)まで、下記の体制で実施した。

調査主体 沖縄県教育委員会(平成12年度~平成14年度)

教育長

翁長 良盛(平成12年度)

11

津嘉山朝祥(平成13年度~平成14年度)

調査所管 沖縄県教育庁文化課及び沖縄県立埋蔵文化財センター(平成 12 年度~平成 14 年度) 沖縄県教育庁文化課

文化課長

當眞 嗣一(平成12年度~平成13年度)

日越 国昭(平成14年度)

〃 課長補佐

千木良芳範 (平成12年度)

大城 慧(平成13年度~平成14年度)

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長

知念 勇(平成12年度~平成13年度)

安里 嗣淳 (平成14年度)

副所長

知念 廣義 (平成12年度~平成13年度)

安冨祖英紀(平成14年度)

調查事務

沖縄県立埋蔵文化財センター

庶務課長

知念 廣義(平成12年度~平成13年度)

11

安冨祖英紀(平成14年度)

〃 主任

西江 幸枝(平成14年度)

〃 主事

城間 千賀(平成12年度~平成14年度)

上原 浩 (平成 12 年度~平成 13 年度)

調査総括

沖縄県教育庁文化課

記念物係長

盛本 勲(平成12年度~平成13年度)

島袋 洋(平成14年度)

沖縄県立埋蔵文化財センター

調査課長

島袋

洋(平成12年度~平成13年度)

盛本

勲(平成14年度)

調查担当

沖縄県立埋蔵文化財センター

専門員

力(平成12年度) 新垣

知念 隆博 (平成13年度~平成14年度)

調査補助員 嘱託員 古屋 聡洋(平成12年度)

〃 田里 一寿(平成12年度)

新垣

力(平成13年度~平成14年度)

発掘調査作業員及び協力者(五十音順)

新垣キク・新川睦・浦崎京子・大城輝子・大城成子・大城守広・大城安志・親川菊江・喜納初子 具志幸姿郎 呉我フジ子・小波津ヨシ子・佐渡山正子・塩部行宏・島仲恵子・高良茂博・玉城初美 照屋タケ・照屋トミ・桃原佐恵美・當間フミ・徳里政哉・富山勇・中塚末子・比嘉洋子・宮国恵子 柚木崎末子

資料整理作業員及び協力者 (五十音順)

赤嶺圭子・赤嶺雅子・新垣利津代・石嶺敏子・上原にらぬ・上原美穂子・大村由美子・金城敬子 金城恵子・久保田有美・国場のりえ・米須あさみ・瑞慶覧尚美・平良貴子・比嘉孝子・比嘉登美子 譜久村泰子・又吉純子・吉川由紀

聞き取り調査依頼者

平良良信

調査指導(職名等は当時、並びは五十音順)

金武 正紀 (那覇市教育委員会文化財課長)

坂井 秀弥(文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官)

平良 啓(株式会社国建地域計画部部長)

宮城 弘樹(今帰仁村教育委員会社会教育課専門員)

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

那覇市は、東側の分水界付近に広がる第四紀層の琉球石灰岩台地と、東シナ海に面する沖積低地とに代表される対照的な地形を示している。遺跡の所在する首里は首里台地と呼ばれる琉球石灰岩の台地に形成された町で、標高 120~130 mの丘陵上には琉球国王の居城である首里城が立地し、14 世紀以降から王府時代の終末期までの永きに渡り王都として栄えていた。

その首里城の南東側、すなわち首里台地南東部の急崖上に崎山は位置する。崎山は樹林に覆われた丘陵部と、眼下を流れる安里川に沿う低地部とに大きく分かれ、東側には那覇市の最高所(標高 165.7 m)である弁ヶ嶽がそびえ、そこから連なる丘陵が北側を取り囲んでいる。今回の調査地である御茶屋御殿は崎山の丘陵上(標高約 130 m)に所在した旧王家の別邸である。かつて国王の遊覧及び国賓の歓待に使用された施設で、また沖縄本島南部一帯を遠望できる有数の景勝地でもあった。

首里台地を形成する琉球石灰岩の下部には、新第三紀の砂岩・泥岩からなる島尻層群が基盤層として広がっており、この島尻層群を不透水層として、琉球石灰岩との不整合部分からの湧水が各所で確認されている。特に遺跡の所在する首里は湧水の豊富な地域で、首里城内やその周辺に龍樋や金城大樋川などの湧泉が多数点在する。

ちなみに、調査区である首里カトリック教会の敷地内にも湧泉が存在し、現在も枯れることなく飲料可能な水を湛えている。

第2節 歴史的環境

「崎山」の地名は、首里城及び赤田の先の方に当たる山(山は樹林の意)から出たとされているが、首里台地東端の突き出た地形に由来するとの説もある。隣接する赤田や鳥堀と合わせて首里三箇と称され、首里の中でも特色ある地域といわれる崎山は、古くから士庶の家が密集する首里地区有数の居住地であった。

かつてこの地にあった御茶屋御殿は、阿氏伊舎堂親方守浄を普請奉行に任じて 1677 (尚貞 9)年の4月に着工し、その翌月には竣工したとされている。全域 10,000㎡ にも及ぶ敷地内には望仙閣・能仁堂・茶亭が並び、周辺には築山や池、石造物が配されるなど、独特の意匠を凝らした庭園造りがなされていた。敷地の北側(現在は城南小学校が所在する場所)には菜園が広がり、そこでは様々な薬種の栽殖が行われていた。

現在敷地内に建物は残っておらず、その構造や様式については判然としない。だが茶亭に関しては唯一写真や平面図等の記録が残されており、往時の状況を窺い知ることができる。それによると茶亭は木造入母屋造り(北側のみ縋破風)で、正面には屋根を掛けた出入口が設けられる。屋根は本瓦葺で明朝系瓦を用いており、瓦は漆喰で巻かれている。また比較的床が高く、部屋の周囲に幅広の縁側を巡らせることで雨端の代用としている。

御茶屋御殿は王家の別邸であるとともに、国賓の歓待にも使用された施設で、詩歌・管弦の催しや茶道・生花・武道・囲碁などの様々な芸能が披露された。その様子は山内親方の記した『御茶屋御殿諸芸つくし』や、豊川親方の雅文である『於御茶屋諸芸づくしの時』などに見られる。また吉屋思鶴の作と伝えられる「拝で拝んぶしゃ首里天加那志 遊で浮ちゃがゆる御茶屋御殿」の歌からは、当時御茶屋御殿という施設が非常に有名であり、かつ庶民の憧れの場所として捉えられていたことが理解される。

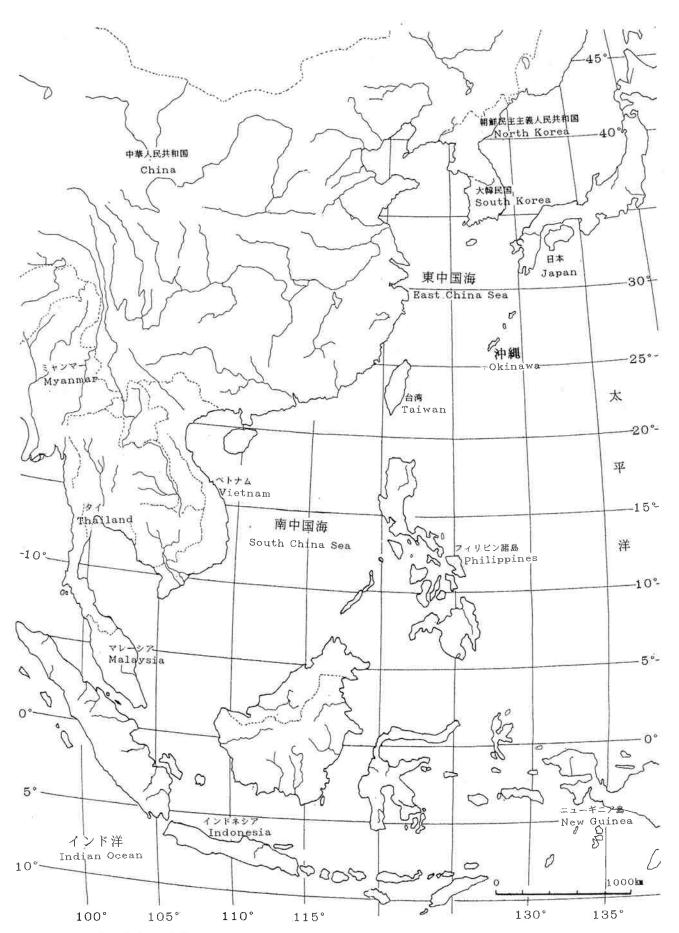
さらに御茶屋御殿は北に浦添及び弁ヶ嶽、南に識名及び八重瀬岳、東に知念半島及び久高島、西に 那覇及び慶良間諸島を望むことのできる中山第一の景勝地でもあった。この情景については、汪楫の 『使琉球雑録』、徐葆光の『中山伝信録』、周煌の『琉球国志略』などの冊封使の記録が残されている が、特に著名なものとしては名護親方の『東苑八景』が挙げられる。『東苑八景』は東海朝曦・西嶼 流霞・南郊麦浪・北峯積翠・石洞獅蹲・雲亭龍涎・松径凌声・仁堂月色の八題からなる漢詩で、前半の四首には御茶屋御殿から見る情景が、後半の四首には敷地内の様子が詠まれている。この中の「石洞獅蹲」に登場する石造獅子は先の戦争で破壊されたが、現在は修復されており、御茶屋御殿関連の文化財として唯一有形民俗文化財の指定を受けている。ちなみに「東苑」とは、汪楫により首里城の東方に位置する庭園の意として命名された名である。

御茶屋御殿が王家の別邸であるとともに、外国使臣の歓待にも用いられていたことは前述の通りである。しかし 1800(尚温 6)年に来琉した冊封使李鼎元の『使琉球記』から、国賓のための宴を行う場は天使館及び首里城、宴とは別に一席を設ける場は御茶屋御殿と用途による使い分けがなされていたことや、前年(1799 年)に識名園が造営されているが、その後も御茶屋御殿が利用されていたことなどが窺える。また 1682(尚貞 14)年には道を挟んだ場所に崎山御殿が創建され、御茶屋御殿と同様に王家の別邸として利用されたが、後世の記録ではこの崎山御殿がしばしば御茶屋御殿と混同される傾向にある。

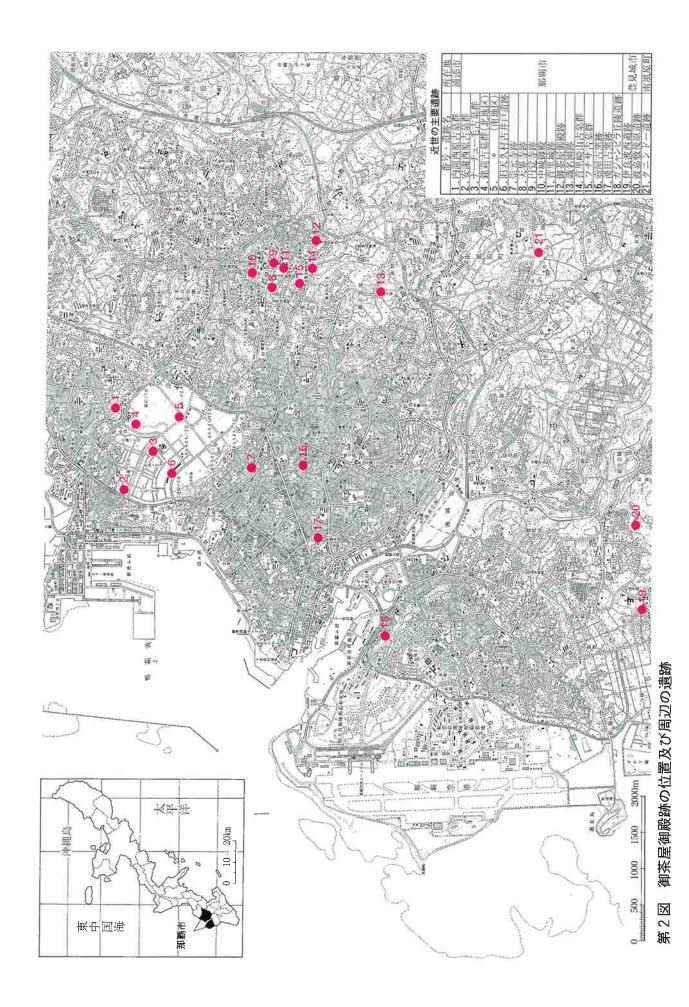
尚泰王代まで使用された御茶屋御殿は、廃藩置県後に琉球国王の東京への移動に伴い、首里城とともにその役割を失った。その後、首里城は熊本鎮台沖縄分遣隊の兵舎(1879~1896)や、首里市立女子工芸学校・沖縄県立工業徒弟学校・首里城第一尋常小学校の校舎(1896~1945)などとして利用されたが、ほとんどの施設は手付かずの状態で放置され、荒廃の一途を辿っていった。御茶屋御殿も例に漏れず、1882(明治15)年に来沖した尾崎三良の日記に「廃藩旧王東京に移りしより以来これを修理するものなし。庭園荊棘櫨階を没し堂宇破壊、鼠糞散漫、客襟の滋を覚えず、顧れば悲風飄々たり、夏日尚冷気を覚う」と記されるほど(註1)、この頃には老朽化が進み廃墟と化していた。北側に広がる樹林は開墾されて農耕地となっており、1898(明治31)年には隣接する崎山御殿も民間に払い下げられた。しかし当時の文部省文部技官であった阪田良之進の尽力により、1930(昭和5)年に首里城正殿とともに御茶屋御殿の改修工事が実施され、往時の姿を再現するまでになった。ただ御茶屋御殿に関しては敷地内の全ての建物が修復されたのではなく、対象となったのは茶亭・茶亭に伴う離れの厠・管理人の生活する御番屋の3棟のみであった。それでも田辺泰が「規模結構はともに比較にならぬが、南苑(識名園)を桂離宮に例えるならば、東苑(御茶屋御殿)は修学院離宮に模すべきものであろう」と称したように(註2)、御茶屋御殿は戦災で焼失するまでの間、旧国宝の第一候補としての偉容を誇っていた。

その後、沖縄全土は先の大戦により壊滅的な被害を受け、首里城をはじめとする貴重な文化財もことごとく灰燼に帰した。首里一帯は戦後しばらく立ち入りが禁じられ、ようやく人々が帰住し始めたのは1945(昭和20)年の12月からであった。御茶屋御殿も他の文化財と同様に建物は完全に破壊され、敷地内は旧状を留めない状態にまで変貌した。跡地は戦後、一時期は首里及び沖縄各地で収容された遺骨の集積所となっていたが、1952(昭和27)年に尚家からカトリック教会に払い下げられた。その後は同年12月の仮御堂の設置を皮切りに司祭館や学生館、1956(昭和31)年に教会の本会堂、1959(昭和34)年に教会付属の幼稚園が相次いで建設された。また時期は前後するが、1946(昭和21)年には北側の菜園跡に城南小学校が建設されるなど、御茶屋御殿の跡地及びその周辺は大きく様相を変えて、現在に至っている。

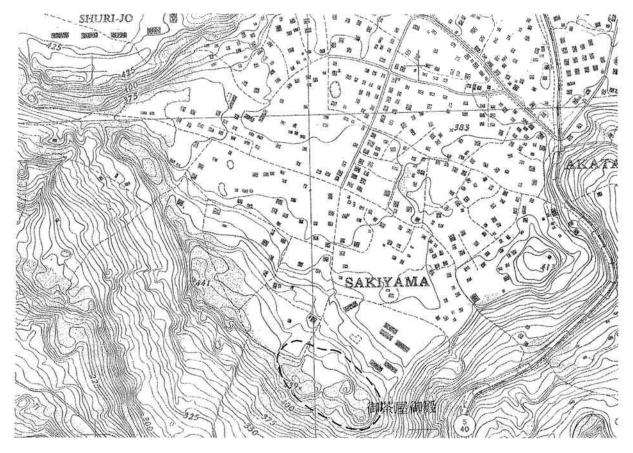
今日、崎山はかつての賑わいを取り戻し、首里有数の快適な居住地となっている。前述のように御茶屋御殿の跡地は首里カトリック教会となり、特に茶庭の跡にはスクールバスの車庫が建てられるなど、一帯に往時の姿を偲ばせるものは皆無に近い。唯一戦後に修復された石造獅子も雨乞嶽に移動されているが、茶亭南側の石積のみがほぼ完全な状態を保っており、僅かに昔の面影を残している。



第1図 沖縄本島の位置



- 6 -





第3図 古地図に見る御茶屋御殿の位置

上:米軍作成地図 (1945年) 下:首里古地図 (18世紀初頭)

第Ⅲ章 調査経過

「御茶屋御殿跡」の発掘調査はカトリック幼稚園の夏休み期間に合わせて、平成 12 年度から平成 14 年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。以下、年度別に調査経過の概要を記す。

平成 12 年度

平成 12 年度は敷地内の遺構の有無、及びその残存状態の確認を目的として、7月 3日より調査を開始した。まず最初に、敷地内東側の平場にトレンチを3ヶ所設定し、バックホウによる表土の除去作業から着手した。これにより同地域の地形改変が60cm ~ 1 m程度の盛土造成と確認されたため、遺構直上の層まで機械力を用いて掘り下げた後に、サブトレンチを設定して手作業に移行した。その結果、T.T.2 からは石組遺構が、T.T.3 からは礎石を伴う建物跡が、いずれも当初の予想以上に良好な状態で検出された。さらに建物跡の下層からは石積が検出され、御茶屋御殿の創建以前に何らかの施設が存在していたことも判明した。

層序に関しては、斜面という地形的な制約に加えて、戦後の造成等による撹乱を受けていることから、良好な堆積状況の確認は困難と思われた。しかし各トレンチとも造成層の下層に旧表土が残存しており、特に T.T.1 ではトレンチ 3 検出の石積と同時期と考えられる遺物包含層が確認された。また T.T.3 からは、建物跡の建設に伴うと思われる平場造成の痕跡も確認された。

平成 13 年度

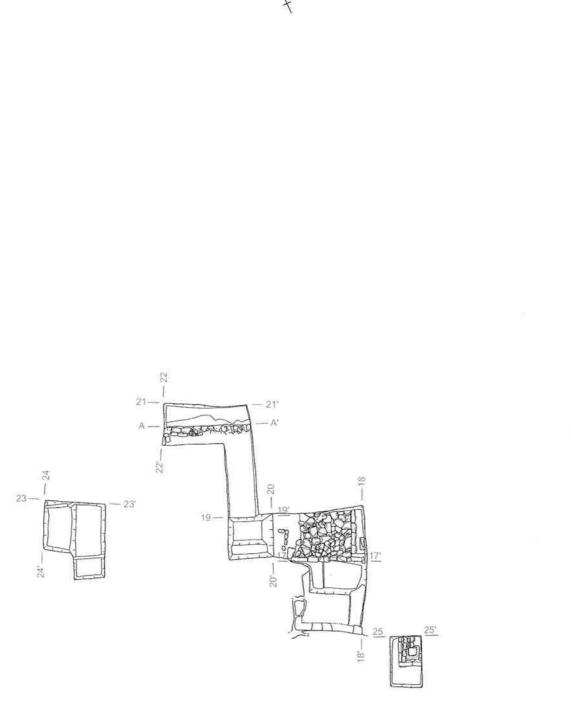
平成 13 年度は昨年度検出の建物跡の延長部の確認を目的として、T.T.3 の北側に一部重複させる形で 8 m× 11mの調査区を設定した。昨年に敷地内の工事現場から不発弾が発見されたことを受けて、事前に磁気探査を行ったが、建築用の部材が少量確認されたのみであった。これにより安全が確認されたため、7月 16 日から本調査を開始した。まず、昨年度の調査により地表面から遺構面までの層厚が約 60cm と確認されていたため、遺構直上まではバックホウを用いて掘り下げた。その後、旧表土を検出する作業を行うにつれ、建物跡の礎石や地覆石が次々と顔を出し、最終的にはニービ製礎石 20基、石灰岩製礎石 19 基が確認された。また、これらの外側に石敷基壇も廻らされ、北東隅には沖縄産無釉陶器を用いた埋甕が検出された。建物跡以外では厠跡へ続くと考えられる石積や、建物跡北側には長方形の石灰岩を用いた遺構なども検出された。

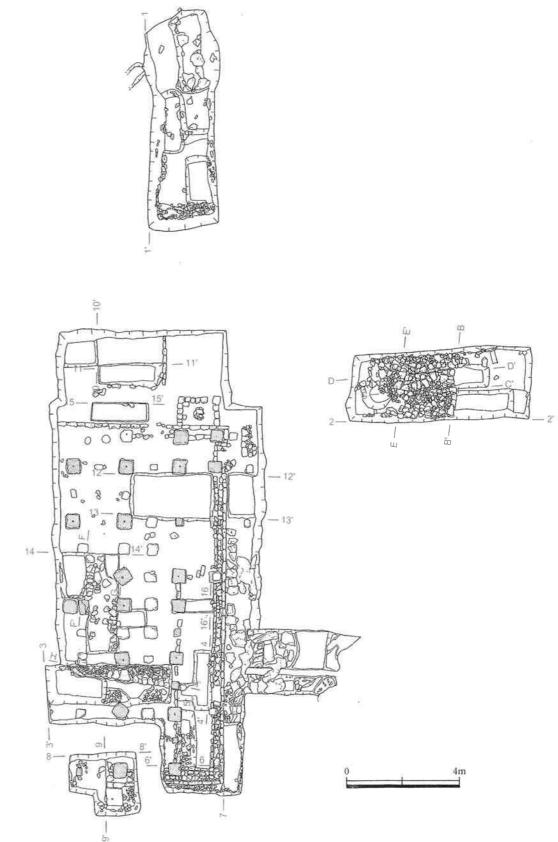
建物跡の検出後、遺構の下部構造や土層の堆積状況を確認する目的で、礎石間が比較的広い場所にサブトレンチを5ヶ所設けた。その結果、S.T.3から南北に伸びる石積が検出されたが、この遺構が昨年度 T.T.3 で検出した石積の延長部に対応すること、平面観が L 字形に折れる構造を持つことなどが判明した。

平成14年度

平成14年度は建物跡の玄関部分及び建物跡南西隅の検出を目的に、古写真や見取図等を参考にしてバス車庫の西側に調査区を設定した。8月1日に調査を開始してすぐに玄関前の石畳が検出されたが、西側への延長部は残存しておらず、その南側に現存する石積の裏込石を確認するにとどまった。その後、トレンチを拡張して裏込石の検出作業を行ったが、調査区の北側から石畳縁辺部を含む石積が確認されたため、これにより石畳の幅の復元が可能となった。また建物跡の南西隅については、S.T.5 から礎石及び地覆石を検出したことにより判明した。

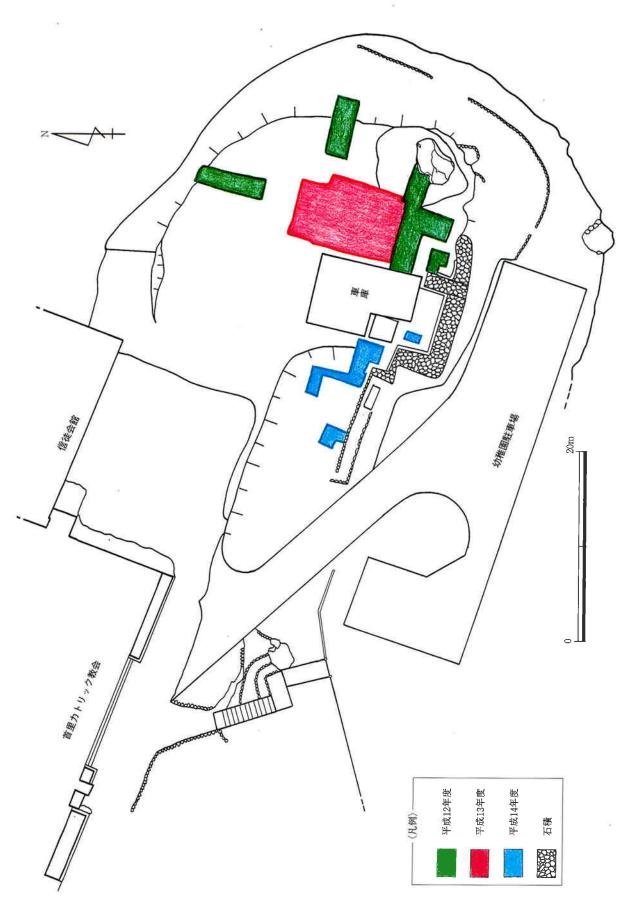
以上が平成12年度~平成14年度の調査経過である。いずれも地形的な制約により小規模な発掘となったが、茶亭の規模や構造に関しては十分な資料が得られたと考えられる。なお、調査終了後はいずれの調査区にも保護砂と土嚢袋による埋め戻しを施している。





第4図 平面・立面図凡例

		a a
	ž	2



第5図 調査範囲

第Ⅳ章 層序と遺構

第1節 層序

本地域はこれまでにも述べてきた通り、沖縄戦やその後の教会建築に伴う地形改変の著しい場所である。そのため上層部分では大きく撹乱を受けているが、下層からは遺物包含層や旧表土、また御茶屋御殿創建以前にさかのぼると思われる層も確認されている。以下、今回の調査で確認された層序について地区別に略述する。

1. **I地区**(第6·7図)

I地区は斜面部分(T.T.1、T.T.2)と平場部分(T.T.3、T.T.4)に分けられる。いずれの場所も教会建設に伴う地形改変がなされているが、平場部分では造成の影響が少なく、良好な堆積状況が確認されている。以下、本地区の層序について略述するが、T.T.3 内で拝所様遺構の検出された箇所に関しては、堆積層が薄く分層が困難なため、東側拡張区として一括で扱う。

T.T.1 (第6図①)

- 1層-表土。終戦後から現在に至るまでの造成土で、上から①芝生及び黒褐色土、②コーラルまたは赤土、③クチャ(造成土)、④コーラルの順で堆積している。層厚は $120\text{cm}\sim280\text{cm}$ 。
- 2 層一暗灰黄色土層。微細なサンゴ礫を多量に含む。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 40 cm でほぼ一定している。
- 3層-黄褐色混礫土層。拳大の礫や瓦片等を多量に含む。御茶屋御殿の創建あるいは拡張に伴う造成土と考えられる。層厚は 40cm ~ 120cm。
- 4 層 暗オリーブ灰色土層。微細なサンゴ礫や炭片を含む。御茶屋御殿創建以前(17 世紀中頃)の 旧表土と考えられる。層厚は 30cm ~ 40cm。
- 5層-黄褐色粘土層。本来は無遺物層と思われるが、上層からの遺物の混入が少量認められる。
- 6層-青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である島尻層群の第3紀泥岩(クチャ)である。地山。

T.T.2 (第6図2)

- 1 層 −表土。層厚は 60cm ~ 120cm。 T.T.1 の 1 層に対応する。
- 2a層-暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は40cm。T.T.1の2層に対応する。
- 2b層-暗灰黄色土層。2a層と同質の土だが、方形石組遺構内の覆土である。
- 3層-黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。層厚は40cm~60cm。T.T.1の5層に対応する。
- 4層-青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩 (クチャ)。T.T.1の6層に対応する。

T.T.3 - 1 (第7図③)

- 1層-表土。T.T.1の1層、T.T.2の1層に対応する。
- 2層-黒褐色砂層。瓦片を多量に含む。沖縄戦に伴う焼土層と考えられる。層厚は 10cm ~ 20cm。
- 3a層-灰オリーブ色土層。3b層と同質の土だが、礎石掘り込み時の覆土である。
- 3b層 暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 40cm ~ 50cm。T.T.1 の 2 層、T.T.2 の 2 a 層に対応する。
- 4 層 黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。層厚は 10cm ~ 60cm。T.T.1 の 5 層、T.T.2 の 3 層に対応する。
- 5 層 青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩 (クチャ)。T.T.1 の6 層、T.T.2 の4 層に対応する。

T.T.3 - 2 (第7図④)

- 1a層 灰オリーブ色土層。 1 b層 2 同質の土だが、礎石掘り込み時の覆土である。 2 1 2 3 4 層に対応する。
- 1b層 一暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は $10\text{cm} \sim 20\text{cm}$ 。 T.T.1 の 2 層、T.T.2 の 2 a 層、T.T.3 1 の 3 b 層に対応する。
- 2層-黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。T.T.1の5層、T.T.2の3層、T.T.3-1の4層に対応する。
- 3 層 青灰色粘土層。調査区 帯の基盤層である第3紀泥岩 (クチャ)。T.T.1 の6 層、T.T.2 の4 層、T.T.3 1 の5 層に対応する。

T.T.3 - 3 (第7図⑤·⑥)

- 1 層 暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 20cm。T.T.1 の 2 層、T.T.2 の 2 a 層、T.T.3 1 の 3 a 層、T.T.3 2 の 1 b 層に対応する。
- 2層-灰オリーブ色土層。拳大の石灰岩の礫を含む。茶亭築造時の平場造成の土と考えられる。
- 3層-黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。層厚は10cm ~ 40cm。T.T.1の5層、T.T.2の3層、T.T.3-1の4層、T.T.3-2の2層に対応する。
- 4 層 青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩 (クチャ)。T.T.1 の6 層、T.T.2 の4 層、T.T.3 1 の5 層、T.T.3 2 の3 層に対応する。

T.T.3 - 4 (第7図⑦)

- 1 層 暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 15cm。T.T.1 の 2 層、T.T.2 の 2 a 層、T.T.3 1 の 3 a 層、T.T.3 2 の 1 b 層、T.T.3 3 の 1 層に対応する。
- 2層-黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。層厚は10cm ~ 20cm。T.T.1の5層、T.T.2の3層、T.T.3-1の4層、T.T.3-2の3層、T.T.3-3の3層に対応する。
- 3層-青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩(クチャ)。T.T.1 の6層、T.T.2 の4層、T.T.3 1の5層、T.T.3 2の3層、T.T.3 3の4層に対応する。

T.T.4 (第7図(8)·(9))

- 1層-表土。層厚は40cm~60cm。T.T.1とT.T.2の1層、T.T.3-1の1層に対応する。
- 2層 暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は $10\text{cm}\sim20\text{cm}$ 。 T.T.1 の 2 層、T.T.2 の 2 a 層、T.T.3 -1 の 3 b 層、T.T.3 -2 の 1 b 層、T.T.3 -3 の 1 層、T.T.3 -4 の 1 層に対応する。
- 3層-黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。T.T.1 の 5 層、T.T.2 の 4 層、T.T.3 1 の 4 層、T.T.3 2 の 2 層、T.T.3 3 の 3 層、T.T.3 4 の 3 層に対応する。

2. Ⅱ地区 (第8図)

Ⅱ地区は平場部分に設定され、建物跡の主要な部分であるが、撹乱を受けていない旧表土より下層では良好な堆積状態が確認された。堆積は水平方向が多いが落ち込みが認められる部分もある。以下、本地区の層序について略述する。

S.T.1-1 (第8図⑩)

- 1層-暗灰黄色土層。微細なサンゴ礫を多量に含む。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 20 cm ~ 30 cm。
- 2層 一暗灰黄色土層。 1層と同質の土だが、北東隅に観察される落ち込みの覆土である。層厚は 30 cm ~ 40 cm。

- 3層-黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。層厚は 40cm ~ 70cm。
- 4層-青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩 (クチャ)。地山。

S.T.1-2 (第8図印)

- 1層-暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は15cm。S.T.1-1の1層に対応。
- 2層 暗灰黄色土層。 1 層と同質の土だが、壁面に観察される落ち込みの覆土である。層厚は 40 cm。 S.T.1-1 の 2 層に対応。
- 3層-黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。S.T.1-1の3層に対応。
- 4層-青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩(クチャ)。S.T.1-1の4層に対応。

S.T.2-1 (第8図⑫·⑬)

- 1層-暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 5 cm \sim 20cm。S.T.1 1 の 1 層、S.T.1 2 の 1 層に対応する。
- 2層-オリーブ灰色土層。砂粒を多量に含む。壁面に観察される落ち込みの覆土である。層厚は 5 cm ~ 20 cm。
- 3 層 青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩 (クチャ)。S.T.1 1の4層、S.T.1 2の4層に対応する。

S.T.2 - 2 (第8図2 · 13)

- 1層-暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 5 cm \sim 10cm。S.T.1 1 の 1 層、S.T.1 2 の 1 層、S.T.2 1 の 1 層に対応する。
- 2 層 青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩 (クチャ)。S.T.1 1の4層、S.T.1 2の4層、S.T.2 1の3層に対応する。

S.T.3 (第8図(4))

- 1層 暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 5 cm ~ 20cm。S.T.1 1の1層、S.T.1 2の1層、S.T.2 2の1層に対応する。
- 2 層-黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。層厚は $10\text{cm} \sim 45\text{cm}$ 。S.T.1 -1 の 3 層、S.T.1 -2 の 3 層に対応する。
- 3 層 青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩 (クチャ)。S.T.1 1の4層、S.T.1 2の4層、S.T.2 1の3層、S.T.2 2の2層に対応する。

S.T.4 (第8図⑮)

- 1層-暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 5 cm \sim 10cm。S.T.1 1 の 1 層、S.T.1 2 の 1 層、S.T.2 2 の 1 層、S.T.3 の 1 層に対応する。
- 2層-暗灰黄色土層。1層と同質の土だが、壁面に観察される落ち込みの覆土である。層厚は70 cm。S.T.1-1の2層、S.T.1-2の2層に対応する。
- 3 層 黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。層厚は 25cm ~ 40cm。S.T.1 1 の 3 層、S.T.1 2 の 3 層、S.T.3 の 2 層に対応する。
- 4 層 青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩 (クチャ)。S.T.1 1の4層、S.T.1 2の4層、S.T.2 2の2層、S.T.2 2の2層、S.T.3の3層に対応する。

S.T.5 (第8図(6))

1 層 - 暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 20cm。S.T.1 - 1 の 1 層、S.T.1 - 2 の 1 層、S.T.2 - 1 の 1 層、S.T.2 - 2 の 1 層、S.T.3 の 1 層、S.T.4 の 1 層に対応する。

2 層 - 黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。S.T.1 - 1 の 3 層、S.T.1 - 2 の 3 層、S.T.3 の 2 層 に対応する。

3. Ⅲ地区 (第9図)

Ⅲ地区は戦後の造成や植栽などにより近年まで撹乱を受けている部分が多いが、建物跡に近い部分では保存状態の良好な堆積が確認されている。以下に本地区の層序について略述する。

S.T.1 (第9図印·18)

- 1層-表土。終戦後から現在に至るまでの造成土。
- 2層-黒褐色砂層。瓦片を多量に含む。沖縄戦に伴う焼土層と考えられる。
- 3 層一暗灰黄色土層。微細なサンゴ礫を多量に含む。戦前までの旧表土と考えられる。層厚は 10 cm ~ 15 cm。
- 4層 灰オリーブ色土層。拳大の礫を含む。茶亭築造時の平場造成の土と考えられる。層厚は 10 cm ~ 30 cm。
- 5層一灰オリーブ色土層。4層と同様の性格と思われるが、礫を多量に含み粘性が強い。
- 6層-黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。

S.T.2 (第9図(19·20))

- 1層-表土。層厚は10cm~20cm。S.T.1の1層に対応する。
- 2 層 暗褐色混礫土層。層厚は 20cm ~ 30cm。S.T.1 の 4 層に対応する。
- 3層-礫層。石積遺構の裏込め及び建物跡の基礎と考えられる。層厚は 20cm ~ 50cm。
- 4層-黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。S.T.1の6層に対応する。

S.T.3 (第9図②)·②)

- 1層-表土。層厚は 15cm ~ 45cm。S.T.1 の 1層、S.T.2 の 1層に対応する。
- 2層一暗灰黄色土層。戦前までの旧表土と考えられる。トレンチ1の3層に対応する。
- 3 層 黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。層厚は 10cm ~ 40cm。S.T.1 の 6 層、S.T.2 の 4 層に対応 する。
- 4層-青灰色粘土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩(クチャ)。地山。

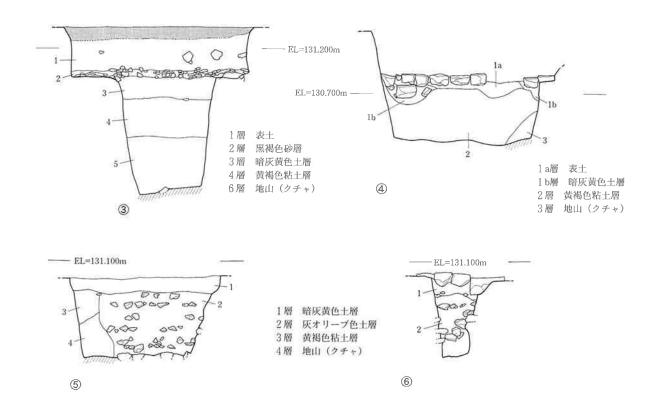
S.T.4 (第9図23・24)

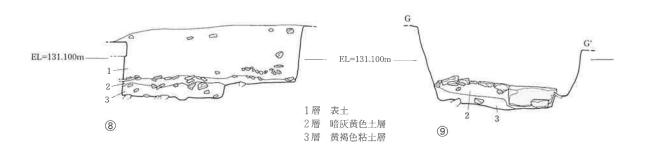
- 1層-表土。層厚は 20cm ~ 25cm。S.T.1 の 1層、S.T.2 の 1層、S.T.3 の 1層に対応する。
- 2層-暗褐色混礫土層。1層と同じく戦後の造成土である。層厚は10cm~20cm。
- 3 層 灰オリーブ色土層。層厚は 15cm ~ 75cm。S.T.1 の 4 層に対応する。
- 4 層 黄褐色粘土層。地山直上の無遺物層。層厚は 15cm ~ 20cm。S.T.1 の 6 層、S.T.2 の 4 層、S.T.3 の 3 層に対応する。
- 5層-青灰色土層。調査区一帯の基盤層である第3紀泥岩(クチャ)。S.T.3の4層に対応する。

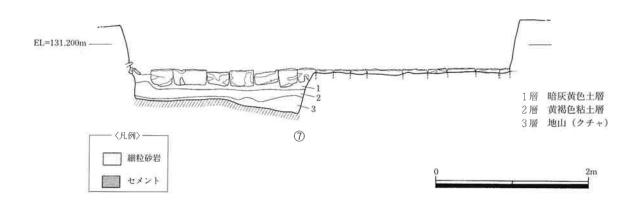
S.T.5 (第9図25)

- 1層-表土。層厚は10cm ~ 20cm。S.T.1の1層、S.T.2の1層、S.T.3の1層、S.T.4の1層に対応する。
- 22 層一暗褐色混礫土層。瓦片を多量に含む。層厚は 25cm ~ 30cm。S.T.1 の 2 層に対応する。

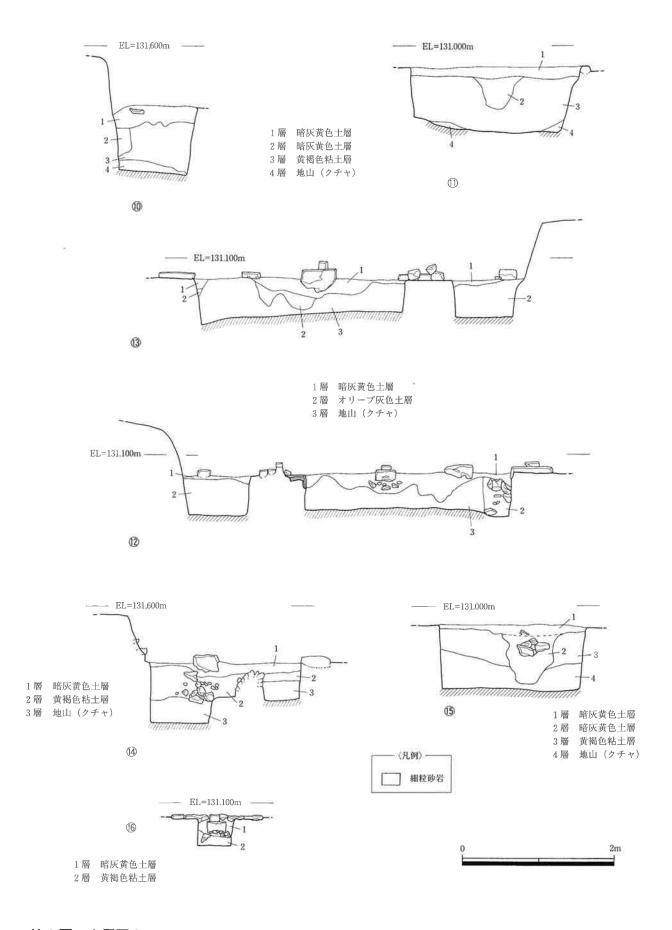
第6図 土層図1



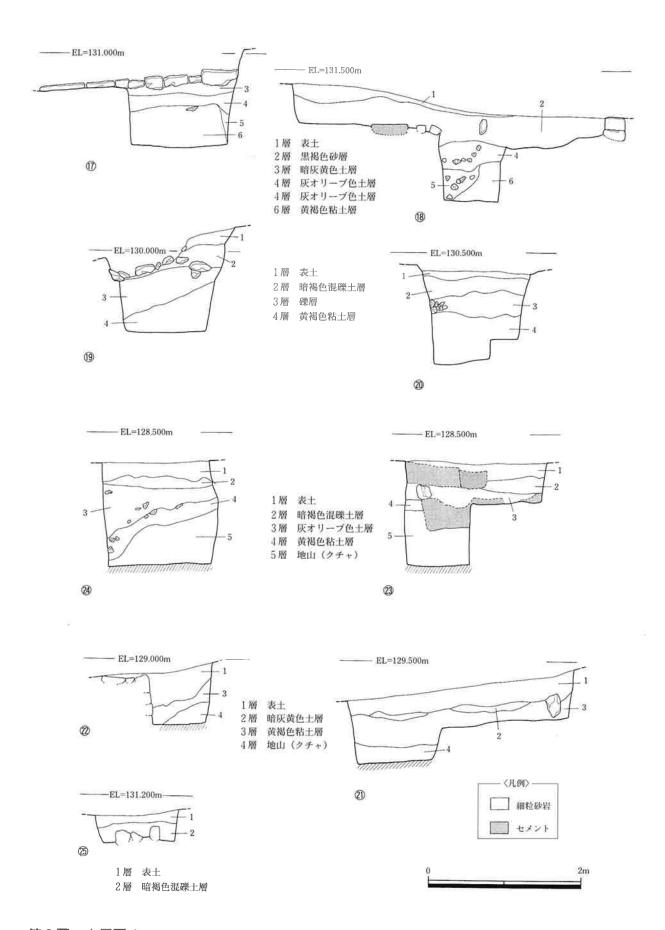




第7図 土層図2



第8図 土層図3



第9図 土層図4

第2節 遺構

今回の調査により、往時の御茶屋御殿の姿を想起させる遺構が多数検出されている。確認された遺構には建物跡・石列遺構・石積遺構・方形石組遺構・拝所様遺構があり、時期的には御茶屋御殿に関連する遺構と、御茶屋御殿創建以前にさかのぼる遺構とに大別される。以下にその概要を述べる。

1. 建物跡 (第11図)

御茶屋御殿内に所在した茶亭跡である。平面プランは上の間・次の間・控えの間・台所・廊下・簀子縁等からなる 12m×10.8mのほぼ長方形を基本として、北東側や西側に土間や玄関等の方形のプランがそれぞれ張り出した形状を呈する。バス車庫が隣接するため建物跡の東側半分・南西側コーナー部分・玄関の一部のみの確認にとどまったが、遺構の残存状態が非常に良好なため、今回の成果により茶亭の全容を把握することが可能である。

建物跡は周囲に石敷と地覆石を組み合わせた基壇を巡らせている。石敷には上面の平らな拳大のものが用いられ、この両側を長辺20~50cm×短辺10cmの地覆石で挟み幅50cmの基壇を形成している。基壇内側には礎石・狭間石・焼土、外側からは礎石・埋甕遺構・石敷遺構・石積遺構が検出されている。以下にそれぞれの詳細を記す。

礎石は基壇内側に 47 個、外側に 3 個確認されている。材質は琉球石灰岩と細粒砂岩(方言名:ニービヌフニ)が用いられ、寸法は前者が $30 \sim 40$ cm 四方とほぼ一定なのに対し、後者は小形($20 \sim 30$ cm 四方)のものと大形($40 \sim 50$ cm)のものとに大別される。いずれの材質の礎石も 1 間あるいは半間の間隔で配されており、礎石間には石灰岩の狭間石(長辺 20cm \times 短辺 10cm)が確認される箇所もある。これらの礎石群を見取図と照合すると、石灰岩礎石は床持柱を据える礎石に、細粒砂岩礎石は屋根柱を据える礎石に、それぞれグルーピングすることが可能である。これは細粒砂岩の大形礎石の中央に三角形のくぼみや正方形のほぞ穴?が穿たれていることからも推察される。しかし、一番座及び控えの間部分では礎石列の欠損や重複がみられるため、茶亭の改築や修復なども考慮に入れる必要があろう。また基壇地覆石に伴う礎石の直下からは、小形の細粒砂岩礎石が検出されている(簀子縁部分: 1地区 10、11 地区 10、11 地区 10、10 で確認)。

焼土は基壇内側の北西隅から 2 個検出されている。いずれも礎石列の西方向に並列しており、直径 $20\sim30\,\mathrm{cm}$ 、厚さ $3\,\mathrm{cm}$ を測る。性格については不明だが、付近が阪谷図面に土間と記されていること や、同所に「竈」らしき絵がみられることなどから、竈跡の可能性が高いと思われる。

埋甕遺構は基壇外側の北東隅に設けられた区画内から確認されている。検出された甕は口径 46.0 cm・器高 25.2cm・底径 20.0cm を測る沖縄産無釉陶器 (第 22 図 18) で、胴下半部を地中に埋設して設置されている。この種の遺構は首里城跡をはじめ多くの近世遺跡に類例があるが、甕の法量から防火用とは考えられず、後述する方形石組遺構に伴う手洗い用の水甕であったと考えられる。

石敷遺構は茶亭へ通じる石畳道の一部で、上面の平らな石を敷き詰めて路面を形成している。道の両側に側溝(排水路)は確認されなかったが、北側からは残存状態の良好な石積遺構が検出されている。これは面取りを施した琉球石灰岩(拳大~人頭大)をほぼ垂直に積み上げたもので、高さは50cmを測る。この両遺構の位置関係から石畳道の道幅は480cmと推定される。しかし石敷遺構は西側が破壊されているため、本来の形態に関しては判然としない。ただし周辺の地形や南側に残る石積との関連から、石畳道ではなくスロープ状の階段(磴道)であったと思われる。

以上、建物跡の特徴について略述した。次は遺構と歴史資料(見取図・古写真等)を照合することにより、簡単な茶亭の復元考察を試みる。以下、玄関・上の間・次の間・控えの間・台所・勝手口・廊下・簀子縁・屋根・平場造成の順に記す。

玄関:一部発掘。平面プランは桁行 1.5 間×梁間 1 間。西側には磴道が伸びていたと想定される。古写真には礎盤や沓脱石がみられるが、今回検出には至らず。

上の間:未発掘。平面プランは桁行2間×梁間2間、畳張りの8畳間である。見取図では部屋の南東隅に「床」あるいは「御床」がみられるが、これは古写真(註3)より変形床の一例である「蹴込床」であると確認される。また『冠船之時御座構之図』(註4)には、琉球国王及び王子等の使用する椅子が4脚認められる。

次の間:一部発掘。平面プランは桁行 1.5 間×梁間 3.5 間、畳張りの 10 畳半。田辺図面(註 2)では一部屋、阪谷図面(註 3)では 6 畳と 4 畳半の二部屋とそれぞれ表現が異なるが、用途に応じて使い分けがなされたと考えられる。

控えの間:一部発掘。平面プランは桁行2間×梁間1.5間、板張りの6畳間。『冠船之時御座構之図』 (註4)には「勅使様御休息所」と記されており、椅子や小便筒などが確認される。

台所:平面プランは桁行2間×梁間1間4尺、板張りの6畳間。しかし台所は通常土間の場合が多いため、この部屋は配膳室であった可能性もある。また部屋の東側、基壇縁石の外側に礎石が2個確認されるが、これは離れの厠への通用口であったと思われる。さらに部屋の北側には、埋甕に通じる桁行4尺×梁間1間4尺の縁(縁側?)あり。

勝手口:平面プランは桁行4尺×梁間1.5間、1畳半の土間である。北側の外壁付近から焼土が2個 検出されている。阪谷図面(註3)に「竈」らしき絵がみられるため、竈跡の可能性が高い。

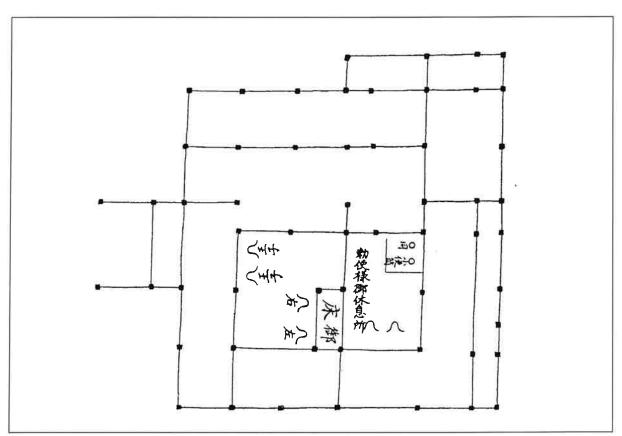
廊下:一部発掘。中央の三部屋(上の間・次の間・控えの間)の周囲に巡らされるもので、梁間は1間で半間の位置には床持柱を据える礎石(琉球石灰岩)が確認される。また遺構の形態から、南側廊下の外側には沓脱石の存在が想定されるが、今回検出には至らず。

縁:未発掘。平面プランは見取図から桁行1間×梁間3間、6畳の板張りと推定される。縁の外側に相当する建物外観を写した写真(註3)には2段の沓脱石が北側に3個、西側に1個確認される。

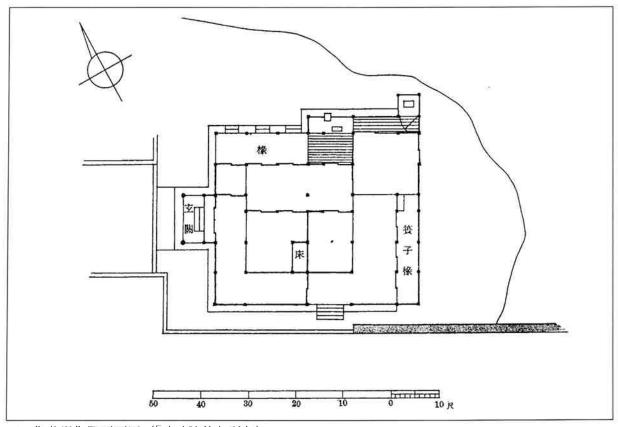
簀子縁:平面プランは桁行3.5間×梁間4尺、板張りと推定される。北側と西側の礎石間には狭間石が確認される。

屋根:屋根は古写真から入母屋造りの本瓦葺であり、明朝系瓦を漆喰で巻いていたことなどが確認される。瓦の詳細については、御茶屋御殿及び茶亭の創建年代(1677年または 1682年?)との比較や実際の出土状況などから、色調は主として酸化焼成による赤色を呈し、文様は上原分類(註5)によると軒丸瓦は第Ⅳ文様系 C 02、軒平瓦は第Ⅲ文様系 03 にそれぞれ相当すると考えられる。

平場造成:T.T.3-3の壁面で観察される。その手順は、①茶亭の建設場所(北から南への斜面地)の南側に土留め用の石積を巡らせ、②石積の内側に礫混じりの土を入れて水平な地盤を造るというもので、グスク等にみられる平場造成と同様の方法が用いられている。

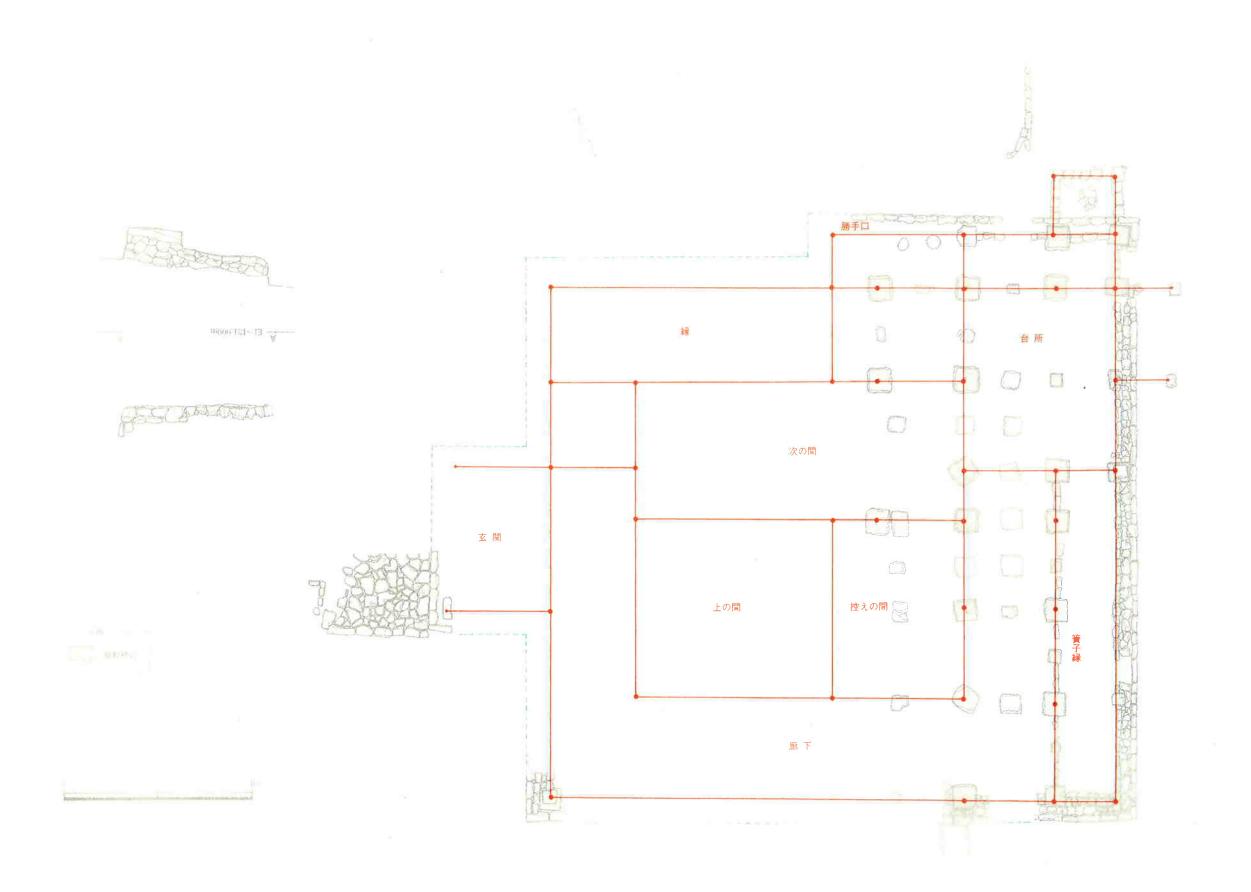


上:同次六年 丙卯年冠船之時御座構之図 (沖縄県立博物館所蔵)



下:御茶屋御殿平面図(「琉球建築」所収)

第10図 茶亭見取図(参考資料)



第11図 建物跡、石積遺構 1 · 石列遺構

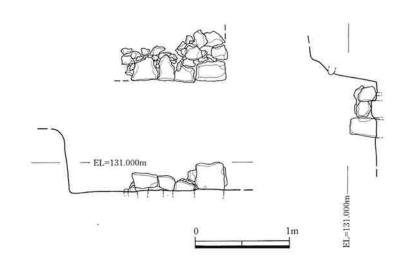
23

2. 石列遺構 (第11図)

建物跡北側より検出された。北側部分は調査範囲の関係で確認はできていないが、ひとつは南北方向へ軸をもち、その途中から他の石列が添え付く。建物跡と同様に旧表土面から検出されており、建物跡と同時代の遺構と思われるが、南側に延びていないことなどから関係は不明である。石材として石灰岩を使用し、直方体に加工している。建物跡で地覆石として用いられているものに類似している。注目すべき点として、熱を受けているものがあり、非常に脆くなっている。

3. 石積遺構 2 (第12 図)

本遺構は埋甕遺構の東側より検出された。平面形はL字形(長辺1.4m、短辺0.53m)を呈し、建物跡に面している部分には大きな石を配置している。旧表土より検出されており、建物跡と同時期と思われ、東側に位置する厠跡と建物跡の間にあった遺構の一部と考えられる。拳大の石が石積内部より検出されたが、石積の周りに僅かに確認される程度である。



第12図 石積遺構2

4. 方形石組遺構 (第13図)

第13図に示した遺構で、T.T.2より検出されている。本遺構は東側を除く三面に琉球石灰岩の切り石を垂直に積み上げて壁を作るもので、平面形が南東側に斜辺を持つ直角三角形を呈するが、これは土圧等の影響による結果で、本来の形態は東側に口を開いた長方形であったと思われる。床面は上面の平らな石を敷き詰め、西から東に傾斜しているが、ここも土圧等により変形が生じている。石組の長辺(東西)が170cm、短辺(南北)が75cm、深さは最も浅い西側で50cm、深い東側で100cmを測り、床面は17°の勾配を持たせている。

方形石組遺構の南側には、東側に面を持つ石積が確認されている。これも石組と同様に琉球石灰岩の切り石を垂直に積み上げたもので、残存高は約100cmを測る。石組の土台として築かれたものと考えられる。

遺構の機能については、阪谷良之進作成の見取図(註3)に「便所」と記載されていることや、類似の遺構が識名園(註6)で「小便室」として復元されていることから、茶亭に伴う離れの便所(おそらく小便専用の施設か)である可能性が高い。また自然科学的なアプローチとして、遺構内覆土の内容物に関する土壌分析も行っているが、その詳細は第VI章に譲る。

5. 石積遺構 3 (第14図)

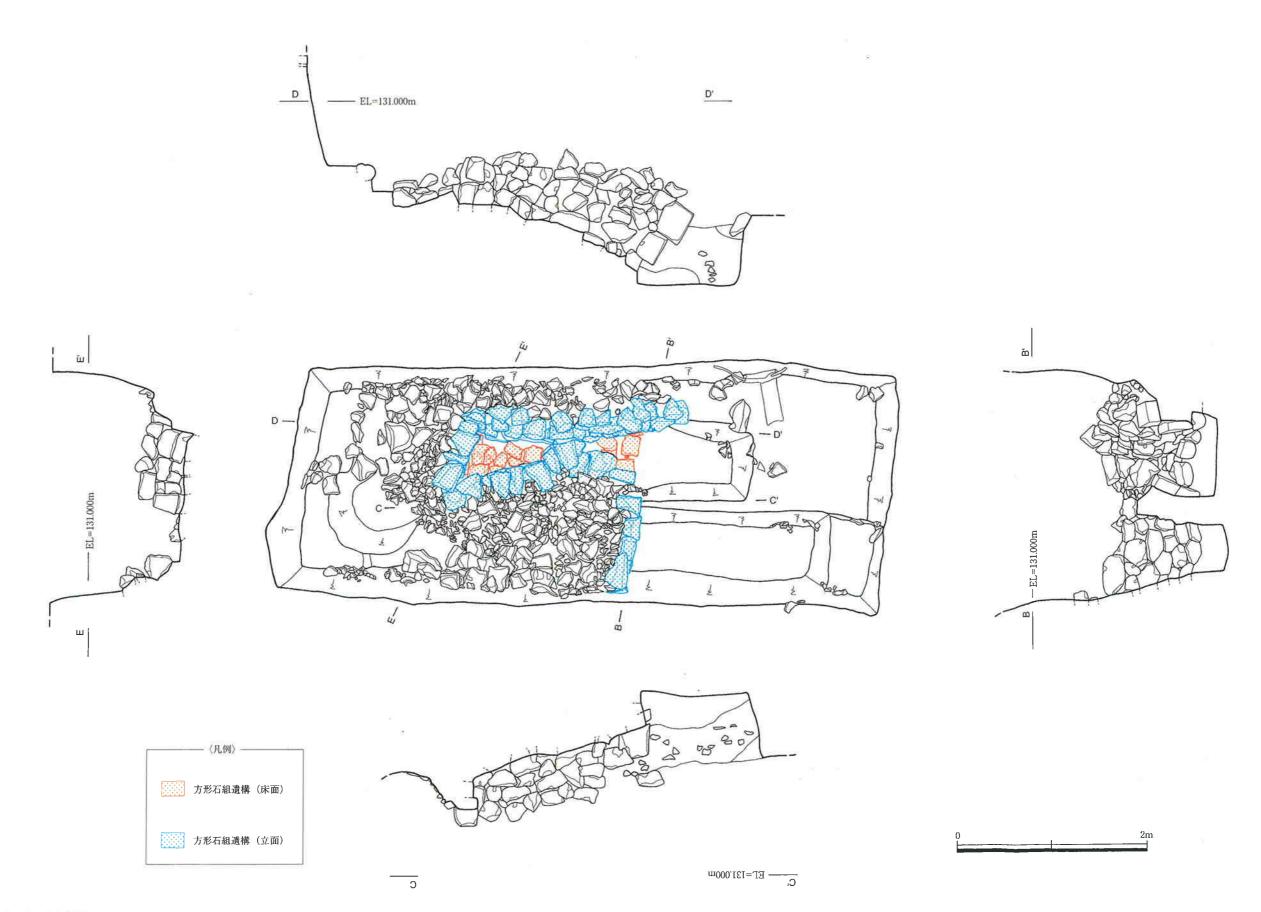
建物跡の下層から検出された遺構で、T.T.3-1 と S.T.3 にまたがって確認されている。片側を雑に面取りした琉球石灰岩(拳大~人頭大)をほぼ垂直に積み上げているもので、天端部分は欠損しているが残存状態は良好である。石材が小振りな点や控えの短さ(約 $110 \, \mathrm{cm}$)などから、本来それほど高い石積ではなかったと思われる。T.T.3-1 で東西に $410 \, \mathrm{cm}$ 、S.T.3 で南北に $150 \, \mathrm{cm}$ が検出されており、T.T.3-1 の西側で直角に折れるが、両トレンチとも石積の延長部分は確認できない。深さは T.T.3-1 の最も浅い東側で $50 \, \mathrm{cm}$ 、深い西側で $100 \, \mathrm{cm}$ を測り、S.T.3 の最も深い南側で $70 \, \mathrm{cm}$ 、浅い北側で $30 \, \mathrm{cm}$ を測る。T.T.3-1 検出の石積の上部には、 $5 \sim 10 \, \mathrm{cm}$ 大の琉球石灰岩の礫の集積がみられるが、これは茶亭建設時の造成に伴うものと考えられる。

遺構の性格については、S.T.3 で石積の内面が確認されているため、土留めではなく石垣の機能を有するものと思われる。また年代に関しては、前述したように建物跡の下層から検出されていることや、本遺構の南側に平場造成の痕跡が残ることから、御茶屋御殿の創建年(1677年)及び茶亭の築造年(1682年?)を遡る可能性が高いと考えられる。ちなみに首里周辺では、天界寺跡(註7)で構造・時期ともに近似する遺構が確認されている。

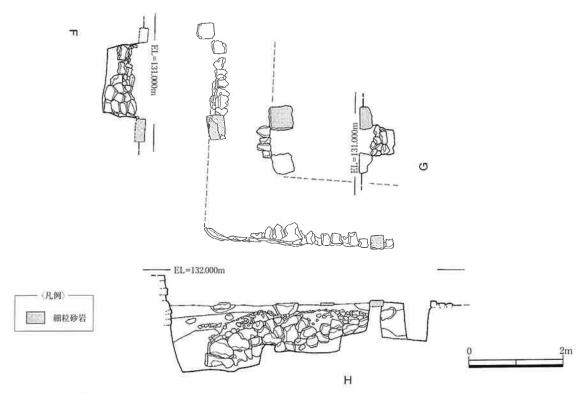
6. 拝所様遺構 (図版1)

T.T.3 の東側拡張区より検出された遺構である。琉球石灰岩の自然石を階段形に加工した後、上段上面部分に円形の溝(幅 10cm)、上段立面部分に方形の孔(長辺 20cm ×短辺 15cm、深さ 10cm)を刳り抜き、下段上面部分に直方体を 2 本(北側:長辺 35cm ×短辺 15cm・幅 10cm、南側:長辺 40cm ×短辺 20cm・幅 10cm)を削り出す。また方形孔の前面には、琉球石灰岩の石器様製品?(長辺 20cm ×短辺 10cm・幅 10cm)が 2 個配される。

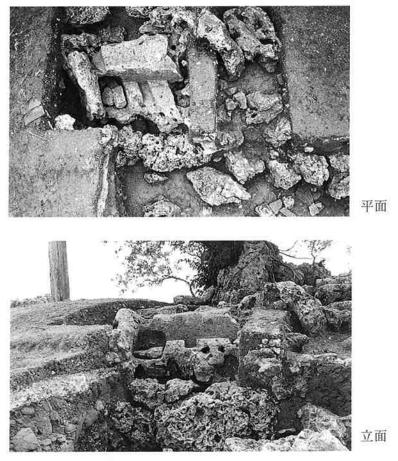
このような遺構は他に類例がみられず、おそらく県内初の検出例とみられる。そのため、機能や性格については判然としないが、その特徴的な形態から隣接する茶亭に伴うものではなく、茶亭の東側に位置する拝所(?)に関連する遺構ではないかと思われる。



第13図 方形石組遺構



第14図 石積遺構3



図版1 拝所様遺構

第V章 遺物

今回の調査により、中国産・タイ産・本土産・沖縄産の陶磁器の他、陶質土器・瓦質土器・土器・瓦・円盤状製品・銭貨・金属製品・煙管・石製品・貝製品・自然遺物などの多様な遺物が得られている。時期的には御茶屋御殿の創建期である17世紀後半を上限とするものが主体をなすが、16世紀以前に遡る遺物も確認されている。また少量ではあるが、役瓦(第25図14、15)や額受(第29図1)など、注目される遺物も出土している。以下、種類別に報告する。

第1節 青磁

中国産の青磁は総数 26 点の出土で、時期的には 15 世紀~ 16 世紀頃に相当するものが多数を占める。碗・皿・盤・瓶・酒会壺などの器種が確認されているが、資料の大半が小破片であるため、特徴的な資料を第15図に図示した。ここでは各器種の分類概念を記し、個々の観察所見は第 2 表に提示する。

1. 碗 (第15図1~10)

碗は器形や文様等の特徴から I 類と II 類に分類した。この中でさらに細分類が可能なものについては a、b などに分類した。

Ⅰ類:口縁部が外反するもの。外面に陰圏線を巡らせるもの(1、2)と無文のもの(3)がある。

Ⅱ類:直口口縁を呈するもの。文様の種類から2種類に細分される(4~10)。

- a 外面口縁部に雷文帯を巡らせるもの。内面は胴部に型押しの唐草文を施すもの(4、5)が みられる。
- b 外面に箆描きの細蓮弁文を施すもの(8、9)。内面の文様の有無は不明。

Ⅱ類底部:畳付の外側に面取りを施す肉厚の底部である。Ⅱ類に対応するものと思われる(10)。

2. 皿 (第15図11)

皿は底部が1点出土している。直口皿に対応すると思われるもので、内面に陽圏線と花弁文を施す。

3. 盤(第15図12)

鍔縁口縁を呈するもので、内面に箆彫りの蓮弁文を施す。底部の形態は不明。

4. 瓶 (第15図13)

玉壺春瓶の胴部と考えられる資料が1点出土している。小破片のため文様の有無は不明。

5. 酒会壺 (第15図14)

酒会壺は口縁部が1点出土している。外面に文様の一部が確認される。

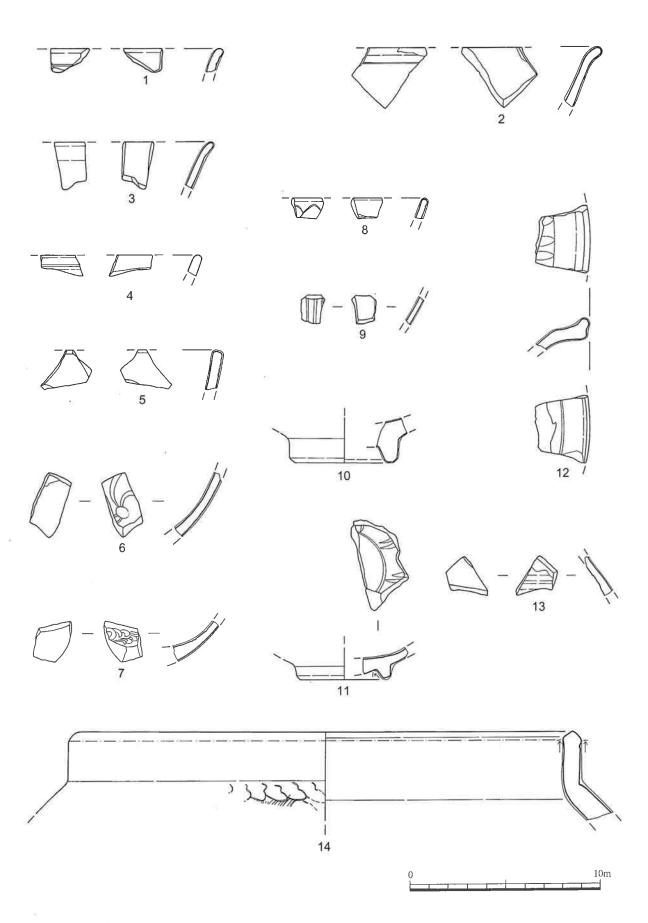
第1表 青磁出土状況

/		出:	土地					I地区					地区		Ⅲ地区		
				Т.	T.1	T.T.2	0 🗟	T.T.3-1	T.T.3-3	東側	T.T.4	1層	S.T.2-2	S.T.1	S.T.2	S.T.4	合計
器和	重・分	子類		1層	4層	1層	2層	4層	1層	拡張区	2層	1	2層	1層	2層	2層	
		Ι	川胴		1.		1					·····i	1				
500		а	口胴	<u>1</u>					······································	1				1			4
碗	П	b	口胴									1			********		
	不	田田	底胴			1		1	1	1		1			1		
	盤	71	底			1		1	1	1		1					
			旧胴				•••••	**********	*******		<u>1</u>		1			*******	*****
	瓶会引	Ē	胴口		1	1											
7	下明		胴胴	1												2	
合	Ē	Ť		2	2	3	1	1	2	2	3	3	2	1	1	3	26

第2表 青磁観察一覧

単位:cm

			1	_				≠ D U
図	番号	器種 分類	部位	法量	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等	出土地
	1			-	外面に陰圏線。全面に気泡(被熱 の跡?)あり。	灰白色の微粒子 で緻密。	明緑灰色の釉を両 面に施釉。	I 地区 T.T.3 2層
	2	碗Ⅱ		-	外面に陰圏線。全面に気泡(被熱 の跡)あり。	灰白色の微粒子 で緻密。	明緑灰色の釉を両 面に施釉。	Ⅲ地区 S.T.2 2層
	3		П	-	外面に稜線(陽圏線?)。釉薬の発 色は悪い。	でやや緻密。	面に施釉。	T.T.1 4層
	4		П	=	外面に線彫りで雷文。両面に細か い貫入あり。	浅黄色の細粒子 でやや緻密。	明黄緑灰色の釉を 両面に施釉。	I 地区 T.T.3 東側拡張区
	5	碗 - Ⅱ - a		=	外面に型押しで雷文を施すが不明瞭。部分的に石灰が付着。釉薬の 発色は悪い。	灰白色の微粒子 で緻密。	明黄緑灰色の釉を両面に施釉。	Ⅲ 地区 S.T.1 1 層
	6	l a	胴	-	内面に型押しで花唐草文を施すが 不明瞭。両面に貫入あり。	灰白色の微粒子 で緻密。	明緑灰色の釉を両 面に施釉。	I 地区 T.T.3 -3 1層
第 15 図	7		胴	-	内面に型押しで牡丹唐草文?を施 す。両面に貫入あり。	灰白色の微粒子 で緻密。	黄緑灰色の釉を両 面に施釉。	I 地区 T.T.1 1層
(図版	8	碗			外面に線彫りで細蓮弁文。両面に 細かい貫入あり。	灰白色の細粒子 でやや緻密。	淡黄緑灰色の釉を 両面に施釉。	Ⅱ地区 1層
111	9	Ⅱ -b	胴	-	外面に線彫りで細蓮弁文(弁先の 形態は不明)。	灰白色の微粒子 で緻密。	黄緑灰色の釉を両 面に施釉。	Ⅲ地区 S.T.4 2層
	10	碗 II	底		両面に細かい貫入あり。 焼成不 良。	浅黄色の細粒子 でやや緻密。	灰黄緑色の釉を全 面施釉 (外底のみ円 形釉剥ぎ?)。	Ⅲ地区 S.T.2 2層
	11	Ш	底	4.6	内面に片切り彫りの花弁文、内底 に陽圏線を巡らす。両面に細かい 貫入あり。	次 男 巴 の 神 和 丁 で わ わ 粉 恋	明黄緑灰色の釉を 全面施釉後、外底を 円形釉剥ぎ。	I 地区 T.T.2 1 層
	12	盤					黄緑灰色の釉を両 面に施釉。	I 地区 T.T.4 2 層
	13	瓶	胴	- 1	小片のため文様の有無は不明。内 面に轆轤痕が残る。		淡黄緑灰色の釉を 外面のみに施釉。	I 地区 T.T.2 1 層
	14	酒会壺		270		が日色の 做私丁 で 数変	明緑灰色の釉を施 釉後、口唇部の釉を 掻き取る。	I 地区 T.T.1 4 層



第15図 青磁 碗 $(1 \sim 10)$ 、皿 (11)、盤 (12)、瓶 (13)、酒会壺 (14)

第2節 白磁

白磁は出土総数9点と少なく、器種は碗、皿である。そのうち3点を図化した。時期は口禿皿の13世紀中葉~14世紀前半を古手として、外反口縁碗の16世紀中葉~17世紀前半と幅広い。

第16図1は碗の口縁部片。直線的な胴部から口縁部端で外反へと向かう。器厚は薄く、釉も薄く施されている。胎土は灰白色。釉は白色釉。I地区 T.T.2 の3層出土。

第 16 図 2 は皿。外側に開く高台から緩やかに直口口縁へ至る。胎土及び釉色ともに白色。口縁部及び畳付、外底中心部は無釉。高台に砂が付着する。口径 8.1cm、器高 2.1cm、底径 5.4cm。 I 地区 T.T.2 の 3 層出土。

第16図3は口禿皿。口縁部外面を平坦にし、口唇部を尖らす。胎土は淡灰白色で、釉は緑明灰色。 口縁部の釉を剥ぎとって口禿としている。Ⅲ地区S.T.4の2層出土。

<u>স্ </u>		<u>жшт1</u>						
1	出土地		I地区		Ⅱ地区	<u> </u>	也区	
		T.T.2		T.T.3-2	2層	S.T.1	S.T.4	合計
器種		3層	2層	1層	遺構内	1層	2層	
碗		1						1
	口~底	I	000/103					1
					I	1	2	4
	胴		1					1
小杯				1				1
袋物	胴		1					1
合	計	2	2	1	1	1	2	9

第3表 白磁出土状況

第3節 染付

染付は碗、皿、小杯など総数33点出土し、最も多いのは碗であり、そのうち12点を図化した。産地では福建・広東系及び徳化窯系が多い。時期的には古手のものは15世紀代であり、新手のものは18世紀代まで下る。以下に個々の観察を記す。

第 16 図 4 は腰部から口縁部へ直線的に至る。文様は外面胴部に雲文?及び草文?を 3 ヶ所に施文する。胎土は乳白色で黒色粒子を含む。釉は淡灰白色で、外面は高台際及び外底面に施釉し、内面は見込を蛇の目釉剥ぎ。釉は全体的にムラがあり、接着の良好な部分と不良の部分がある。呉須は発色が悪く、黒味を帯びる。口径 12.7cm、器高 5.8cm、底径 6.8cm。 I 地区 T.T.1 の 4 層出土。

第16図5は口縁部端が外反し、胴部は直線的な碗である。外面胴部に草花文?を施文する。胎土は乳白色で黒色粒子を含む。釉は淡黄灰色で全体に細かい貫入が入る。呉須の発色は悪く、黒味を帯びる。口径12.6cm。 I 地区 T.T.1 の 1 層出土。

第16図6は碗の口縁部片。文様は外面に略された波濤文を施文する。胎土は灰白色。釉は黄灰色。 呉須は黒味を帯びる。Ⅱ地区2層遺構外出土。

第 16 図 7 は碗の口縁部片。口縁部端で外反する。文様は外面口縁部に圏線、胴部に寿字文、内面口縁部に圏線を施文する。胎土は灰白色。釉は白色。 I 地区 T.T.2 の 2 層出土。

第16図8は碗の胴部片。外面胴部に仙芝祝寿文、内面胴部に圏線を廻らす。胎土は灰白色。釉は白色。 I 地区 T.T.2 の 1 層出土。

第16図9は小振りの碗の口縁部片。口縁部端で外反する。文様は外面に宝文?、内面口縁部に圏線を施文する。胎土及び釉は白色。出土地I地区不明。

第 16 図 10 は小振りの碗。文様は宝文?。胎土及び釉は白色。 I 地区 T.T.3 の 2 層出土。

第 16 図 11 は口縁部が緩やかに外反する皿。文様は外面口縁部に圏線、内面口縁部に圏線、胴部に 雲状の文様を施文する。胎土は淡灰白色。釉は白色。 I 地区 T.T.3 の 2 層出土。 第 16 図 12 は口縁部が緩やかに外反する皿。文様は内面口縁部に圏線、胴部に草花文を施文する。 胎土及び釉は白色。Ⅱ地区 2 層遺構外出土。

第 16 図 13 は皿の底部片。外面高台際に圏線、見込に十字花?を施文する。胎土は淡灰白色。釉は 青灰白色。底径 7.0cm。 I 地区 T.T.1 の 1 層出土。

第 16 図 14 は皿の底部片。文様は「志在書中」図の一部。胎土は灰白色で黒色粒子を含む。釉は青灰色。底径 8.4cm。 I 地区 T.T.2 の 1 層出土。

第16図15は小碗の口縁部片。文様は外面胴部に人物文、欄干?を、内面口縁部に四方襷文、宝文? を廻らす。口径7.6cm。Ⅱ地区2層遺構外出土。

第 4 表 染付出土状況

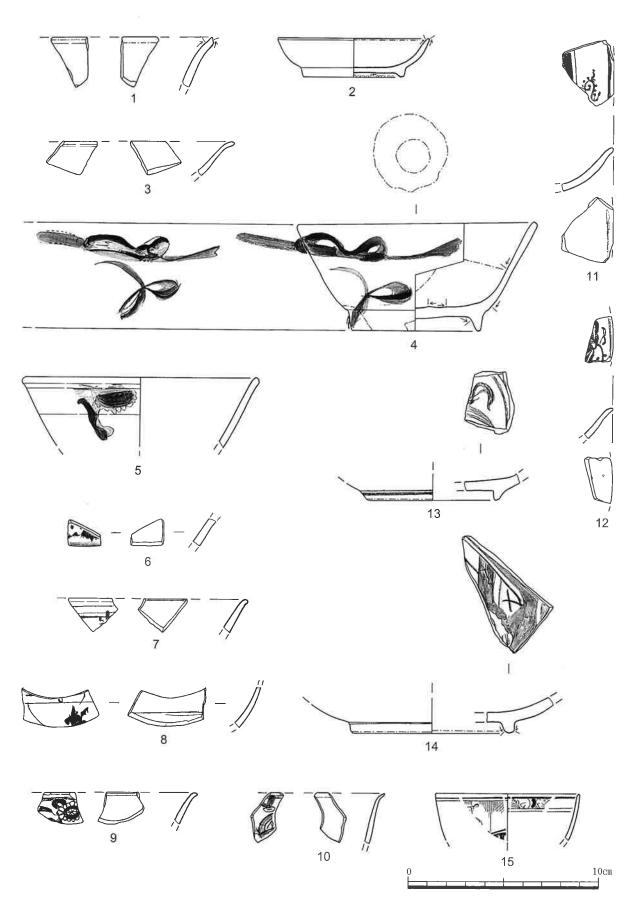
	出土地					I地	X						Ⅱ地	X.			<u>II</u> ‡	也区		
/			T.T.1			T.T.2			T.T.3 東側	不明	1層	2層	2	層	S.T.3	S.T.1	S.T.2	S.T.4	S.T.5	合計
器種		1層	4層	不明	1層	2層	3層	2層	拡張区				遺構内	遺構外	1層	1層	2層	2層	1層	
	口~底		- 1		STOCK O			own:		esserve!		30703	2330000							1
碗		1				1		1		1	1	1							1	7
11972	胴	1		1	2				1		3		2	1		1		1		13
	底						1				1						200000	YACCO'R.	22.000.00	2
小碗					1)							1						2
	口					9	9	1				1								2
Ш	胴																		1	1
	底	1			1															2
小杯	师																1			1
瓶	胴														1					1
合子 or 蓋付き 碗?	П												1							1
合	計	3	1	1	4	1	1	2	1	1	5	2	3	2	1	1	-1	1	2	33

第4節 褐釉陶器

褐釉陶器は27点出土している。大半が破片資料であるため特徴的な資料を第 図に図示した。確認されている器種は壺のみで、I類(1~4:肩を強く張る短頸壺で、底部は上げ底を呈するもの)とⅡ類(5、6:I類に比して胴部成形が丁寧で、内面が無釉のもの)に分類される。1は□縁部で、断面形態が方形を呈し□唇部を水平に削る。両面に黒褐色の釉薬を施釉する。I地区 T.T.1 の 4 層出土。2は□縁端部を玉縁状に成形し、直下に抉りを入れる。釉薬は剥落が著しい。I地区 T.T.1 の 3 層出土。3は肩部に相当する資料で、素地は精選された灰白色微粒子である。両面に暗黄緑褐色の釉薬を施釉する。I地区 T.T.3 − 1 の 4 層出土。4 は両面に轆轤痕が残る胴部である。両面に黄褐色の釉薬を施釉するが剥落が著しい。Ⅱ地区 1 層出土。5 は内面に轆轤痕が残る胴部片で、釉薬は剥落が著しい。Ⅰ地区 T.T.2 の 1 層出土。6 も同様に内面に轆轤痕が残るが、5 に比して成形は丁寧である。外面に黄緑褐色の釉薬を施釉する。Ⅱ地区 2 層遺構内より出土。

第5表 褐釉陶器出土状况

	Н	土土地						地区					II	地区			Ⅲ地	IX			
					T.T.1			Т.Т	.2	0 🖼	T.T.3-1	T.T.3-3	1層	2層	S.T.1	S.T.2	S.T.3	S.	Γ.4	S.T.5	合計
器種	・分類		1層	2層	3層:	4層:	不明	1層:3	層	2層	4層	1層		遗構内	1層	2層	1層	1層	2層	1層	
					1	1															2
-1-	1	胴	1	1			1	2.	1	1	1		1	1	1	1	2	1	1		16
壺	II	胴						1				-1		1						1	4
	不明	胴	1												2		1				4
不	明	胴	1																		1
-	01	rt-	3	1	1	1.	1	3:	1	1	1	1	1	2	3	1	3	1	1	1	27



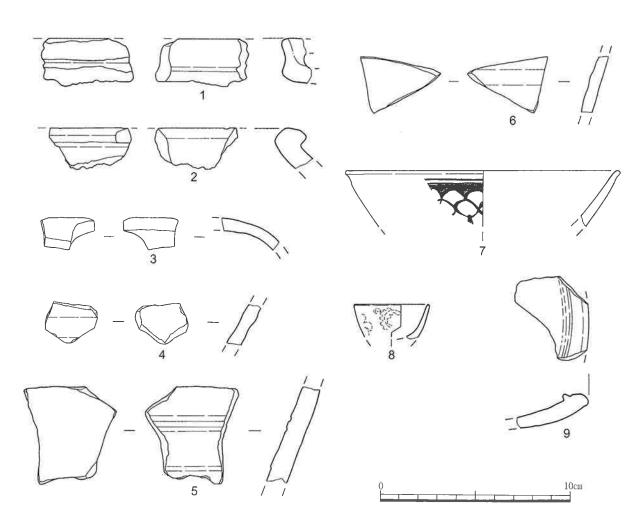
第16 図 白磁 碗 (1)、皿 $(2 \cdot 3)$ 染付 碗 $(4 \sim 10)$ 、皿 $(11 \sim 14)$ 、小碗 (15)

第5節 色絵

色絵は2点出土している。第17図7は碗の口縁部であり、口縁部で一旦窄まる。文様は口縁部に赤色の圏線、胴部に赤色により花卉文を配し、その周りを緑色で塗る。口径14.6cm。Ⅲ地区S.T.5の1層出土。第11図8は小杯である。胴部から口縁部にかけて直線的な器形を呈する。文様は外面胴部に唐草文を描く。口径4.0cm。Ⅰ地区T.T.4の2層出土。

第6節 タイ産半練

タイ産半練は蓋が1点出土している。第17図9は落し蓋の形状を呈する蓋の端部で、先端を内側に 折り曲げ断面三角形に成形する。両面に器面調整の痕跡が残るが、特に裏面に箆削りが集中する。器 色は淡橙色で、素地には石英と鈍橙色鉱物を多量に含む。II 地区2層遺構外より出土。



第17図 褐釉陶器 壺 $(1 \sim 6)$ 色絵 碗 (7)、小杯 (8) タイ産半練 蓋 (9)

第7節 本土産陶磁器

今回の調査により得られた本土産陶磁器は、磁器では染付・色絵・型紙摺り・銅版転写・青磁・白磁、陶器では肥前・備前・関西系などの種類があり、器種は碗・小碗・小杯・皿・段重・急須・鉢・擂鉢・蓋物などが確認されている。時期別に見ると近代に相当する資料が多数を占め、近世やそれ以前に遡るものは少ない。以下にそれぞれの分類概念を述べ、詳細は観察表に示す。

1. 染付(第18図1~7)

碗 直口口縁を呈するもので、内底に荒磯文を施す(1)。

小碗 口縁部が外反するもの。外面に吉祥字を施す(2、3)。

小杯 口縁部が外反する型造りのもの。外面に芭蕉文(4)や鋸歯文(5)が施される。

皿 上面観が方形を呈する角皿である。内面に山水文を施す(6)。

2. 色絵(第18図7)

色絵は皿が1点出土している。口縁部が内湾する型造りのもので、内面に唐草文を施す。

3. 型紙摺り (第18図8~13)

碗 I類:腰部の張りが強く口縁部が外反するもので、文様の種類により①外面全体に点描文を 施すもの(8、9)と、②外面全体に花唐草文を施すもの(10)とに分類される。

Ⅱ類:高台から逆「ハーの字状に立ち上がるもの。外面に鳳凰文や桐文を施す(11)。

皿 口縁部が波状を呈する皿で、高台を蛇の目凹形に成形する。内面全体に点描文を施す(12)。 段重 全形が円筒状を呈する浅手の段重である。外面に微塵唐草文を施す(13)。

4. 銅版転写 (第19図14、15)

小碗 口縁部が外反するもの。外面に松文を施す(14)。

亜 玉縁口縁を呈する内湾器形の皿である。内面に四方襷文などを施す(15)。

5. 青磁 (第19図16~18)

小碗 直口口縁を呈する型造りのもの。外面に飛鉋を施す(16)。

小杯 口縁部が逆「ハ」の字状に広がるもの。外面に圏線を巡らす(17)。

合子 口縁部外面を削り蓋受部を設けている。文様の有無は不明(18)。

6. 白磁 (第19図19、20)

小杯 口縁部が外反する型造りの小杯。畳付のみ露胎とする(19)。

急須 外底を弧状にくぼませる薄手の急須。染付の急須の可能性もある(20)。

7. 陶器 (第19図21~29)

碗 全形の窺える資料に乏しいため、口縁部(21)と底部(22)の2点を図示した。

小碗 口縁部が直口するもの。文様は見られない(23)。

小杯 小碗と同様に直口口縁を呈するもの。外面に笹文を施す(24)。

皿 底部から斜上方に直線的に立ち上がるもので、胴部でわずかに内側に屈曲する(25)。

急須 急須は胴部が球形のもの(26)と、全形が円筒状を呈するもの(27)がある。

鉢 底部からほぼ垂直に立ち上がるもの。口縁部が断面略L字状を呈する(28)。

擂鉢 底部から逆「ハ」の字状に立ち上がるもので、内面に擂目が確認される(29)。

第6表 本土産陶磁器出土状況

1	\	出土地					12			I地区	(Ⅱ地区			Ⅲ:	地区			
	1			т	T.1			T.T.2				T.T.	3		TT.			0.177	e maa	0.001	-	т 2		X.00	
200		/								1 28	2屋	T.T.3-2	T.T.3-4	東側	1,1,4	不明	1層		S.T.2-2			1,3	不明	不明	合言
器	種・分	類	1層	2層	4 /2	3.1不明	1層	2層	3層	工/質	2 19	1層	1層	拡張区	2層			遺構内 遺構外	1層	1層	1層	3層			L
		D			1				:								2		ļ			ļ			ļ
	碗				ļ	.1!	1	1	i	1					1		2	1	1			L			
		腿	1	-	1																				
	小碗			1	ļ	. .	ļ	. 2	ļ			1						1 1	2						
染		196-	_	_	1	1	_	1									1								
(t)	小杯	口~底			ļ	.ļ		ļ														E	1		
-				<u> </u>	<u> </u>	1	-														1				
	M	口~底			ļ		1 1	+																	
H		_	-		<u> </u>	-	-	1						1				1				K			
+	小明	胴		2	-	-	+-	1	_					1											
法公正	Ш.	口~底			ļ	. .	ļ	į			1														
-	$\overline{}$			-		+	1			1							_			- 1	3				
	т	口~底			ļ	÷	+	į									1			o.e.					
	碗	胴		1	ļ	. 	+	į							1						1				
E E	П	底口			1	+	-									1	1		-	_	1 3			-	H
武習)	_	口一底				-	-	-								- 2		1		-				-	H
1		叫			ļ	÷	+									1									
ı		族				-																			
ŀ	段後	口~底		-		1					-									_	1	-		-	H
-+	小碗			-		1-	-			-					-		7			-	1		-	-	-
		口~底	-	- 3			-			-				-		-	1			_	-				-
同反ぶる						÷	ļ				2222	2000					1								
7		底	•	****		÷	+	ļ									1								
+	颜			-8		1				-				1	-	-	- 1			_	-	-	-	-	H
ŀ	小碗									-				- 1		-	1						-	1	-
н	小杯			-			1			\rightarrow		-			-		- 1			-	-		-	- 4	
-	合子								7						-	-				1		-	-		_
t	_	口~底							\neg		\neg	-	-		\dashv	-				-1	-	-1	-	=	
1	小杯				****	†*****	1					******					1	1	1						
1		底				-				+		*****	******		*****					****	1	****			
1	急須	底					1		=				_			-					-1				
-	不明	胴	Ī				1	-	-	-1	1												-		
t		П					1			-	Ť				-		_	1		-		\rightarrow	-	-	
	碗	厕			••••	†****	1										1								•••
I		嗾	+			+				†											1				
1	小碗									_	2				-		1			1			-1	-1	
-	小杯	П							-	_	-			-		_	-			-	-	1	_	-	
-	_	口~底	1						\rightarrow	_						-					- !		-		
T		п								+	-	-1		-	\rightarrow	-	2			\dashv	_				
1	急須	胴			7777		****	2									1					****			
	鉢		1							+	-			-	\dashv	-	- 1				- 1		-		
⊢	雷鉢	pp p	1	-				- 1		_					\rightarrow	-	-				1				
\vdash	下明	胴		-		1	1	1	1		+		1	1	\dashv	-	-	1	-		1	-			
-	明	胴			1					_	+	-		- 1	\rightarrow	-	-					\rightarrow	_		-
合	_	at:	5	4	1	\vdash	10	6	1	2	4	1	1	4	2	2	18	4 5	-4	3	9	1	1	a	9

第7表a 本土産陶磁器観察一覧

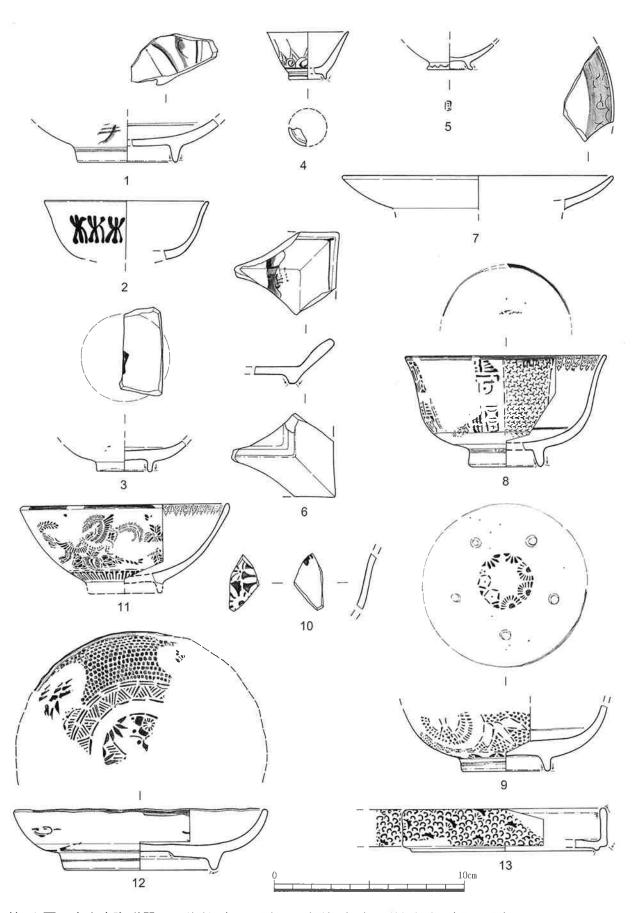
単位:cm

	21	<u> </u>	··/-	LI WAN GALL	ロトント	一元			中JY . CIII
図者	番号	種類	器種 分類	部位	口径	器高	底径	観 察 事 項	出土地
	1		碗	底	=	8	5.3	外面に雲龍文?·圏線、内底に二重圏線·荒磯文を施す。 畳付に砂目が付着。(肥前 1660~1670年代)	I 地区 T.T.1
第 18 図	2	染 付	小碗	口	8.7	=		口錆。外面に吉祥字?を施す。(瀬戸·美濃? 明治~大正)	Ⅱ地区 2層遺構内
	3		/J・19/E	底	_	S===	2.9	外面に吉祥字?、内底に文字(銘か?)を施す。(瀬戸·美 濃 明治~大正)	Ⅱ 地区 1 層

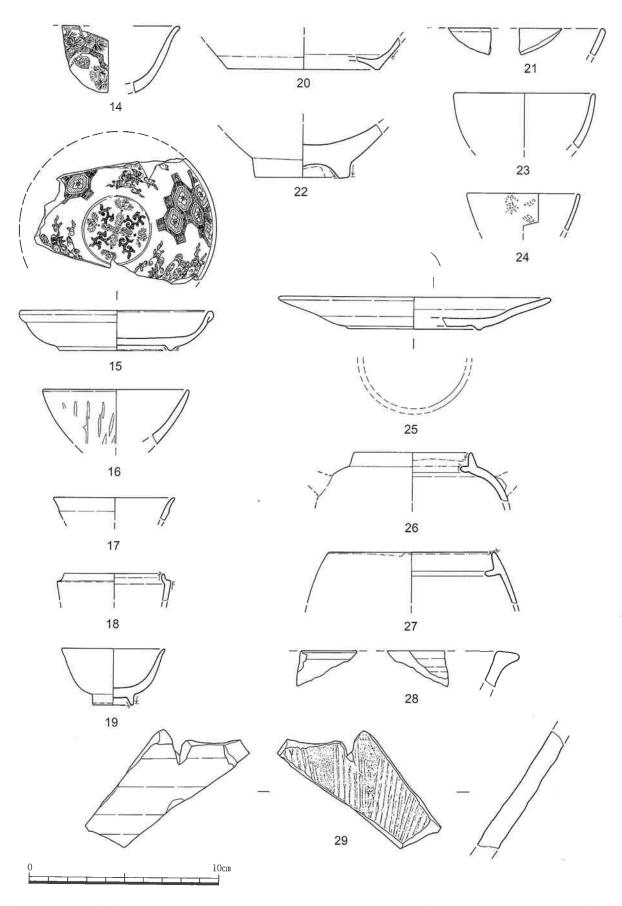
単位:cm

第7表b 本土産陶磁器観察一覧

_					地区	、 見	_		里位:c
図	番号	種類	器種 分類		口径	器高	底径	観察事項	出土地
	4		小杯	口~底	4.4	2,5	2.0	外面に芭蕉文と渦文の組み合わせ・二重圏線、外底に圏線と銘(大明?)を施す。(肥前 1650~1660年代)	不明
	5	染付		底	=	-	2,4	外面に櫛歯文、外底に銘?を施す。色絵の可能性あり。(瀬戸・美濃? 明治~大正)	S.T.3 1層
	6		Ш	口~底	-	2.4	_	内面に圏線、内底に山水文を施す。畳付に砂目?が付着。 (国産 明治)	I 地区 T.T.2 1 層
	7	色絵	Ш	П	14,4	ř-	-	内面は赤地に金・青で唐草文?を施す。(国産 明治)	I 地区 T.T.2 1 層
第 18 図	8			口~底	10.6	5.9	4.0	口藍。外面は崩れ毘沙門亀甲文地?に方形区画(中に福・寿字)・圏線、内面に瓔珞文、内底に圏線・三友文を施す。 (国産 明治~大正)	Ⅱ 地区 1 層
(図版13	9	771	碗 I	底	-	=	5,0	外面は点描文地に円形窓絵(中に鶴)+松・圏線、内底に圏線・三友文を施す。内底に目跡が5個残る。(国産 明治~ 大正)	I 地区 不明
	10	型紙摺		胴	=	=	8-3	外面に花唐草文、内面に瓔珞文?を施す。(国産 明治~ 大正)	Ⅲ地区 S.T.3 1層
	11	h	碗 II	П	11.0	(4.7)	(3.9)	口藍。外面に鳳凰+桐の組み合わせ・花弁文・圏線、 内面に瓔珞文を施す。(国産 明治~大正)	Ⅱ地区 1層· 2層遺構外
	12		Ш	口~底	13.3	3,2	8.0	口藍。外面は花唐草文・圏線、内面は点描文地に花弁 形窓絵(中に水仙・梅花?)、内底に檜垣文・三友文を 施す。内底に目跡が2個残る。(肥前系 明治〜大正)	I 地区 不明
	13		段重	口~底	10.4	3.3	9.8	外面全体に微塵唐草文を施す。外面腰部と口唇部を釉 剝ぎする。(肥前 明治~大正)	Ⅲ地区 S.T.3 1層
	14	銅版	小碗	П	-		=	外面に松文を施す。(瀬戸・美濃 明治後半~大正)	Ⅱ 地区 1 層
	15	転写	Ш	口~底	10,3	2.1	6.0	内面に四方襷文・雲文・二重圏線・十字花文を施す。 (瀬戸・美濃 明治~大正)	Ⅱ 地区 1 層
	16		小碗		7.8		=	外面に飛鉋を連弁文状に施す。(瀬戸 明治~)	不明
	17	青磁	小杯	П	6.4	2. 			I 地区 T.T.2 1 層
	18		合子	П	5,2	P===			Ⅲ地区 S.T.1 1層
	19	白磁	小杯	口~底	5.5	3.0	2,2	全面施釉後、畳付を釉剥ぎする。(瀬戸 明治~)	Ⅱ 地区 1 層
	20	和紅	急須	底		-	0.0	~)	I 地区 T.T.2 1 層
第 19 図 -	21		碗		-8	-		両面に黒釉を施釉する。沖縄産の可能性あり。(国産 19c?)	I 地区 T.T.2 1 層
	22		196	底	2-5	-			Ⅲ地区 S.T.3 1層
以(3)	23		小碗	П	7.4			貫入がみられる。沖縄産の可能性あり。(国産 19c)	I 地区 T.T.3 2層
2	24	,	小杯	П	6.0) =			Ⅲ地区 S.T.3 3層
2	25	陶器	Ш	□~底	14.4	1.7	7.0	主曲に口10位を施した後、透明袖を施袖する。外底に 丸彫りの凹線(圏線?)を巡らす (国産 明治~)	I 地区 T.T.1 1層・ T.T.2 1層
2	26				6.2				Ⅱ 地区 1 層
2	27	Ä	急須	П	8.8	-	_	無釉陶器。外面に文様の一部がみられる。内面に轆轤痕が残る。口唇部に淡着痕?がみられる、沖縄産の可能性あ	II 地区 1 層
2	8		鉢		=	_		Same Day and American Control of the	I 地区 F.T.1 1層
2	9	村	雷鉢	胴	_	_		無釉陶器。内面に6本櫛の擂目を右回転で施す。両面に轆]	III 地区 S.T.3 1 層



第18図 本土産陶磁器 1 染付($1\sim6$) 色絵(7) 型紙摺り($8\sim13$)



第19図 本土産陶磁器 2 銅板転写 $(14\cdot15)$ 青磁 $(16\sim18)$ 白磁 $(19\cdot20)$ 陶器 $(21\sim29)$

第8節 沖縄産施釉陶器

器の表面に釉薬を塗布するもので、方言で「上焼(ジョウヤチ)」と称される。施釉される釉薬は灰釉・鉄釉・白釉(白化粧+透明釉)などがあり、その上に呉須や飴釉で文様を施すものもある。器種は碗・小碗・皿・鉢・鍋・壺・急須・酒器・瓶・蓋などが確認されているが、碗や小碗に代表される小形の飲食器が多数を占める。以下に各器種の分類概念を記し、個々の詳細は観察表に示す。

1. 碗(第20図1~10)

Ⅰ類:高台から逆「ハ」の字形に立ち上がる直口口縁のもの。灰釉単掛けでフィガキー。無文(1、2)。

Ⅱ類:腰部に丸みを持たせ口縁部が外反するもので、高台脇に抉りを入れる。鉄釉と灰釉の掛け分け(II-a)と鉄釉と白釉の掛け分け(II-b)がある。aは無文(3)。bは無文のもの(4)と内面に呉須で文様を施すもの(5)がある。いずれも全面施釉後に内底蛇の目釉剥ぎを施す。

Ⅲ類:器形は II 類に似るが外反口縁が強調されるもので、高台脇の抉りは不明瞭。白釉単掛けで内底に蛇の目釉剥ぎを施す。無文のもの(III-a:6、7)と有文のもの(III-b)がある。 b は両面に呉須で文様を施す($8\sim10$)。

2. 小碗 (第20図11~15)

Ⅰ類:口縁部が外反するもの。鉄釉と白釉の掛け分けで無文(11)。

Ⅱ類:基本的な器形は I 類に似るが白釉単掛けのもの。無文のもの(II − a)と有文のもの(II − b)がある。 a は内底蛇の目釉剥ぎを施す(12)。 b は畳付のみを釉剥ぎし、外面に呉須で文様を施す(13)。

Ⅲ類:直口口縁を呈するもの。白釉単掛けで無文(14、15)。

3. 皿 (第20図16~18)

Ⅰ類:内湾口縁を呈する小形の皿。内面に呉須で文様を施す(16、17)。

Ⅱ類:口縁端部を断面三角形に肥厚する大形の皿。灰釉単掛けで内面に文様を施す(18)。

4. 鉢 (第 21 図 19 ~ 22)

I類:高台から斜上方に立ち上がるもので、口縁端部を断面三角形に肥厚する。灰釉単掛けでフィガキー(19、20)。

Ⅱ類:腰部に丸みを持ち口縁部を外側に折り曲げるもの。鉄釉と灰釉の掛け分け(II-a)と鉄釉と白釉の掛け分け(II-b)がある。II-a0 と鉄釉と白釉の掛け分け(II-b)がある。II-a1 と大橋で文様を施す(II-a1)。II-a2 と

5. 鍋 (第21 図23 ~25)

Ⅰ類:□縁部が「く」の字形に屈曲し胴部が球形を呈するもの。灰釉単掛けで無文(23)。

Ⅱ類:口縁部内面に蓋受部を設け腰部が張るもの。灰釉と白釉の掛け分け(24)と鉄釉と白釉の掛け分け(25)がある。

6. 壺 (第21図26、27)

「アンダガーミ」と称される小形の四耳壺。鉄釉単掛けで口唇部と高台を露胎とする。無文。

7. 急須 (第21 図28、29)

I類:胴部が球形を呈するもので、肩部に三角形の板状の把手を1対、底部に円錐状の突起を3個 貼付する。灰釉単掛けで無文(28)。 Ⅱ類:器形はⅠ類に似るが灰釉と白釉を掛け分けるもの(29)。

8. 酒器 (第21図30)

胴部に稜を持ち口縁部を階段状に成形するもの。白釉単掛け。

9. 瓶 (第21図31、32)

31 は口縁部がラッパ状に開くもので、油壺と思われる。鉄釉単掛けで無文。32 は瓢箪形の長頸瓶で、嘉瓶と呼ばれるものに相当する。黒釉単掛けで無文。

10. 蓋(第21図33、34)

I類:庇がほぼ水平で中央に撮を持ち、裏面に滑り止めを有するもので、急須に対応する。白釉単掛けで外面に呉須や飴釉で文様を施す(33)。

Ⅱ類:大形急須(アンビン)に対応するもの。黒釉単掛けで内面は露胎。無文(34)。

11. 器種不明(第21図35)

平底の底部から斜上方に立ち上がるもので、内面に灰釉を施釉する。灯明具の可能性もある。

第8表 沖縄産施釉陶器出土状況

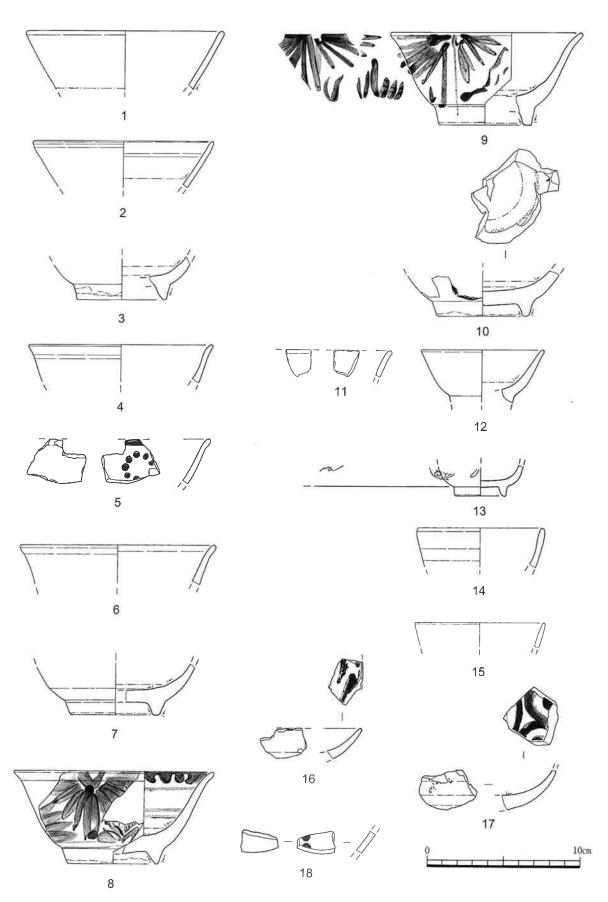
/		_	ン円が 出土地							I JUX								П	地区			j	也区	
3.0	\	\	101778	7	Г.Т.1			Т.Т.2		_	T.T.3 T.T.3-1		T.	T/I	不明	1 23		2層		S.T.2-2	不明	S.T.1	S.T.3	{E
掃	重。为	 分類	1	2 图 :	1 1 1 1	不明	1 周	2 扇	3 😿	2層	1,1,3-1		1層	. 2 層	Life, b.	1.8	置構内	潰構外	埋斃散土	1層	1 7	1層	1層	1
		_		1	7 107 1	-19'5	1.43	1			I TI	1	1.79	1		2	1 1911		, J.J. IX.J.	2-14				
	1	1	腸		1		1		1	0.000								1						
		a	底				1																	
	1	ь	朋	1			2																	ļ.,
		D	胴							1			1											
Ñ			П				$-\frac{1}{1}$						1											
		a	朋						1	1					1							2	·····	
	Ш		底		-		1			0.		1									1		- 1	\vdash
			口~底			-	1			_			-	-	-	1				_				
		b	底	1														i			*****			
			口	-	-													1						
1		а		-			2		1					1						1				
J,	П		題											1										
海		b	底																				1	23.5
VE.	n	1	П		ound)	Some										1							1	ļ.,
	1	Ц	胴	1		1												1						
ı	1	į.						1													V2007			ļ
1			胴	1;											01/2001	10.711.4						_	_	H
	Ι	I	胴		_							1	13								_	_		-
	- 71	E:														1						*****		
*			麻胴	-	-		_		1	1											_			-
	Ε.	a b	胴	- 1	- 10		1		-							1								
-	-		口		- 1						1.85	_				_			1					
	I		E									1										.000000	2000	-
渦			п				1																	Ĺ.,
	I	1: [順															1						
														1						1227001				
	验		棚				1									******								
_			族		- 1		1					TIVE COLUMN												-
	I		口-底																					
3	_	_	旭	i	- :	-				1										-	-	_	1	⊩
į l	1		胴							100000		••••••				····i								
	不		耳	-	- +	-	1						-			- 1								
-	百器	77	-			_	- 1									1								
			п	- 1								Î												
	瓶		THE T		1		T	1			1						1						1	
	I		庇							- 1														
PAC	II	_	庇		- 4		- 1									1		i = =		1				
	不明		朋					1						1		1								L.,
_	小明		底		1;							1						C	N		-			
	台	- 7	†	4:	3;	1	16	6	5	5	1	6	1	5	-1	11	2	5	- 1	2	1	2	6	

77.	y表a		也不田卜可名品	· 飲祭	見			単位: ci
図	番号	器種分類	部位	口径 器高 底径	観察事項		出土地	
	:1	碗		13.2	釉薬は灰黄緑色に発色。外面に石灰が付着。	I地区	Т.Т.2	3層
	2	Ι	П	11.9	両面に気泡がみられる。両面に轆轤痕が残る。	Ⅱ地区	1層	
	3	碗 II — a	底	- 5.9	灰釉の発色は不良 (灰白色に濁る)。畳付にアルミナを塗布。内底にアルミナが付着。	I地区	T.T.2	1層
	4	碗	Д	12.2	透明釉の発色は不良。外面に轆轤痕(圏線?)が残る。	I地区	T.T.2	1層
	5	II - p	П		透明釉の発色は不良。内面に呉須で印花文(九曜 文?)を施す。	I地区	T.T.1	2層
	6	碗	П	13.0	両面に気泡がみられる。外面に部分的に鉄班?が みられる。	I地区	T.T.2	1層
	7	III −a	底	<u>-</u> 5.8	畳付にアルミナを塗布。内底にアルミナが溶着。	Ⅲ地区	S.T.3	1層
	8		口~底	13.2 6.1 6.0	外面に呉須で散らし菊花文・圏線、内面に花弁文 (瓔珞文?)・二重圏線を施す。内底にアルミナが 付着。清朝磁器を意識?	I地区	T.T.2	1層
第 20 図	9	碗 Ⅲ—b	口~底	12.8 6.1 6.2	外面に呉須で散らし菊花文・区画文を施す。畳付 にアルミナを塗布。外面に部分的に鉄班?がみら れる。	Ⅱ地区	1層	
(図版14)	10		底	 5.8	外面に呉須で巴文、内面の文様は不明。畳付にアルミナを塗布。内底にアルミナが付着。	Ⅱ地区	2層遺	帯外
	11	小碗 I	П	=	全体的に風化が著しく、内面の透明釉は剥離している。	Ⅱ地区	2層遺標	
	12	小碗 Ⅱ—a	П	8.2	外面に窯傷?がみられる。	II 地区 S.T.2 —	2 1層	
	13	小碗 II — b	底	3.3	外面に呉須で雲龍文?がみられる。全面に貫入が 明瞭にみられる。	Ⅲ地区	S.T.3	1層
	14	小碗	П	8.2	口唇部の釉薬は剥落する。外面口縁部は灰黄緑色 に変色。	Ⅲ地区	S.T.3	1層
	15	Ш	П	8.4	両面に気泡?がみられる。	Ⅱ地区	2層遺標	
	16	Ш	П	-	口藍。内面に呉須で文様を施すが詳細は不明。	I地区	T.T.2	2層
	17	I	胴		内面に呉須で花弁文・圏線を施す。外面に部分的 に呉須が付着。外面に轆轤痕が残る。	I地区	T.T.1	2層
	18	Ш	胴			I 地区 東側拡張	T.T.3 区	

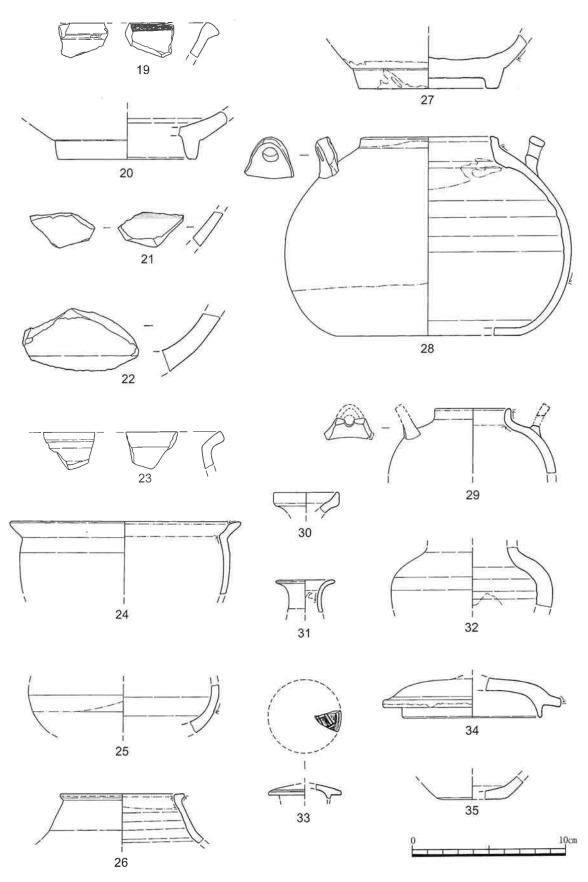
単位:cm

第9表b 沖縄産施釉陶器観察一覧

71.0	衣 D	/丁州电/主//	也相附品	飲 祭一!	元 			毕1火, CM
図者	番号	器種 分類	部位	口径 器高 底径	観察事項		出土地	
	19	鉢		=	内面に鉄絵で圏線を巡らす(口藍を意識?)。内面 に轆轤痕が残る。	Ⅱ地区	1層	
	20	I	底	9.2	外面に石灰?、灰釉が一部付着。	Ⅱ地区	1層	
	21	鉢 Ⅱ —a	胴	=	内面に鉄絵で圏線を巡らす。外面に気泡がみられる。	I地区	T.T.2	3層
	22	鉢 Ⅱ b	胴	=	鉄釉の発色は不良。外面に轆轤痕が残る。	I地区	Т.Т.2	1層
	23	鍋			全面に気泡がみられ、釉薬の剥離が著しい(被 熱?)。	Ⅱ地区	2層埋	甕覆土
	24	鍋		15.3	蓋受部にアルミナ・鉄班?が付着。外面に轆轤痕 が残る。	I地区	T.T.2	1層
	25	II	胴	=	外面に煤跡が付着。外面に轆轤痕が残る。	Ⅱ地区	2層遺	構外
第 20	26	壺	П	8.2	口唇部は釉剥ぎを施しアルミナを塗布。内面に轆 轤痕が残る。	I地区	T.T.4	2層
20図(図版	27	ZE	底	9,2	内面に轆轤痕が残る。畳付及び外底に砂目?が付 着。	I地区	T.T.2	1層
放 14	28	急須 I	口~底	9.0 13.2 12.2	釉薬は暗灰黄色に発色。部分的に釉垂れがみられる。	Ⅲ地区	S.T.3	1層
	29	急須Ⅱ	П	5.0	口唇部は釉剥ぎを施しアルミナを塗布。外面に白 土が付着(文様?)。	Ⅲ地区	S.T.3	1層
	30	酒器	П	4.3	口唇部は釉薬・白土とも剥離が著しい。	Ⅱ地区	1層	
	31	45	П	1.9	外面に気泡が見られる。全体的に釉薬の剥離が著 しい(被熱?)。	I 地区 東側拡張		
	32	瓶	胴		外面に気泡がみられる。内面に轆轤痕が残る。	I地区	T.T.1	4層
	33	蓋	庇	(外径) 4.8	外面に線彫りと呉須・飴釉で斜格子文、圏線を施 す。内面にアルミナ?が付着。	I 地区	Т.Т.3	2層
	34	蓋Ⅱ	庇	(外径) 11.8 (内径) 9.2	外面に気泡がみられる。内面に轆轤痕が残る。	Ⅱ地区	1層	
	35	不明	底	 3.4	内底の灰釉は灰白色に濁る。外面に轆轤痕が残る。 灯明皿の可能性あり。	I地区	T.T.1	4層



第 20 図 沖縄産施釉陶器 1 碗 $(1 \sim 10)$ 、小碗 $(11 \sim 15)$ 、皿 $(16 \sim 18)$



第9節 沖縄産無釉陶器

高火度で焼成された焼締陶器の一群で、方言で「アラヤチ(荒焼)」とも称される。基本的には無 釉の陶器を主体とするが、泥釉やマンガン釉が施釉されるものもここに含まれる。器種は皿・徳利・ 瓶・蓋・鉢・擂鉢・壺・甕が確認されているが、特に壺や甕などの大形の貯蔵器が多数を占める。こ こでは各器種の分類概念を記し、個々の詳細は第11表に提示する。

1. 皿 (第22図1、2)

平底の底部から逆「ハーの字状に立ち上がる小皿。灯明皿としての用途が考えられる。

2. 徳利 (第22 図 3 、4)

胴部が楕円形を呈する大形の徳利。内面に泥釉を施釉する。

3. 瓶 (第22図5)

胴部が球形を呈するもので、外面に自然釉が施釉される。口縁部及び底部の形態は不明。

4. 火炉(第22図6~8)

平底の底部からほぼ垂直に立ち上がり、肩部で内側に屈曲するもの。口縁部に半円形の火窓を設ける(6、7)。8は高台を持つ底部で、球状の器形が想定されるが詳細は不明。

5. 蓋(第22図9)

蓋甲がドーム状に傾斜し、端部が外側に張り出すもの。撮の形態は不明。急須に対応するものと思われる。

6. 鉢 (第22図10)

底部から逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁部の断面形態が方形状を呈するもの。小形の鉢と思われるが、別の器種の可能性もある。

7. 擂鉢 (第 22 図 11、12)

口縁部を外側に折り曲げ鍔縁状を呈するもの。内面全体に擂目を密に施し、口縁部のみ擂目をナデ消している。底部形態は不明だが、高台を持たない平底と想定される。

8. 壺 (第22図13~16)

壺は全形を窺える資料に乏しいため、以下の4点を図化した。13は頸部を垂直に立ち上げるもので、口縁部を外側に折り曲げる。14は外面に泥釉を施釉する胴部片で、文様の一部(判?)が確認される。15は器形が砲弾形を呈する壺の底部である。16も同じく底部資料だが、15に比して大形の製品になるものと思われる。

9. 甕 (第22図17、18)

平底の底部から開き気味に立ち上がるもので、最大径を口縁部に持つ。17 は胴部に突帯を巡らすもので、両面に自然釉が施釉される。18 は埋甕として使用されたもので、口縁部の断面形態がT字形を呈し、外面に線彫りと張り付けで文様を施す。

第 10 表 沖縄産無釉陶器出土状況

1	出土地							I地	<u> </u>						Ⅱ地区					Ⅲ地区					
1	V.		T.T.1		т.т.2		T,T,3			m m 4								2.00	0.00		1	合			
00.00	1		121,1			I.	1,2		08	T.7	1,3-1	T.T.3-2	TT4	不明	1層	2層		S.T.2-2	不明	S.T.1	S.T.3	S,T.4	S.T.5	不明	計
器種	/	1層	2層	3層	1層	2層	13層	不明	2層	2層	4層	1層	2層			遺構内	遺構外	1層		1層	1層	2層	1層		1 20
ш															SSOT		israeze.			ucture.			week.	1	
IIIL	底				1																				
	П		1	İ												J.	Unres			143500	Dures:	Leserie	850,730	Lane S	
徳利	胴				1										1										
	底						1	24,14	A117.20											1					
瓶	胴				1										1										
																	P100000							1	
火炉	胴	1																							
	底					1									233										
蓋	庇							V1																1	
鉢																:				1					
播鉢	П							1						2.55	53733		energe.				32032.3	1		ann ann	
田が下	胴				2			1	1																
	П				1										1						Garage II			WW.	
塑	刷				8	1			1	1				1	2		1	2	1	2	6		1	1	28
	THE .						200111	0730397.5												1				1	2
	口~底															1									
魙															3										
	胴												1		3						1				
下明															2										2
	胴			1	7		_				1	1				1				2		1			16
合	81	1	- 1	1	21 :	3	1	2	2	1	1	1	- 1	1	13	2	1	2	11	7	7	1.1	1	5	77

第11表a 沖縄産無釉陶器観察一覧

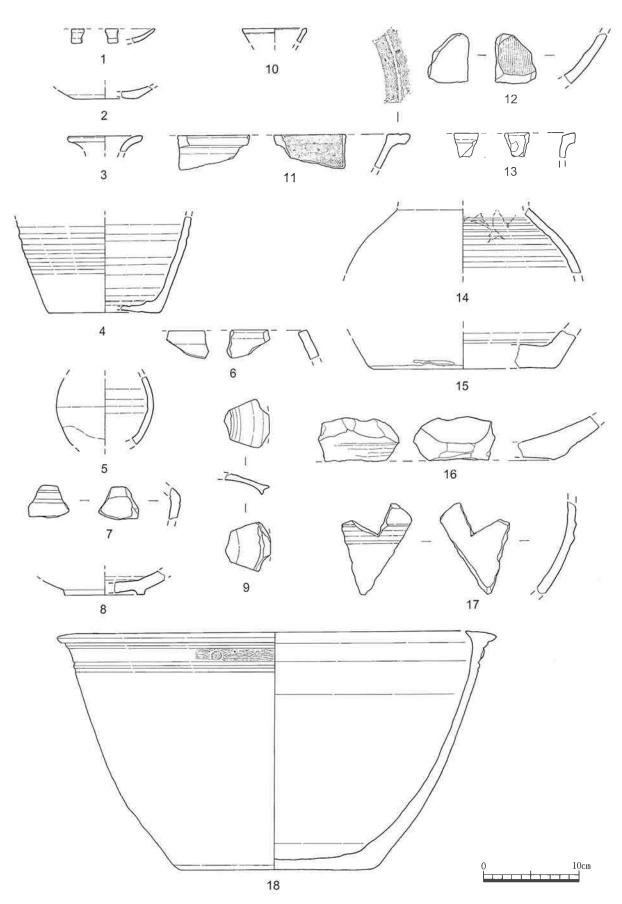
単位: cm

_			1467X VIV.			元		平W.Cn
図者	番号	器種	部位	口径	器高	底径	観 察 事 項	出土地
	1	- 1111	п	-	-	_	素地は鈍橙色粒子で堅緻。内面は明褐灰色に変色(被熱?)。外面に轆轤痕と回転擦痕、内面に轆轤痕が残る。灯明皿。	不明
	2		底	_	-	6.6	素地は橙色粒子。内面は一部灰褐色に変色(被熱?)。 外面に轆轤痕と回転擦痕、内面に轆轤痕が残る。灯明 皿?	I 地区 T.T.2 1 層
	3	(徳利)		8,0	3-3	-	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。口唇部に一部自然釉が掛かる。両面に轆轤痕が残る。	I 地区 T.T.1 2層
第 22 図	4	18871	底	_	>0	12.0	素地は鈍橙色粒子で堅緻。器色は外面は灰赤色(自然釉?)、内面は灰色(泥釉?)を呈する。外面に轆轤痕と回転擦痕、内面に轆轤痕が残る。	Ⅲ地区 S.T.1 1層
(図版15)	5	瓶	胴	: :	-		素地は鈍赤褐色粒子。外面上部は黒色、下部は赤灰色に 変色(被熱?)。両面に轆轤痕が残る。両面に石灰?が 付着。	I 地区 T.T.2 1層
	6		П	-	1	-	素地は橙色粒子。口縁部に半円形?の火窓を設ける。 両面に轆轤痕が残る。	不明
	7	火炉 胴 -			1 2	2	素地は橙色粒子。外面に陰圏線を2条巡らす。両面に轆 轤痕が残る。	I 地区 T.T.1 1層
	8		底	=	-		素地は明赤褐色粒子。外面上部は赤灰色に変色(被熱?)。内底に線刻文様(調整痕あるいは判?)を施す。 両面に轆轤痕が残る。	I 地区 T.T.2 2層

第11表b 沖縄産無釉陶器観察一覧

単位:cm

AD I	丨表	U /T	樋座無 和	田中山石石	此宗	見		単位:cm	
図	番号	器種	部位	口径	器高	底径	観 察 事 項	出土地	
	9	蓋	庇	素地は褐灰色粒子で白色鉱物を多量に含む。蓋表に陰 圏線を1条巡らす。内面に轆轤痕が残る。	不明				
	10	鉢	Д	素地は鈍橙色。器色は両面とも黄灰色を呈する。両面に轆轤痕が残る。鉢以外の器種(小形祭器?)の可能性もある。	Ⅲ地区 S.T.1 1層				
	11		П	=		5 	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。鍔上面に陰圏線を1条巡らす。内面に擂目(櫛歯の数は不明)を密に施し、口縁部はナデ消す。両面に轆轤痕が残る。	I 地区 T.T.2 層序不明	
	12	擂鉢	胴		=		素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。器色は外面は自然釉により灰黄色に変色し、内面は明赤褐色を呈する。内面に擂目(櫛歯の数は不明)を密に施す。両面に轆轤痕が残る。	I 地区 T.T.2 1 層	
第 22 図	13		П	: =		-	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。両面とも泥釉により赤灰 色に変色。両面に轆轤痕が残る。	I 地区 T.T.2 1 層	
(図版15)	14	壶	胴	==			素地は明赤褐色粒子。外面は泥釉により赤灰色を呈する(内面は一部に釉垂れがみられる)。外面に1条の陽圏線、線刻文様(判?)を施す。外面に轆轤痕と回転擦痕、内面に轆轤痕が残る。	I 地区 T.T.2 1 層	
	15			底	-	=	19.0	素地は橙色粒子で中央は灰色を呈する(焼成不良)。外 面に轆轤痕と回転擦痕、内面に轆轤痕が残る。	Ⅲ地区 S.T.1 1層
	16		底		=	==	素地は褐灰色粒子。器色は外面は灰色、内面は鈍橙色を 呈する。外面に轆轤痕と回転擦痕、内面に轆轤痕が残 る。	不明	
	17		胴	9	=	<u>vane</u> 9	素地は鈍赤褐色粒子。器色は自然釉により灰黄色に変 色。外面に2条の突帯を巡らす。内面に轆轤痕が残る。	Ⅱ 地区 1 層	
	18	莲	口~底	46.0	25.2	20.0	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。器色は橙色で内面上部は自然釉により灰黄色に変色。外面に2条の突帯、8本櫛の波状文、貼り付けの丸文を施す。両面に轆轤痕と回転擦痕が残る。内面に石灰が付着する。埋甕。	Ⅱ 地区 2 層 遺構内	



第10節 陶質土器

方言で「アカムヌー」「カマグヮーヤチ」などと称される軟質の土器で、鍋や火炉などの火まわりの道具を主体とする。本遺跡からは総数23点の出土で、皿・鉢・鍋・蓋・瓶・火炉・竈などの器種が確認されている。以下に各器種の分類概念を記し、詳細は第13表に示す。

1. 血 (第23図1)

底部から逆「ハ」の字状に立ち上がるもの。胴部破片のため全形は不明。

2. 鉢(第23図2)

口縁部が内碗する平底の鉢で、方言で「ミジクブサー」と称される。外面に櫛描きで文様を施す。

3. 鍋(第23図3、4)

胴部が球形を呈し口縁部を外側に折り曲げるもの。全形の窺える資料に乏しいため、今回は紐状の 横耳(3)と丸底の底部(4)を図化した。

4. 火炉(第23図5、6)

球形の胴部から内湾する口縁部に至るもので、口縁部内面に器物受を貼付する。外面に白化粧土を 用いた横線を巡らすが剥離が著しい。

5. 竈 (第23図7)

馬蹄形火炉とも称されるもので、移動式の竈と考えられる。口縁部外面を階段状に成形し、断面形態がT字形を呈する。

6. 蓋(第23図8~10)

I類:鍋に対応するもので、器形は皿を伏せた形を呈する。無文(8、9)。 Ⅱ類:急須または土瓶に対応するもの。庇頂に宝珠状の撮を有する(10)。

7. 瓶 (第23図11)

口縁部が外反するもので、端部を玉縁状に肥厚する。胴部以下の形態は不明。

第12 表 陶質十哭出土状况

弗 I	∠ 衣	門則	1工石	工口品	小八八								
		出土地			I	地区				Ⅱ地区	Ⅲ地区	不明	
				T.T.1		Т.	Γ.2	T.T.3-3	1層	2層	S.T.3		合計
器種	・分	類	2層	3層	不明	1層:2層		1層		遺構内遺構外	1層		
	1	胴					1						1
鈞	k					1		1					2
业9	ly .	胴					1						1
		胴					1						1
鉛	1	把手				1							1
		底				3				1			4
火力										1	1		2
籠	Ē								1				1
	I	撮			1				85143513				1
蓋	1	庇				1				1			2
	П	撮										1	1
瓶	Ĵ	口				1							1
不明	18	胴	1							1	1		3
21.0	7]	底		1	1								2
É	<u> </u>	t I	1	1	2	7	3	1	1	3 1	2	1	23

第13表 陶質土器観察一覧

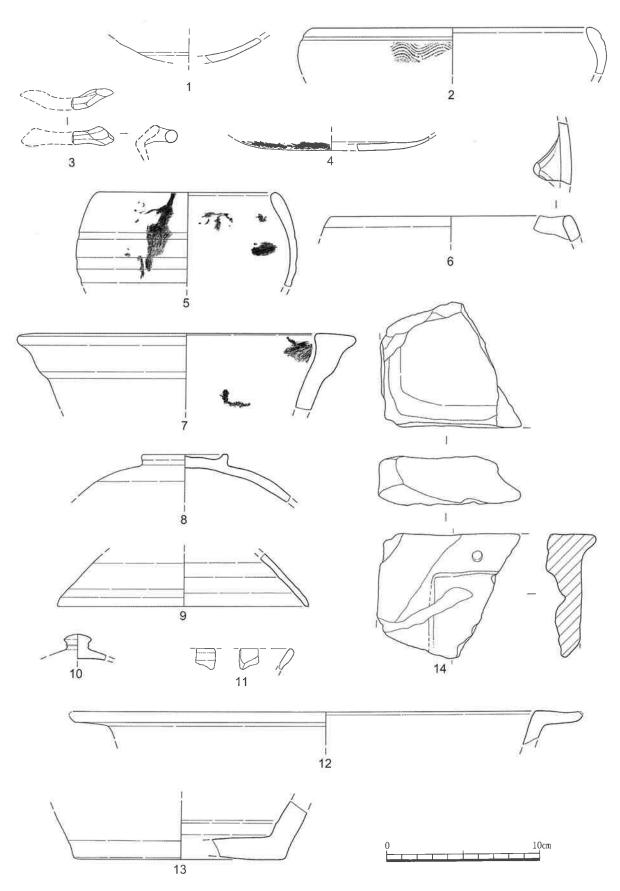
7,					見			里位:cm
図	番号	器種 分類	部位	口径	器高	底径	観 察 事 項	出土地
	1	Ш	素地は鈍黄橙色で雲母や白色粒子を含む。外面に轆轤痕と回転擦痕、内面に轆轤痕が残る。灯明皿の可能性あり。	I 地区 T.T.2 2 層				
	2	鉢		18,2	7 =	-	素地は橙色粒子で雲母や赤褐色鉱物を含む。外面に1条 の陰圏線、7本櫛の波状文を施す。	I 地区 T.T.3-3 1層
	3	备	把手	_	-		素地は鈍橙色粒子で雲母を含む。外面に煤跡?が付着。	I 地区 T.T.2 1 層
	4	310	底	=	=	=	素地は鈍橙色粒子で雲母や白色鉱物を含む。外面全体に 煤跡が付着。両面に轆轤痕が残る。	I 地区 T.T.2 1 層
第 23	5	火炉		11.6	-	=	素地は橙色粒子で雲母や赤色鉱物を含む。外面に白化粧 土による条線を巡らすが剥離している。両面に石灰や煤 跡?が付着。内面に轆轤痕が残る。	Ⅲ地区 S.T.3 1層
図(図版	6	口 16.0			=	=	素地は鈍橙色粒子で雲母や白色鉱物を含む。外面に顔料 を塗布し、その上に白化粧土による条線を巡らすが双方 とも剥離している。内面に煤跡?が付着。	Ⅱ 地区 2 層 遺構内
16	7	竈 口 22.4 — —					素地は鈍橙色粒子で雲母・赤褐色鉱物・白色鉱物を含む。 両面に回転擦痕が残る。外面に石灰、内面に煤跡が付着。	II 地区 1 層
	8	撮 (現程) — — (庇径)		-8		素地は橙色粒子で雲母・赤褐色粒子・白色鉱物を含む。 撮中央は上部に膨らむ。外面に轆轤痕と回転擦痕、内面 に轆轤痕が残る。	I 地区 T.T.1 層序不明	
	9				素地は橙色粒子で雲母・赤褐色鉱物・白色鉱物を含む。 両面に轆轤痕が残る。	I 地区 T.T.2 1層		
	10	蓋Ⅱ	撮	(撮径) 1.8		-	素地は橙色粒子で雲母・赤褐色鉱物・白色鉱物を含む。 撮は宝珠状を呈する。両面に顔料を塗布するが剥離が著 しい。	不明
	11	瓶	П	-	_	-	素地は橙色粒子。両面とも口縁部は鈍橙色に変色。焼成は良好で硬質。無釉陶器の可能性あり。	I 地区 T.T.2 1 層

第11節 瓦質土器

瓦質土器は6点の出土で、器種は鉢と竈が確認されているが、全形を窺える資料に乏しいため、特徴的な資料を3点図化した。12は鉢の口縁部で、口縁部を外側に折り曲げ逆L字状を呈する。口径は33.9cm。Ⅱ地区1層出土。13は鉢の底部である。平底の底部から斜上方に立ち上がるもので、外面に器面調整の痕が残る。底径は14.0cm。Ⅱ地区1層出土。14は移動式の竈の口縁部で、焚口の周囲に粘土帯を張り付け、その上に直径5mmの孔を刳り抜く。Ⅱ地区1層出土。

第12節 土器

土器は器種不明の胴部が1点出土している。器色は外面は褐色、内面は橙色を呈し、胎土に雲母? や白色粒を含む。II 地区 S.T.2 - 2の2層出土。小片のため今回は図化及び撮影を省いた。



第23図 陶質土器 皿(1)、鉢(2)、鍋(3·4)、火炉(5·6)、竈(7)、蓋(8 \sim 10)、瓶(11) **瓦質土器** 鉢(12·13)、竈(14)

第13節 瓦

最も多く出土している遺物である。今回確認されたのは明朝系瓦のみで、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・役瓦などの多様な種類がみられる。層位的な出土状況は判然としないが、すべて近世以降に位置付けられると思われる。色調は酸化焼成により赤色を呈する瓦が大半を占める。以下、残存状態の良好な軒丸瓦・軒平瓦・役瓦の特徴的な資料を図示し、それぞれの詳細を説明する。なお、今回の分類作業は上原 1994 の論考(註 5)を参考に実施した。

1. 軒丸瓦(第24図)

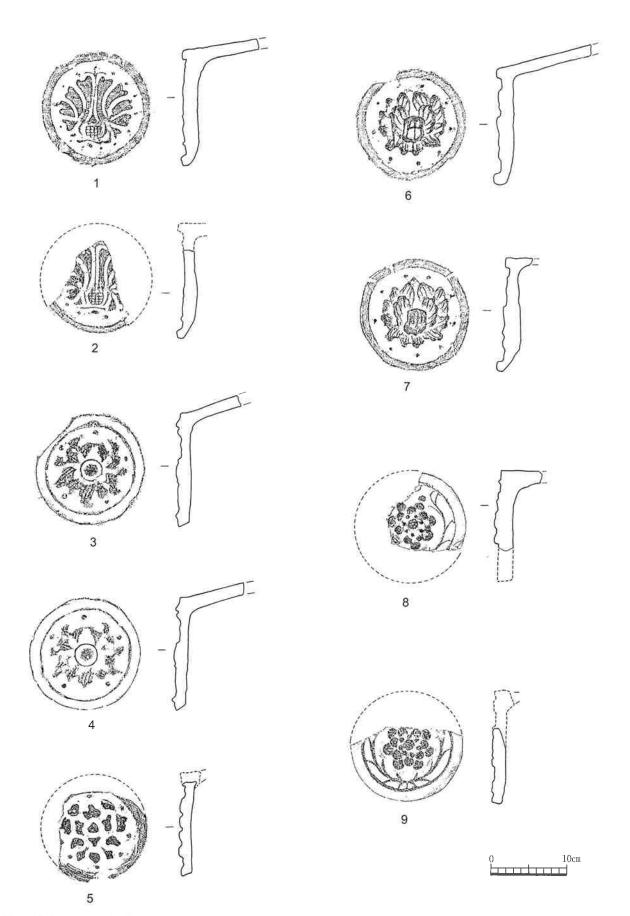
丸瓦の先端に円形の瓦当を貼りつけるもので、瓦当表面に花文を施す。文様の種類及び色調から I ~ V類に分類される。 1 類は弁先が二叉状に表現された花文を施し、周囲に珠文を 14 個配する(1、2)。色調は 1 は鈍黄色、2 は灰黄褐色を呈する。 1 の丸瓦凸面には漆喰が付着し、凸面には布目痕が残る。いずれも他の資料に比して成形は雑である。 1 は I 地区 T.T.1 の 1 層出土。 2 は I 地区 T.T.2 の 1 層出土。上原分類の第Ⅲ文様系 08 に相当する。Ⅱ類は円形の花芯から放射状に伸びる花文(蓮?)を施すもので、周囲に珠文を 5 個配し、その外側に区画線を巡らせる(3、4)。色調は橙色を呈し、平瓦凸面には漆喰の付着が見られ、凹面には布目痕が残る。いずれも上原分類にはみられない。 3、4 ともに I 地区 T.T.3 の 2 層出土。Ⅲ類は抽象化の進んだ肉厚の花文(牡丹?)を施し、周囲に珠文を 8 個配する(5)。色調は鈍橙色を呈し、瓦当裏面は丁寧に成形される。上原分類にはみられない。 I 地区 T.T.3 東側拡張区出土。 N類は肉厚の牡丹を施し、周囲に珠文を 9 個配する(6、7)。上原分類の第Ⅸ文様系 CO1 あるいは 02 に相当するもので、いずれも色調は鈍橙色を呈し、6 は丸瓦及び瓦当表面に漆喰が付着する。6、7 ともにⅢ地区 S.T.5 の 1 層出土。 V類は瓦当中央に花文(牡丹?)を施し、周囲に蔓草を巡らせる(8、9)。いずれも色調は鈍橙色を呈し、瓦当表面の成形は丁寧である。また 9 の外面には漆喰が付着する。上原分類にはみられないが、時期的には新しい資料と思われる。 8 は II 地区 1 層出土。 9 は I 地区 T.T.3 の 1 層出土。

2. 軒平瓦 (第25図10~13)

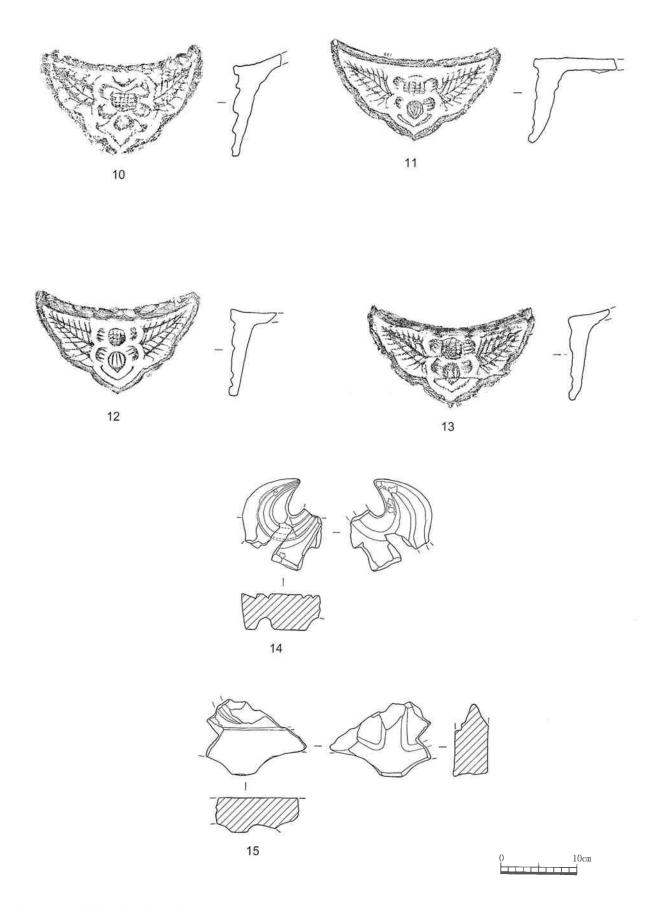
滴水瓦とも呼ばれるもので、倒三角形の瓦当表面に側視形の花と葉をモチーフにした文様を施す。文様の種類及び色調から I ~Ⅲ類に分類される。 I 類は花芯に格子文を施すもので、色調は鈍黄褐色を呈する(10)。平瓦の凹面には漆喰が一部付着する。上原分類の第Ⅲ文様系 A05 に相当する。Ⅱ地区 1 層出土。Ⅱ類は花芯が上下に分かれ簡略化が進むもので、色調は灰色を呈する(11)。裏面の接合部に横位のナデ調整痕が明瞭に残り、平瓦両面には漆喰の付着が見られる。上原分類の第Ⅲ文様系 B02 に相当する。 I 地区 T.T.3 - 4 の 2 層出土。Ⅲ類は形態的な特徴はⅡ類に似るが、色調が橙色を呈する(12、13)。 12 は瓦当表面が泥?により灰褐色に塗布されるもので、成形は全体的に丁寧である。出土地不明。 13 は瓦当への着色はみられないが、瓦当表面の装飾は 12 に比して雑である。また平瓦凹面に漆喰が付着する。 I 地区 T.T.3 の 2 層出土。 12 が上原分類の第Ⅲ文様系 B03、13 が第Ⅲ文様系 B02 にそれぞれ相当する。

3. 役瓦 (第 25 図 14、15)

飾瓦と思われるものが2点出土している。いずれも破片資料のため全形は不明だが、雲形や獅子の巻き毛などの形態が想定される。古写真で確認することはできないが、棟飾りとして用いられたものと思われる。素地は精選された細粒子で、色調は灰色を呈する。厚さは双方とも4.5cmを測る。14は I 地区 T.T.3 の2層出土。15は I 地区 T.T.3 の1層出土。首里城跡の管理用道路地区(註8)に類例がみられる。



第24図 瓦1 軒丸瓦



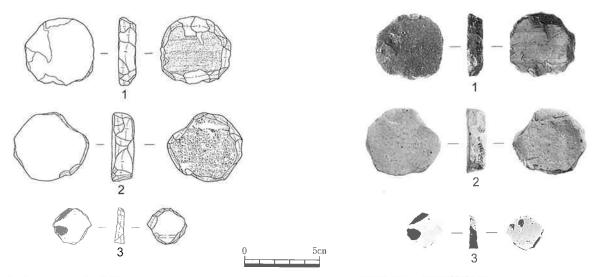
第 25 図 瓦 2 軒平瓦 $(10 \sim 13)$ 、役瓦 $(14 \cdot 15)$

第14節 円盤状製品

本遺跡出土の円盤状製品は3点であり、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦を素材とした、二次的製品である。第26図1は、沖縄産無釉陶器を素材とし、打割調整は主に外面から行われている。長径4.55cm、短径4.4cm、最大器厚1.2cm、重量35.1g。 I 地区 T.T.2の1層出土。

第 26 図 2 は明朝系瓦を素材とし、打割調整は主に外面から行われている。長径 4.9cm、短径 4.4cm、最大器厚 1.45cm、重量 32.4g。 I 地区 T.T.2 の 3 層出土。

第26図3は沖縄産施釉陶器を素材とし、雑に内外面から打割調整されている。長径2.5cm、短径2.3cm、最大器厚1.7cm、重量3.8g。出土地不明。



第26図 円盤状製品

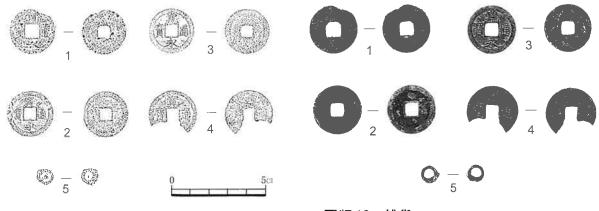
図版 18 円盤状製品

第15節 銭貨

銭貨は寛永通寶が4点、輪銭が1点の合計5点出土している。寛永通寶は古寛永通寶が1点、新寛永通寶が3点である。個々の詳細は観察表(第14表)に記述した。

第14表 銭貨観察一覧

図都	等号	銭文	銭種	残存 状況	素材	背文字	初鋳年	書体	輪外往 縦	生 (mm) 横		E(mm) /横	穿幅縦	(mm) 横	輪厚 (mm)	重量 (g)	観察事項	出土地
	1	寛水通寶	寛永通寶	完	鉄?		1636	真書	23.5	23.6		19.2	6.3	6,5	1.4	3.0	錆が表面に付着し、銭文が 不鮮明。「寛」 の右上に加工 痕あり。古寛 永通寶。	I 地区 T.T.3 東側 拡張区
第	2	寛永通寶	寛永通寶	完	銅	=	1697	真書	24,1	23.9	19,3	19.1	6.3	6.3	0.8	2,1	銭肌がブツブ ツしている。 新寛永通寶。	I 地区 T.T.4 2層
第27図(図版19	3	寛永通寶	寛永通寶	完	銅	_	1697	真書	23.5	23.4	18.2	18.8	6.2	6,3	1.0	2,6	背はやや平 坦。新寛永通 寶。	I 地区 T.T.1 1 層
19	4	寛□通寶	寛永通寶	3,4	銅	-	1697	真書	-	25.0	-	20,5	-	5.6	1.4	2.8	「寛」の後足に 続いて余分な 鋳溜りがある。 背は平坦。	Ⅱ 地区 1 層
	5	_	輸銭	完	銅?	_	-			x)===		-	-	-	-	0.1 以下	バリがみられ、 平面形は楕円 である。ブッ ブツもみられ る。	Ⅲ地区 S.T.2 2層



第27図 銭貨

図版 19 銭貨

第16節 煙管

煙管は陶製煙管の雁首が1点出土している。火皿の内外面には緑釉が掛けられる。火皿の推定外径は1.6cm、推定内径は1.3cm。 I 地区 T.T.1 の2層出土。



第 28 図 煙管

図版 20 煙管

第17節 金属製品

金属製品は額受、簪、釘、鎹、止め金具、蹄鉄が出土している。

第 29 図 1 は扁額の額受であり、身は荷葉形で、先端が緩やかに外反する。柄は 2 ヶ所で折れ、その間は直線的である。身と柄は別々に製作され、その後接着されたことが身と柄の接地部の色(身は黒色、柄は赤銅色)の差異により分かる。柄には 3.5mm の孔が 1 ヶ所あり、外面に固定する際に付いたと考えられる痕がみえる。全長 20.1cm、最大幅 7.05cm、最大厚 0.4cm、重量 153.5g。完形品。 I 地区 T.T.3 の 2 層出土。

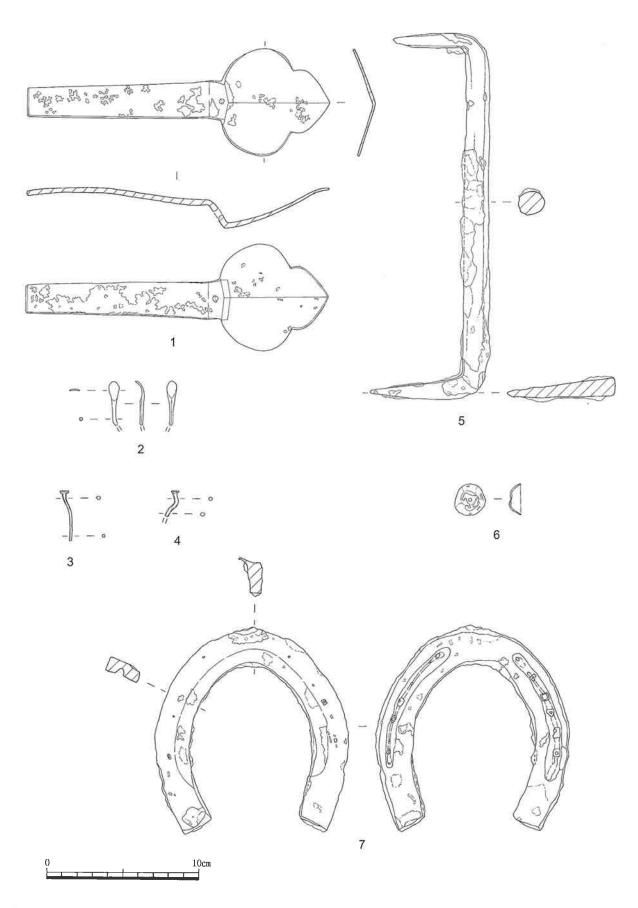
第29図2は簪の頭部である。形態は匙状を呈し、中央が最大幅となる。頭部から細くなり軸部へと移行する。残存重量 0.9g。Ⅲ地区 S.T.3 の 3 層出土。

第 29 図 3 、 4 は銅製釘である。 2 点とも頭部は平坦である。 3 は完形であり、頭部径 0.6 cm、長さ 3.35 cm、重量 0.9 g、 I 地区 T.T.4 の 2 層出土。 4 は破片であり、頭部径 0.6 cm、残存の長さ 1.7 cm、残存重量 0.9 g、 I 地区 T.T.3 - 3 の 1 層出土。

第29図5は鉄製鎹である。爪部断面形は方形であるが、基部断面形は円形である。基部の長さ22.9cm、爪部の長さ6.2cm、重量382.8g。出土地II地区不明。

第 29 図 6 は青銅製止め具である。上部中央は孔を穿つ。平面は円形であり、2.1cmの径を計る。重量は 2.1g。 I 地区 T.T.1 の 2 層出土。

第29図7は蹄鉄である。平面はU字形であり、断面は長方形である。蹄に釘を打つ穴が左右に各6ヶ所認められる。最大縦幅13.6cm、最大横幅12.7cm、重量390.2g。出土地Ⅱ地区不明。



第29図 金属製品

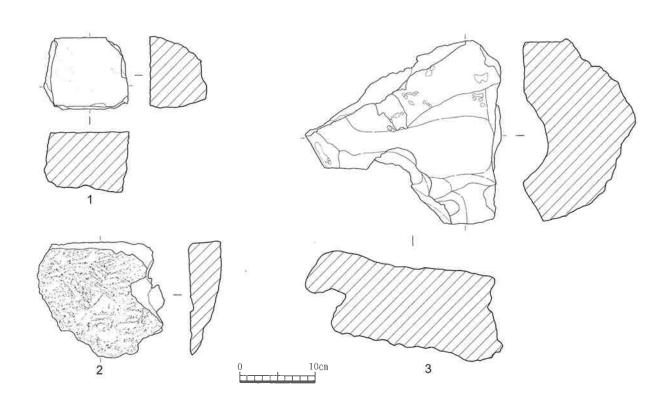
第18節 石製品

石製品は礎石2点、用途不明品1点の3点出土している。

第30図1は石灰岩製礎石であり、本来はニービ(細粒砂岩)の上に配置し、中持柱を据えていたものである。上面に加工痕があり、平坦である。側面も大部分は残っており、法量を知ることができる。長幅10.0cm、短幅9.0cm、奥行8.0cm。 I 地区 T.T.1 の2層出土。

第30図2は石灰岩製礎石であり、1に比べると大きい。建物跡からも石灰岩製礎石は大・小のものが検出されている。上面は鑿などの道具により加工され、平坦となっている。上面の縁は面取りされ滑らかになっている。下面は残っていない。 I 地区 T.T.1 の 3 層出土。

第30図3は用途不明品である。上面中央部が窪むように加工され、側面、下面に比べ滑らかである。I地区 T.T.1 の3層出土。



第30図 石製品

第19節 貝類遺体

貝類は巻貝 21 科 40 種、二枚貝 11 科 21 種出土している。巻貝は 197 個体出土しているが、約半数は陸産貝が占める。その次にトウガタカワニナ、マガキガイ、チョウセンサザエ、マルアマオブネと続く。二枚貝は 52 個体出土し、アラスジケマンガイ、イソハマグリ、カワラガイの順に多い。これら巻貝、二枚貝の陸産貝を除き出土個体数が多いものは、比較的下層より出土しているものが多く、トウガタカワニナを除けば、食用として利用されているものである。御茶屋御殿で使用された食材の解明につながる資料である。

貝類生息地分類一覧

I:外洋・サンゴ礁域

1:潮間帯中・下部

2: 亜潮間帯上縁部

3:干潟

4:礁斜面及びその下部

a:岩板 b:転石

c:岩礫底、砂泥底、砂底

Ⅱ:内湾・転石地域

1:潮間帯中・下部

2: 亜潮間帯上縁部

b:転石

c:岩礫底、砂泥底、砂底

Ⅲ:河口干潟・マングローブ域

1:潮間帯中・下部

c:岩礫底、砂泥底、砂底

Ⅳ:淡水域

5:止水

6:流水

V:陸域

8:林内・林縁部

9:林縁部

第15表 貝類出土状況 (巻貝)

			出土地							70.00									_			〕地区														-				
					1 000				-	T.T.I												T.T.2										Г3					T.T.3-1			T.T.3-
om Ar	271.67	779.0	1 / 6 /		1原		2		-	3 层		-	4 展	-	不	91	_	1層			2届		3 場			不明			1層		2			東側拡			1層			4層
頭名	科名	貝種名	生息地	完形	殼頂	碳片	完整,最	頂,玻片	完形	: 註頭	校片	完形	数頂	破片	完影・軽	頂,破片	完影	· 競頂	放片	完形	载讯 包	姓 完	形 股別	1	完彩	概益	破片	完形	長頭	皮片 另	形數	頂。玻璃	完 完計	A DI	一一政片	完形	拉頂	鼓片	完形	松頂
		ギンタカハマ	I -4-a	1		1				1				1								-		1	1							3							1	-
1 2	ニシキウズガイ科	サラサバティ	I -4-a	- 1	- 1	- 1		4		3	9	1 3	8 8		- 1		11 3	8 19		- 3	- 8		3	135	1 3	3	- 1	30	- 8	1	- 1	- 19		3		1 7	13	- 1	1	Ł
		オキナワイシダタミ	Ⅱ -1-b	10		- 1	100	((ā))	1 2	8	8	1 3	8	- 1	- 1	3		9 (3	- 1		31		1			3 8		- 63	- 3		- 51	- 6	- 1	2	1	1 7	/ S	- 1	13	į
- 4-		ニシキウズガイ科不明		1	- 3					1		1		_		4	11 3	4 3	- 1	- 2	- 1	1		1	1 3	8 8		- 5		- 1	- 5	(2)			52	1 7	4 64		12	į
		ヤコウガイ	I -4-a	1 8	- 1		- 1				1				- 5	- 3								1.0				- 6	- 1			-:		-					- 1	_
		ヤコウガイの蓋	I -4-a	1 8	- 1		- 3	1	11	1	Đ.			- 1	- 50	8	111 3	8 8	1		- 2	- 1			1 1	1 1	- 1	- 5			- 53		- 10	1		7			100	i
+1	ナザエ科	チョウセンサザエ	I -3-a	1 8	- 3	1			1	8	8	2	2			. 1	1	\$ 3	- 1		- 64		*	*	1 3	8	- 1	- 5			- 5	- 1	ali s	17	100	7		- 1	138	į.
1 '	7 7 -14	チョウセンサザエの蓋	I -3-a	1 1			4	- 5		1	1	1			100	3	11 3	1 1	- 1	1.1	33		1		1 (2)	1 1		1						1	5	7	/ 1	- 1	- 1	1
- 1		コシタカサザエ	I -2-a	1 8	- 4			1		1	5			- 1	15		11 3	8 8			13		1		1 31						100			2	100		1 12	- 1	10	1
		カンギク	II -1-b	1			5	- 1		1	55	1.			100			X 13	- 1		- 1			1	1 3	1		10			1	3		1	1	9	6 1		- 3	i
		マルアマオブネ	II -1-b	2			- :			:		1	- 1	-	- 1	-	1	1 1	-	1	-	\rightarrow	3:	1	1	- :	-		-	_	-	-	-	-	+	1	-	\rightarrow	-	
/	アマオブネガイ科	アマオプネガイ	1.1.6	-	- 3	- 1	- 9	1		3	8	1 1	100	- 1		8		8 8	- 1	1.0	18		1		- 32	3		1	1	- 1	1.1	*		(8)	133	3			39	į.
		ウミニナカニモリ	I -1-c	1	-:	_		-:		:	1		- :	_		-			-	-	-	-	1:	1	1	- 1	-	-		_	-		+-		-	-		\rightarrow	- 4	
1	トニノツノガイ科	クワノミカニモリ	I -l-a	- 1		- 40	1	8	1 3	8	5	1 3	- 10		197	1	1	1 1		4.3	- 3	- 11	1	100	i - i	i i	- 1	(4)	10		0	i		1	10	9	/ Si	- 1	- 3	į.
		オオシマカニモリ	Lia	1	¥		*	1	11 3	î	0	1 3	10	- 1		1	A.5	9 9		* 9	38		- 1	i i	1 3	,	- 1	- 1	- 6			- 1		8	100	7	- 1		- 3	/
1	ウガタカワニナ科	トウガタカワニナ	IV-5			_			+	1	-		-	-		-	-	-	-			-	10	+	-		-	- 1		_			-		-	-		\rightarrow		_
	ワニナ科	カワニナ	N 5.6		_	_	_		_	•		1		_			-	-	-			-	12 :	4			-	100		-			-	1;	-	-	- 3	_	-	
		イボウミニナ	II-1-c	-	-	-			+	-	-	-	-	-			-	-	-	- :		-		(I	- 4		\rightarrow			_						-	- 25	-		
	フミニナ科	ヘナタリ	Ш-1-с	100	- 6		1	i			i	1 3	1		i	1		i i			1		. 1	i	1	- 1			i		(1)			1	1	1	7		1	
1	- 7 14	カワアイ		1 6	i		- 5	i i		î		1 8	100	- 1	1	100	1 3	: :	- 1	1 :	-		1	1	3	1			1			*		i.		7	4 3	- 1		
-		オハグロガイ	Щ-1-с	- 1		_			-		-	-		-	-	-				100	- 39	_	- 0	13	-	-	_	0.0	-	_	372	- 1		35	(0)	-		_	-	
腹	デボラ科	マガキガイ	II-2-c	1.0	. 1		1	3	10 3	1	i	1	- 1	1	i					1	1		\$	1		1		1			8.0	1		V.	100	7			1.0	
	ノホノ行		1-2-c	- 1	11	- 1		4		1		2	- 1		- 0	1	1 3	13	- 1		1		30	1	1 3	- 1			- 1		12	1	2	1	121	1 7	A 18			
/E		クモガイ	1-2c		-	\rightarrow	-	- 1			1		- 60	_	- 2	- 83		8 9			19			3		- 1		- 0	- 1	_	(14)	- 8 - 8	2	0	0.60	1 - 3			1	
網 .	1 = 12 / 20	ハナビラダカラ	I -1-a		1 :		1	1			1				- 4	1	1	- 1							1 1						1			0.	90	1		2		
7	カラガイ科	キイロダカラ	I-J-a	242		- 4	- 83			8	1	1 3	- 6		- 1	83	1 3		1		- 12		9	18	1 3	- 1			- 8		1	1		8	1	1 7	- 3		- 3	
-		タカラガイ科不明			- 1						9	12.0	8			- 82		0 2	1	31			8		1 8	-			- (1)		(0)	- 8	1	1		1			- 3	
9	マガイ科	リスガイ	I 2-c		į.							- 3											- 6		- 1			135	- 6		13	-8		10	4		(8			
		ホウシュノタマ	II-1-c	1.0	- 1						1		- 10			- 8				1.7			1 .		15			- 1				- 0			110	1 3	- 3			
	ッキガイ科	ツアレイジ	1-3-a										100			10		0 1			- 3	1111		(6		- (- 6	- 0		100	- 1		- 1	(4)		18		- 3	
	ニコフシガイ科	コオニコブシ	1-3a		- 3		- 1	1														1										- 1		-		1	- 4			
	トコロガイ科	フトコロガイ		3	- 1		65.						14		- 3	10								3	1			- :	- 1		-	- ;			1			1		
	ゾバイ科	シマベッコウバイ	II-J-c				- 83	-					- 1		- 15	10				-			1	1	1	- :		7.	- 10		- 1	- 2			100		- 1		-:	
3	トマキボラ科	イトマキボラ	1.2 a																		- 1								- :			- 1	1	-		1			-	
7	クラガイ科	サツマビナ	1-2-c	- 1	- 4						:									- :	-:	_	-	1	1	- :			- 1	-		-:-	1	1.	1		- :	=	- 1	
7	クシガイ科	ムラクモツクシ											- :	_	-:-					- :		_	-:-	:		- 1		- 1	- 1	_	- 1	- :	1		-	1	-	-		
		マダライモ	I-l-a		- ;						:	1				-0				-			1	:	1 :	- 0	_		- 1	-	-:-	-:-		-	-		-	\rightarrow	-	
1 ,	モガイ科	ジュズカケサヤガタイモガイ	I -1-a		10		1 !	1	1 3	1	!		1	- 1		30	1 !	- 2		1	- 8			2	1 3	1		- 3	- 83	- 1	23	1.2		1	8	11 7			8	
11.	セル1科	ヤナギシボリイモ	I -2-a	1	- 6		1	1	1 3	. 1		14	4		1	10	1 :	1		1			-	0	1 3	1		13	1		- 2			1	33	1 3	1			
1		イモガイ科不明	1	1	100		- 5	1			1	1	1.3		1	1	1	1		- 8	9.		1	1		- 0		13	10	- 1	1	0.0		1	3	1 1	1 1	- 1	- 0	
		アオミオカタニシ	V-8		- :			-:-			:	1	- 1					-		-	-	_	-		1	-	\rightarrow		- 1	_	-	-1-	+-	-	-	1	-	\rightarrow	-	_
4.	マタニシ科	オキナワヤマタニシ	V-8	4 !	100		11	1	1 1		ř.	3	1.0		3	i.	24	1		0	- 1	23	4	0		1		1	1		15	1		. 1	i		i		- 1	
7	フリカマイマイ科	アフリカマイマイ	V-8			_	1:	-	1			3		-	_	-		- 1	-	1	- 1	1	4:-		2		- 1		- 1	-			1 2	F-1	-	13		\rightarrow	- 1	_
		シュリマイマイ	V-8	-				-	1	-		-		-		-			_		1	_		9	-	_	-1	-			4		-	-1	4-	-	-	\rightarrow		_
		パンダナマイマイ	V-8	-	_	-		_	1			1		-		1	5	-	2	5 1		-	3 :		2 :		\rightarrow	-		1	1	-	+-	-	-	-		_		_
17:	ナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	V-8	- 1	1			i	1 3	10	i	1	- 3		- 0		1	6 7		10	i		1	it.	1	- 4.0	- 1	- 1	1		1			100	6	1 7	- 1	- 1	i	
		# # # # # # # # # # # # # # # # # # #	1.7.9					-					-		0					*0			- 50	16	1.0	1.1		1	- 1					*0	24	1 3	- 0			

			出土地								1地]] 地区										田地区	-				-	-31	=
					T.T.3-	2		T.T33			T.T.3					T.T.4					1層			2 4	Ě		S	T.2-2			S.T	3		ST	[1		S	T.3			合	計	
					I層	137		1 層			1 歴			1.8			23							通標				1屋			18			1.8				1 塔					
抓名	科名	貝種名	生息地	完彩	税頂	破片	完影	起頂	玻片	完形	4270	破片	完建	5 段	頁 破	中完	形。競	旗:玻	片	完形	REIN	破片	完形	松儿	直、破	片 를	ETF.	经頂	磁片	完影	45.1	前 破片	完	E . W	班 破	片完	影·青	企頂	破片	完形	527	度:	W
-		ギンタカハマ	I -4-a	3					1		5						1	(9)		0.0			-	1			1					- 3		13	1		12			0	8	0	2
1	ニシキウズガイ科	サラサバティ	1-4-a	1 3		88	3					9		8	18		3	13.1		- 17	1 1	9 1	1	1	- 8		- 8	- 3			ă –	- 6		15	- 6		- 13	- 8	- 1	0	ž.	0	
	-217777111	オキナワイシダタミ	0 -1-b	11 3		8	8		8		10	4		2	19		4				0 1			1	1		- 10	- 1			1	83		1.0		- 1	12	- 1		2	4	0	
1 1		ニシキウズガイ科不明		3		30	1 5														1 4			8			- 1				1			12	18				- 1	0		0	
		ヤコウガイ	1-4-a							-	40			1	- 1		- 1	4		108					-		40	- :			;	- 10	1		1			-		0	-	0 +	-
]]		ヤコウガイの蓋	1-4-a	1 3	1		1 8		1						1.0								ı				10	- 3		1	1	1	1	- 13	12	- 1	- 15		- 11	0		0	
	サザエ科	チョウセンサザエ	1 -3-a	1 3	3	:	1 0	:			2				1		1		- 1	- 3			1	55	1	- 1		- 1			3	10	1	8	1	- 1	3 1			6		2	
	ソサエ村	チョウセンサザエの養	I.3-a			1		1	1	1 3				1	1					1:				9		- 11		- 3			Ĭ.	10	-		1		1.0			2		0 !	
		コシタカサザエ	1-2-a	1 3		1	1 3	t .		1 1		1	10	1	1	- 10	1	1		7.1	1			20	3						8	1	1	1	1		- 3	1	- 11	0	1	1	
		カンギク	П-1-Б	1 3			1		50	1 8	*	*		1	1		1	31		- 3	1 3			6							8	1	- 1	- 8	1		3	1	- 1	2	į.	0.1	
	- 1 15 14 18	マルアマオブネ	II-1-b			;	1				1	1		-	-:		-	-:-	\rightarrow			0 1	_			+	-	-			1	-	_	-1	-	+	-			7	<u>:</u>	0	H
	アマオブネガイ科	アマオブネガイ	I -1-b	1 3	5	2	3		10	1 3		1		4	3		1.1	1		- 33					1		1				1	1		1	1		- 4	1		4		0	
1		ウミニチカニモリ	Î -1-c			:	1		1		-				-:-	_	-	-	-	-	_				-	-			_				-			+		-	$-\parallel$	-	-	-	-
	オニノツノガイ料	クワノミカニモリ	I la	1 1		1	1	- 40		. 0	18	1	1	1	(8)		î	- 1		i	î	i i		1	1	- 11	i	î			1	0		10	1		- 3	1		3		0	
		オオシマカニモリ	I-1-2	1 3		ž.	1 8	1943		1 3	1	1	И	E.	3		1	Si		Si	1	§ 1		1	ì		- 6	1			2			3			3	100		2			
İ	トウガタカワニナ科	トウガタカワニナ	IV 5			-		-		-	-		-	-	-	-	-	-;-	-		_	_	-	-		-	-		_	_	+	- 1	+			_		-1	-	0	-	1:	_
1	カワニナ科	カワニナ	W-5.6	-	_	-		_			-	+	-	-		-		-i-	-			_	_	-		-			_	_	:-	. 4.	-		74.7	_	- 2	- 1	_	13		0	
ł	11 / - / 14	イボウミニナ		-	_	-		_			:	-	+	-11			-		-			4	-	4.		-		-:		-	:-	(9.0			(0.0		-	-:		0	-	0 :	_
	ウミニナ科	ヘナタリ	Ш-1-с	i		i	- 3			1.2	i	i		10	á.		i.	1		- 1	- 1						- 1	i			1			i	16		i	- 1		0	1	1	
- 1	ソミーチ件	カワアイ	□-1-c	1 3		1	1			1	í	1	1	100	1		1	i		11	- 1	8	1 8	10	1		- 6	- 1		h	1	1	-	1		- 1	- 1	- 10	- 1	4		0	
- 1			□-1-c	-		:		- 2			-	1	-	- 10	-		-	-	-	- 34	_	9		0.0		-	- 13	-	_			1-6-1		- 1	. 4.		7.8	- 1		. 0	-	2:	_
題	11 - c 12 = dal	オハグロガイ	11 - 2-c	1 :		1		- 3			1			1				- 1		1		1	1	1	1		- 1				:	100			(1)			1		1		1	
-	ソデボラ科	マガキガイ	1 -2-c	1 ;	1	1	1 3	1			:	1		27			2	1	- 1	- 8		2		1		- 1	1.0	- 1									1 :	- 10	- 11	3		6	
足		クモガイ	1 -2-c	1					0			-	1	91	3		-		_	- 14		<u> </u>		(4)	12		_ 8	-	1		-	1382		- 12	1983		- 19	- 8		0	8	0 :	8
網	u 72/	ハナビラダカラ	I -1-a			1		1			:	1		2	1			-		- 1								- 8				010		-	111					2		2 !	
""	タカラガイ科	キイロダカラ	I -1-a			1	1 2	1 1	8				1		3		1 :	1		12	- 1		8	3			188	- 8			8			9	886		3	- 8	- 1	1	£	0	
-		タカラガイ科不明					13	1 (9	0		:	3			3			10		- 0				1	1			- 3			8	19		- 3	338		18	- 80		0		0	á.
	タマガイ料	リスガイ	I -2-c					100			1	0			1		1 :	- 3		- 8		8 1	1 3		100		5.50	- 8							30.0					1		0 :	Ä
- 1		ホウシュノタマ	II -1-c								1						-8	14		- 3					- 1	_	- 1	- 8			1		_	-		_			- 1	4		0	
	アッキガイ科	ププレイジ	I-3-a							1		-		- 1)	- 8			- 34		- 34		8		30	- 67		1.60	- 8						1	13411		- 1	- 82		1	ř.	0 :	ā
	オニコブシガイ科	コオニコブシ	I-3-a									80					- 10	39		134					83						6				100					0		0 .	
	フトコロガイ科	フトコロガイ									:									- 1								- ;			;	1		- 1	-					- 6		0 .	Ŧ
	エゾバイ料	シマベッコウバイ	II-1-6		8 0		1 0					£0		- 1	- 6		90	1						1	- 85			- 7				1			7					1	:	0 :	1
	イトマキボラ科	イトマキボラ	I-2-a		-			9 11		1		1			(0)		1	8		- 1	-			1	17			-				1		-;			-:-	- :		0		0 :	
	マクラガイ科	サツマビナ	1-2-c											+	1			- 1		- 1				:			- 1										-:-			1		0 1	
	ソクシガイ科	ムラクモツグシ		1 1						1		10		1			-	- 1						:	-		- 1	-				-	1	-		_	-	-	-	1		0:	
		マダライモ	I -1-a	100			1						1	1			-	-	-	-				:	1	_	-		_		:	5	_	-:-	54	_	-:-	- 1	-	2		0	-
	4 - 10 4 70	ジュズカケサヤガタイモガイ	I -l-a		A 1		1	- 3		1 1	Ĭ	10	1	1		1	1			3				3	1		1	1			1	3		1	-			- 5	- 11	1		2 !	
- 1	イモガイ科	ヤナギシボリイモ	I -2-a	1 3	3 3	9	1		.		5	10	1	1	1		1	1		- 18		8 1	1 8	1	10		1	- 8	- 1		1	3		1	33			1	- 11	1		0	
		イモガイ科不明	1		1	9 1		1 1	27.0					1	1		10	1.7				8		1	10			1			1			1	- 28				- 1	1	£	2	
-	4)*	アオミオカタニシ	V-8	1			-	- 1					+-	1	-	1	-	-	-	- 1			-	-	1	-		-	-		1		+		-	-	-	-	\rightarrow	- 0	-	2	-
1.2	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	V-8	- 3	1	9 11	2	- 1				1	1	1	1		10	3		- 3		8		1	10			- 1			1	3		. 1	- 3			10		1		0	
	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	V-8		_					- 1		-	-	-	1	-	2 :	1	-	-	;				-	-		\rightarrow	_	-	-		_	1 .		+	-	\rightarrow	\dashv	.53		4	-
	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	V-8	-	_	_	-	-		-			+-	-	1	-	4	1	-			-		-	+	-	- 1		_	_		-	-		-i-	_			-	20		4 :	
		パンダナマイマイ	V-8				-			_		-	1		-	-			-	-	- 1			-	-	-	-				-		-	-		-		- 15	-	17	-	U	_
- 1	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	V-8 V-9	- 6										0.0	ž.		10			- 2	1	(:	10		115				5)	1			1		0	- 6		1	2	0;	

16				
	×			
			590	

		加土地												_	_	_	-	66.12	_	_					_								
									T.T	.1								10510			_	TOT	10										
									3.10	i		4.86			3610			1.50			212	1.1	.4	15.777	_		-		_				T.T.3-3
科名	具種名	生息地		校理	破	完形	级斯				坡 完形	较加	极	完形	43510	破	完形	(210)	被	完形	49.10	66	常形	351	n Tes	1.00			ER 150			275 W.	1.89
フネガイ科	エガイベニエガイ	I-l-a	L K	LIK	J.V.	i N	i KI	T L	R L	R	LE	Lib	片	LR	L R	片	LR	LR	11:	L R	L R	11-	L R	L	R);		R L	R					L B
タマキガイ科	ソメワケグリ	1-2-c			+	\pm		+ :	-	:	-	1	+	-	310	+	٠.		\sqcup			\perp	1.5		1			1				i	
ウミギク科	メンガイの一種	I -2-a		i i	П				T				Ħ			†	-11	+	\vdash	+		H	+	1	+	H	+	H	1				
イタボガキ科	オハグロガキ カキの一種	1-1-a			П	П	\top	$\pm i$			11	Ħ	+		H	H	1	÷	1	÷	-	\forall	÷	H	1	H	-	-	H	-		- !	H
ツキガイ科	ウラキツキガイ	II-2-c	1		+			11	-	-		+ :	-	35	- 3		- 1									1 3		1	1 8		1	1.1	1. 12
キクザルガイ科	カネツケキクザル キクザルガイ料不明	I-1-a			П	П		1			T		+	÷		\Box	2	-	\vdash	-		Н		H	+								H
ザルガイ科	カワラガイ	B-2-c		- 1			\rightarrow	1	-	-		1	1			-	- 1			1			_ 1			1 3		1				3	1 1
シャコガイ科	シラナミガイ シャコガイ科不明	I -2-a	1		\Box		1					1		÷	+	H	- 1	+	H	-	H	Н		H	Ŧ	H					H	-	H
チドリマスオ科	イソハマグリ	I -1-c	r!	1	П	П					2	H	П	1	i	Ħ	1	-	H		H	+	1	H	+1	H	-	1	1	-	1	-	H
シオサザナミ枠	マスオガイ	II -1-c II -1-c		1	П						#				+	$^{+}$		-		+		H	÷	H	+	H	+	H		+	1	+	1
マルスダレガイ科	マルスダレガイ アラスノメガイ カノコアサリ アラスジケマンガイ ホソスジイナミガイ スゲレハマグリ ハマグリ	1-2-c 1-2-c 1-1-c II-1-c II-1-c II-1-c						1	1		1 1 5			1					1				1			1				1		1 1	
-	オキシジュ	I-c	_8			3	- 8	1 8			1.1	1 1		1	1		1			0.1	500		1	1 6		1 1		£	1.7		į.	1	1
	フネガイ科 タマキガイ科 ウミギク科 イタボガキ科 ツキガイ科 キクザルガイ科 ザルガイ科 ジャコガイ科 チドリマスオ科 シオサザナミ科	フネガイ科 エガイ ベニエガイ フェガイ科 マニエガイ フェワケグリ カンガイ メンガイの一種 オハグロカギ カキの一種 カキの一種 カキの一種 サルガイ科 ヤクザルガイ科 ヤクザルガイ科 カフラガイ シャコガイ科不明 ナミノコマスオ マルスダレカイス アラヌノメガイ カノコアシャリ マルスダレカイス アウスブイナグリカイス アウスブイナグリカイス アウスブイアウリカイキャンジェ	科名 月枝名 生息地 フネガイ科 スガイ スガイ スカイ スカイ スカイ スカイ スカイ スカイ スカイ スカイ スカイの一種 スカイの一種 オハグロガギ カキの一種 カキの一種 カネッケキカイ料 カネッケキカイ料 カネッケキカイ料 カウラガイ スカイ科不明 サルガイ料 カワラガイ スカインコマスオ スカインコマンカイ スカインコアサリ スカインコアサリ スカインコアサリ スカインコアサリ スカインコアサリ スカインコアサリ スカインコアリカイ スカインコアリカイ スカインコアリカイ スカインコアリカイ スカインコアリカイ スカインコアサリ スカインコアリカイ スカインコアリカイ スカインコアリカイ スカインコアリカイ スカインコアリカイ スカインコアリカイ スカインカイ スカインカインカイ スカインカイ スカインカインカイ スカインカインカイ スカインカインカインカインカインカインカインカインカインカインカインカインカインカ	科名 貝種名 生息地 上・R	科名 貝種名 生息地 上 R 上 R 公田 マネガイ科 ベニエガイ 1-1-a マネガイ科 ベニエガイ 1-2-a マネガイ科 ベニエガイ 1-2-a マネガイ科 バック・マット 1-2-a マネガイ科 1-2-a マネガイ科 1-1-a マネガイ科 ボック・ネッケ・エッケ・エッケ・エッケ・エッケ・エッケ・エッケ・エッケ・エッケ・エッケ・エ	日報名 日報名 生息地 日報 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 2 1 2 1 1 1 1 1 1	1	1	1月 2月 3月 3月 3月 3月 3月 3月 3	1	日本	1	日本	1所 2所 2所 2所 2所 2所 2所 2所	日本	行名	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	特名 具種名 生息糖 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 完形 成田 成 元形 人工 方子 万子 中子 方子 人工 方子 小 万子 中子 方子 人工 方子 小 万子 中子 方子 人工 方子 入工 方子 入工 方子 人工 方子 入工 子子 人工 方子 入工 子子 人工 子子 入工 子子 人工 子子 十二 人工 丁宁 上 十二 人工 丁宁 上 六子 人工 丁宁 上 十二 人工 丁宁 人工 子子 人工 丁宁 人工 子子 人工 八 丁宁 人工 丁宁 人工 子子 人工 人工 十二 人工 一 八 二 十二 人工 丁宁 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子子 八 人工 子 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 人工 十 上 一 上 一 上 一 上 一 上 一 上 一 上 一 上 一 上 一 上	特名 具種名 生息糖 上原 上原 上原 上原 上原 上原 上原 上	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1分 2分 2月 2月 2月 2月 2月 2月 2	日本	Ye 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1	日報名 上京 大田 大田 大田 大田 大田 大田 大田 大	日本	日本	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	TT TRIC TT TT TT TT TT TT TT	TT 1月 1月 1月 1月 1月 1月 1月	TT1

御茶屋御殿は1677年に創建された琉球王家の別邸で、国王の遊覧や国賓の歓待に使用された施設である。動物遺体の様相は同時代の遺跡(首里城跡、天界寺跡など)の例と同様、近世における肉食の文化の一端をよく示している。本遺跡からは軟甲亜網1目1科1種・軟骨魚網1目・硬骨魚網1目1科1種・鳥網2目2科1種・哺乳網2目2科3種の動物遺体が検出されている。以下に各々の出土遺体の種名を示し、その概要を説明する。

動物遺体種名一覧

節足動物門 Phylum ARTHROPODA 軟甲亜網 Subclass Malacostraca 十脚目 Order Decapoda ワタリガニ科 Family Portumidae ノコギリガサミ Scylla serrata

脊椎動物門 Phylum CVERTEBRATA
軟骨魚網 Class Chondrichthyes
サメ目 Order Lamniformes
科・属不明 Fam.et gen.indet.
硬骨魚網 Class Osteichthyes
スズキ目 Order Perciformes
フエフキダイ科 Family Lethrinidae
ハマフエフキ Lethrinus nebulosus
ハタ科 Family Serranidae
属・種不明 Gen.et sp.indet.

鳥網 Class Aves ガンカモ目 Order Anseriformes ガンカモ科 Family Anatidae カモ類 Auatidae Gen.et sp.indet. キジ目 Order Galliformes キジ科 Family Phasianidae ニワトリ Gallus gallus var.domesticus 哺乳網 Class Mammalia 齧歯目 Order Rodentia ネズミ科 Family Muridae 属·種不明 Gen.et sp.indet. 偶蹄目 Order Artiodactyla イノシシ科 Family Suidae ブタ Sus scrofa var.domesticus ウシ科 Family Bovidae ウシ Bos taurus ヤギ Capura hirucus

1. 節足動物

ノコギリガサミ:ハサミ脚片 2 点が検出されている。層位が異なるが、同一個体のものではないかと思われる。ハサミ脚の推定全長は 70.0 で、大形のハサミ脚である。この位のハサミを持つ個体になると甲の幅も 30cm 近くになったと思う。沖縄の石器時代遺跡ではカニ類の遺骸を出土することが多い。しかし、グスク遺跡ではカニ類の遺骸を出土することは少ない。当時はなお多く出土していたと思われるカニ類もあまり食卓にはのぼらなくなってきたのではないかと推測していた。特にグスク内に住むような人の間では食性が変わってきているかも知れない。しかし、今回のノコギリガサミの出土は伝統的な食風がまだ僅かでも残されていたことを示すもので興味深い。

2. 軟骨魚類

アオザメ:サメ類の歯があり、椎骨は検出されていない。意図的に搬入されたのであろう。下顎骨 1点、歯冠幅 18.0、歯冠高 14.0、L 4 ?

3. 硬骨魚類

ハマフエフキ:出土状況は明らかではないが、同じサイズの個体の顎骨である。体長 50cm 近い個体になる。前上顎骨左側 1 点、全長 45.0 ±、主上顎骨左側 1 点、全長 45.0。

ハタ類:擬鎖骨1点があるが破損している。サイズの大きい個体のものである。

検出された魚骨は上記の2点であるが、グスク遺跡で知られる代表魚であり、サイズも大きいので、 遺構に関連のある遺物と思われる。

4. 鳥類

アイサ類:脛骨左側1点がある。カモ類の種類としては検出例の少ない種類である。脛骨の断面が 三角形であることが特徴である。別に検出されている大腿骨については種を判定することはできな かった。沖縄でのカモ類の検出は多くない。飛来自体少なかったのであろう。しかし、それでも骨1 点を残していたことは注目されよう。

ニワトリ:個体数は多くないと思われるが、四肢骨を主とした出土があった。ニワトリの出土は中・近世遺跡では多い。多く飼われていたようである。

5. 哺乳類

ネズミ科:新しいものの混入ではないかと思われる。

ブタ:頭骨、下顎骨、四肢骨などが出土している。1個体がそのまま搬入されて調理に使われたものである。当時もっとも普通に飼われていた。

ウシ:上顎骨片1があったのみである。ウシの出土はブタに比べると少なくなる。ここでの出土も そうした状況を反映している。おそらく小形の現在の在来牛タイプのウシであったろう。

ヤギ:少数の遺骸を残していた。ヤギを食べる習慣がいつ頃沖縄で始まるか、まだ議論の余地のあるところである。出土例で確認したいが、混入標本もあって難しいのが現状である。

第 17 表 ノコギリガサミ出土一覧

20 11 27	, ,	コインハット田工
部位	個数	出土地
ハサミ脚	1	I地区 T.T.1 3層
ハリミ畑	1	I 地区 T.T.1 4層

第19表 魚類出土一覧

	種	日	部位	右/左	個数	且	土地	
	フエフキダイ科	ハーフェッナ	前上顎骨	左	1	Ⅲ地区	S.T.1	1層
スズキ目	1		主上顎骨	左	1	I地区	T.T.1	3層
	ハタ科	ハタ科の一種	擬鎖骨	左	1	I地区	T.T.1	3層
	科・種不明		脊椎 ·	id.	1	I地区	T.T.1	1層
	147 / 悝小功		有'性'	F.	1	I地区	T.T.1	3層

第18表 サメ出土一覧

部位	個数	出土	地
歯	1	Ⅱ地区	1層

第20表 カモ類(アイサ)出十一覧

210		//		/		70
部	位	右左	個数	出	上地	
大腿骨	遠位部	た	1	I地区	T.T.2	2層
脛骨	骨体	左	1	I地区	T.T.4	2層

第21表 ニワトリ出土一覧

	部位	右/左	個数	出土地
烏口骨	遠位端	右	1	I 地区 T.T.1 1層
胸骨			1	Ⅰ地区 T.T.1 4層
上腕骨	骨体~遠位部	右	1	Ⅰ地区 T.T.1 4層
	近位部~遠位部	右	1	1 地区 T.T.1 4 層
尺骨	遠位:部	右	1	I 地区 T.T.1 4層
	J型 [J. □D	左	1	I 地区 T.T.1 1層
	近位端~遠位部(切痕)	左	1	I地区 T.T.1 4層
脛骨	骨体	右	1	I地区 T.T.1 4層
	17.11	左	1	Ⅰ 地区 T.T.1 4 層
	近位端	左	1	I 地区 T.T.1 4 層
中足骨	遠位部 &	左	1	I 地区 T.T.1 4層
	破片		2	I地区 T.T.1 4層

第22表 ネズミ出土一覧

	部位	右/左	個数		出土地	
大胆	骨 近位骨端はずれ~遠位部	右	1	I地区	T.T.2	1層

第23表 ブタ出ナー覧

部 位		右/左	個数	出土地		
頭骨	頭頂骨	左	1	Ⅲ地区 S.T.1 1層		
下顎骨	I 1	左	1	I 地区 T.T.3 東側拡張区		
	I 2	右	1	I 地区 T.T.3 東側拡張区		
	犬歯♀	左	1	I 地区 T.T.3 東側拡張区		
肋骨		右	1	Ⅲ地区 S.T.1 1層		
		左	1	I 地区 T.T.3 2層		
脛骨	骨体 (破片)	右	1	I 地区 T.T.1 1 層		

第24表 ウシ出土一覧

部	位	右/左	個数	出土地
上顎骨	P 2	左	1	Ⅱ地区 1層

第25表 ヤギ出土一覧

部 位		右/左	個数	出土地		
下顎骨	P3.4 M1.2.3	右	1	Ⅱ地区 1層		
	M1,2	右	1	I地区 T.T.3	2層	
中手骨	骨体	不明	1	I地区 T.T.2	1層	
			1	Ⅲ地区 S.T.5	1層	

第Ⅵ章 御茶屋御殿跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

御茶屋御殿は、識名園とともに琉球王家の別邸として知られ、1609年の薩摩侵攻後の17世紀後半に 築造されたとされる。首里城跡より東方に位置することから、本御殿は東苑とも呼ばれている。

今回の発掘調査では、石組の平面が三角形(本来は方形と考えられる)で、深さ約 50cm を測る便所と想定される遺構が検出されている。遺構内部には、土壌やサンゴなどが充填される状況が確認されている。

本報告では、この石組遺構の用途、特に便所としての利用を検証するため、遺構内部の土壌やサンゴを対象として、寄生虫卵分析および微細遺物分析を実施する。また、遺構内の水分状況について検討するために珪藻分析を実施する。

1. 試料

分析試料は、石組遺構内から採取した総重量 4788.8g(乾燥重量、以下同様)のサンゴ・土壌である。本試料について、寄生虫卵分析・微細遺物分析を実施する。寄生虫卵分析は、遺構使用時にサンゴの表面や空隙に付着している可能性や直接土壌等に取り込まれている可能性等を考慮し、対象をサンゴと土壌とに分け分析を実施する。

サンゴでは、分析に必要な土壌を得るためトールビーカー2回に分けてサンゴ片(603.99g)を秤量し、超音波処理を行い、サンゴ片に付着する土壌を分離する。この処理により得られた土壌(29.46g)の内、5.08gを寄生虫卵分析試料とし、7.33gについて珪藻分析を実施する。

また、土壌は、サンゴを除去し残った土壌の内、花粉分析において通常分析する分量とほぼ同量の 9.23g を寄生虫卵分析に使用する。また、寄生虫卵分析の試料を採取後、残り 267.8g の土壌について 微細遺物分析を実施する。

2. 分析方法

- (1) 寄生虫卵分析
- ・サンゴ

秤量した試料(5.08g)について水酸化カリウムによる泥化を行い、水洗する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成する。作成したプレパラートを光学顕微鏡下で全面走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

・土壌

秤量した試料 (9.23g) について水酸化カリウムによって泥化し、250 μ m以上の粗粒物を除去するため篩別する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成する。作成したプレパラートを光学顕微鏡下で全面走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は、堆積物 1 g あたりに含まれる化石数として表示する。

(2) 微細遺物分析

秤量した試料 (267.8g) について、数%の水酸化ナトリウム水溶液を加えて一昼夜放置して、試料を泥化させる。0.5mm の篩を通して水洗し、残渣を集める。その中から遺物を抽出し、種類がわかるものを同定する。

(3) 珪藻分析

秤量した試料 (7.33g) について、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。また、残渣の一部について比重2.6 に調整したポリタングステートで重液分離を行う。これらの処理で得られた残渣について、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、

プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作成する。なお、プレパラートの作成枚数は、前者の処理が 4 枚、後者の重液分離を行ったものが 2 枚である。検鏡は光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを同定・計数する。種の同定については、原口ほか(1998)、Krammer (1992)、krammer and Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b, 1991

3. 結果

(1) 寄生虫卵分析

石積遺構内にみられた土壌およびサンゴ等に付着した土壌とも、寄生虫卵は検出されない。また、 併せて実施した花粉分析の結果、花粉化石、シダ類胞子とも全く認められない。

(2) 微細遺物分析

試料中からは、炭化材(0.13g)、サンゴ・貝類等の破片が少量検出された程度である。有用植物を始めとして種実遺体は検出されない。

(3) 珪藻分析

重液分離を行ったプレパラートを顕鏡した結果、種の段階まで同定できたものが検出されたのは、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻の Navicula contenta の破片 1 個体である。他には、所属不明な破片が 2 個体得られたのみである。

4. 考察

石組遺構内から採取した土壌・サンゴを対象とした分析の結果、試料中からは、寄生虫卵、花粉化石、種実遺体いずれも検出されない。堆積物中から寄生虫卵や花粉分析がほとんど検出されない要因としては、化石が取りこまれにくい環境にあった、体積後の経年変化により分解・消失した、あるいはこの両者が複合した状況が考えられる。

なお、既存の便所遺構の分析調査例によれば、遺構覆土1g当たりに寄生虫卵が $1000\sim50000$ 個含まれているとされている(例えば、黒崎ほか,1994)。また、寄生虫卵だけでなく、堆積物中に含まれる種実遺体の産状も調べ、便所遺構について複合的な調査例も報告されている(金原・金原,1994:金原ほか,1995 など)。なお、本遺構の分析調査で検出された微細な炭化材やサンゴ片あるいは貝類などは、遺構の性格を評価する試料となるものの、現状でこれら試料が便所遺構の可能性を示唆するか判断は難しい。

一方、サンゴ片等に付着していた土壌から陸生珪藻A群の珪藻化石が1個体であるが検出された。 陸生珪藻は、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある種類で、特にA群とされる種類は、陸生珪藻の中でも耐燥性が高いとされている(伊藤・堀内, 1991)。したがって、当遺構内は常に水が蓄えられているような状態ではなく、やや湿っているか乾燥した状態であった可能性がある。

以上の結果から、本遺構の用途、特に便所の可能性を示唆する資料を得ることはできなかった。今後は、考古学的所見や文献等記録等から明らかに便所遺構と考えられる遺構を対象に分析調査を行い、今回の分析結果と比較し評価することが望まれる。また、遺構の用途を検証するため、便所以外の用途が想定される遺構(例えば、井戸跡や溝跡など)も対象に同様な分析を行い、各遺構の特徴を捉えていく必要がある。

<引用文献>

原口和夫・三友清・小林弘(1998)埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, p.527-600.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6 p.23-45. 金原正明・金原正子 (1994) 鴻臚館の土坑 (便所遺構) における寄生虫卵・花粉・種実の同定. 「福岡市埋蔵文化財調査報告書 (第 372 集)鴻臚館跡 4」, p.25-38, 福岡市教育委員会.

金原正明·金原正子·中村亮仁(1995)大宮坊跡(厠跡)における自然科学的分析.「史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ」, p.51-70, 石川県鹿島町教育委員会.

Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p. 1-353., BERLIN·STUTTGART

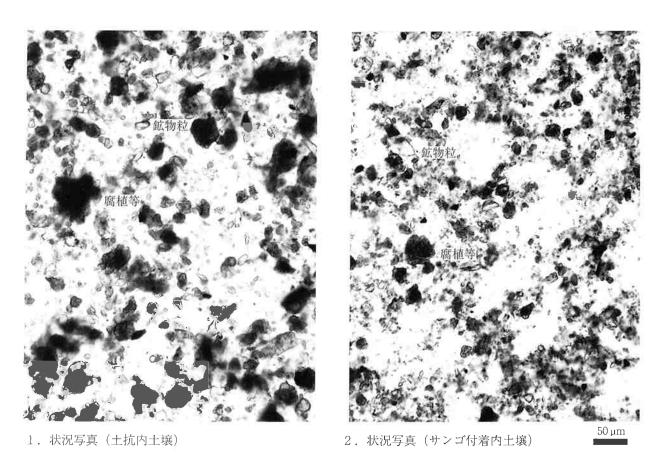
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

黒崎直・松井章・金原正明・金原正子(1994)トイレの考古学. 日本考古学協会第 60 回総会研究発表要旨, p.49-51, 日本考古学協会.



図版 25 寄生虫卵分析プレパラート内の状況 (写真中の黒色物質は腐植等、白色粒子は鉱物粒である)

第Ⅵ章 結語

今回の調査は文化庁補助事業の遺構確認調査として実施したもので、かつて御茶屋御殿が所在した 首里カトリック教会の敷地内に調査区を設け、特に茶亭跡の遺構確認に主眼を置いて発掘調査を行っ た。その結果、全ての地区で当初の予想を上回る成果を得ることができた。以下にその成果について 遺構・遺物の概要を中心に記す。

遺構は建物跡・石列遺構・石積遺構・方形石組遺構・拝所様遺構などが検出されている。建物跡は古写真や見取図等が残されている茶亭に相当するもので、上の間・次の間・控えの間の3部屋を幅広の廊下で囲む形態は、いわゆる遠州様式の流れを汲む代表的な茶室構造に類似する(註9)。これに琉球建築の要素(瓦葺屋根・正面に突出させた玄関など)を加えることにより、和琉折衷ともいえる独特の様式が完成したと考えられる。その建物跡の東側より確認された方形石組遺構は、茶亭に伴う離れの厠と想定される。遺構内の覆土を用いた自然科学分析では良好な結果は出なかったが、聞き取り調査でも便所との所見を得ており、前述の判断に大きな問題はないと思われる。また建物跡の下層から確認された石積遺構や、I地区 T.T.3 – 3の層序などから、御茶屋御殿の創建(1677年)あるいは茶亭の築造(1682年?)以前に何らかの施設が存在していたこと、茶亭建設時に大規模な平場造成を行ったことなども判明している。以上の点から今回検出された遺構は、時期的に御茶屋御殿創建以前と以後に大別されると考えられる。他にも T.T.3 東側拡張区検出の拝所様遺構のように、機能及び性恪が判然とせず、御茶屋御殿との関連も不明な遺構もみられる。

調査により出土した遺物は中国陶磁器・タイ産土器・本土産陶磁器・沖縄産陶器・陶質土器・瓦質土器・土器・瓦・円盤状製品・銭貨・煙管・金属製品・石製品・自然遺物などがある。資料の大半が撹乱層からの出土であるが、包含層出土の遺物や遺構に伴う遺物も少量確認されている。時期判断の目安となる陶磁器類を中心に概観すると、中国陶磁器はほぼ15世紀~16世紀代に収まるが、本土産陶磁器や沖縄産陶器はいずれも17世紀以降を主体としており、御茶屋御殿の創建期(17世紀後半)から戦前(1945年)までの時期におおむね相当する。また量的には希少だが、I地区 T.T.1 の4層出土の染付碗(第16図4)のように、層序による相対年代を補完する資料も確認されている。

その他に注目される遺物としては、役瓦(第 25 図 $14\cdot15$)や額受(第 29 図 1)が挙げられる。役瓦は首里城の正殿などにみられるものと類似の資料で、古写真で確認することはできないが、おそらく大棟の端部を飾る雲形飾瓦と思われる。この種の瓦は識名園には認められないため、建築史的にも興味深い資料と考えられる。額受は扁額の下縁部を受けるためのもので、円覚寺跡(註 10)でも同様の遺物が出土している。古写真でも玄関奥と床の間入口の 2 ヶ所に扁額が認められており、これらのいずれかに用いられたものと思われる。ちなみに沖縄県立博物館には、御茶屋御殿で使用された扁額のうち「海山一覧」と「凌雲」の 2 枚が収蔵されている(註 11)。

近年、庭園遺跡の調査事例は全国的に増加しており、沖縄でも識名園を嚆矢として現在までに4遺跡の調査がなされている。これらとの比較・検討が必要なのは言うまでもないが、今後は敷地内に所在したとされる他の建物(望仙閣・能仁堂・御番屋など)や、石造物や菜園などの周辺施設を含めた広範囲を確認調査の対象とする必要がある。

<引用文献>

- 註1. 沖縄県沖縄史料編集所(編) 1980: 『沖縄県史料 近代3 尾崎三良・岩村通俊沖縄関係史料』沖縄県教育委員会
- 註 2. 田辺泰 1937:『琉球建築』 座右宝刊行会
- 註3.野々村孝男 1999:『首里城を救った男-阪谷良之進・柳田菊造の軌跡-』 ニライ社
- 註4. 御茶屋御殿復元期成会準備委員会(編) 1999:『御茶屋御殿-21世紀へのメッセージー』 御茶屋御殿復元期成会 準備委員会
- 註 5. 上原靜 1994:「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第 14 号 沖縄考古学会
- 註 6. 文化財建造物保存技術協会(編) 1996:『名勝 識名園環境整備事業報告書』 那覇市教育委員会
- 註7. 沖縄県立埋蔵文化財センター(編) 2001:『天界寺跡(Ⅰ)』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 註8.沖縄県立埋蔵文化財センター(編) 2001:『首里城跡ー管理用道路地区発掘調査報告書ー』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 註9. 新垣尚男 1999: 「よみがえれ御茶屋御殿 1~4」 『琉球新報(朝刊)』 1999年1月19日~22日 琉球新報社
- 註10. 沖縄県立埋蔵文化財センター(編) 2002:『円覚寺跡』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 註11. 沖縄県教育委員会(編) 1983:『扁額·聯等遺品調査報告書』 沖縄県教育委員会

<参考文献>

- 1. 新垣力・知念隆博 2001:「御茶屋御殿発掘調査概要」『南島考古だより』第67号 沖縄考古学会
- 2. 大橋康二 1994:『古伊万里の編年-初期肥前磁器を中心に-』 理工学社
- 3. 奥谷喬司(編著) 2000:『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版社
- 4. 高木大輔・福島駿介 1999:「史料に基づく御茶屋御殿の復原」『日本建築学会大会学術講演梗概集』 日本建築学会
- 5. 田中哲雄 2002:『日本の美術 2 No.429 発掘された庭園』 至文堂
- 6. 永井久美男 2002:『新版 中世出土銭の分類図案』 高志書院
- 7. 野々村孝男(編著) 2000:『写真集 懐かしき沖縄』 琉球新報社
- 8. 原田禹雄 1997:「東苑をめぐって」『南島研究』第38号 南島研究会
- 9. 古塚達朗 2000: 『名勝「識名園」の創設-琉球庭園の歴史- 上巻』 ひるぎ社
- 10. 毛利和夫・野呂肖生 2001:『文化財探訪クラブ 7 庭園と茶室』 山川出版社
- 11. 陳建中 1999:『徳化民窯青花』 文物出版社
- 12. 会津若松市教育委員会(編) 1997: 『名勝会津松平氏庭園整備基本計画報告書』 会津若松市教育委員会
- 13. 沖縄県編纂委員会(編) 1986:『角川日本地名辞典 47 沖縄県』 角川書店
- 14. 九州近世陶磁学会(編) 2000:『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
- 15. 京都府教育委員会(編) 1964:『重要文化財伏見稲荷大社御茶屋修理工事報告書』 京都府教育委員会
- 16. 視覚デザイン研究所 (編) 2000:『日本・中国の文様事典』 視覚デザイン研究所
- 17. 東京都埋蔵文化財センター(編) 1997:『汐留遺跡Ⅰ』 東京都埋蔵文化財センター
- 18. 都立学校遺跡調査会(編) 2000:『菅谷遺跡』 都立学校遺跡調査会
- 19. 那覇市教育委員会文化課(編) 1986:『那覇市歴史地図-文化財悉皆調査報告書-』 那覇市教育委員会
- 20. 文化財建造物保存技術協会(編) 1993:『沖縄県有形文化財 旧首里城守礼門保存修理工事報告書』 沖縄県

図版





調査着手前



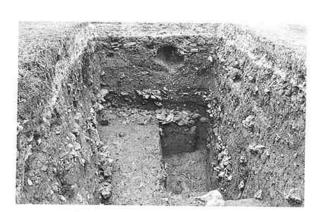
重機による表土掘削作業



瓦出土状況



染付出土状況



T.T.1 南壁



T. T.1 完掘状況 (南側より)



4層検出状況

図版 2 I 地区調査状況 1



方形石組遺構 (平面)



方形石組遺構 (立面)



中央石組 (平面)



中央石組(北側立面)



中央石組 (南側立面)



中央石組 (西側立面)



東側石組 (立面)



T.T.2 南壁

図版3 I地区調査状況2



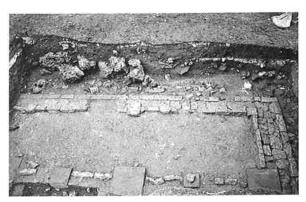
重機による表土掘削作業



2層検出状況



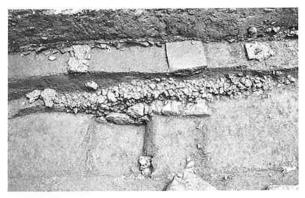
建物跡 (T.T.3 南側検出)



建物跡(T.T.3 東側検出)



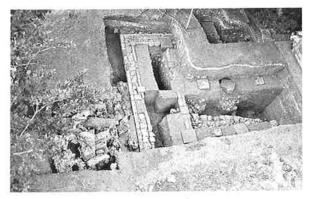
T.T.3-3東壁



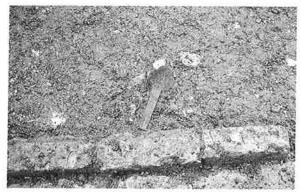
石積遺構3



T.T.4 完掘状況 (東側より)



T.T.3 完掘状況(北側より)



金属製品出土状況



銭貨出土状況



瓦出土状況



調査風景1



調査風景 2



御茶屋御殿石造獅子



現場説明の様子



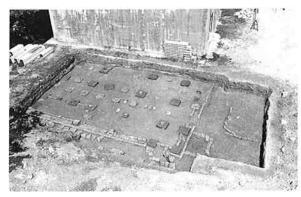
調査着手前



重機による表土掘削作業



遺構検出作業



建物跡検出状況 (東側より)



焼土 (平面)



焼土 (断面)



埋甕遺構 (覆土除去前)



埋甕遺構 (覆土除去後)

図版6 Ⅱ地区調査状況1



石積遺構3



石積遺構3 (東側立面)



石積遺構2 (平面)



石積遺構2 (西側立面)



石積遺構2 (南側立面)



S.T.1-2 北壁



S.T.4 北壁



S.T.5 東壁

図版7 Ⅱ地区調査状況2



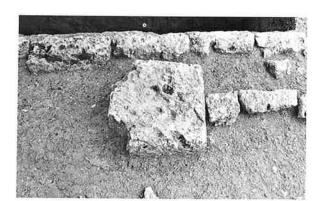
礎石1



礎石2



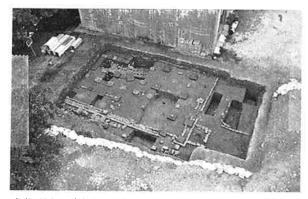
礎石3



礎石4



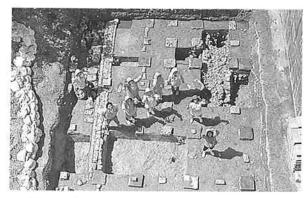
完掘状況 (北側より)



完掘状況 (東側より)



調査風景



調査作業員

図版8 Ⅱ地区調査状況3





建物跡 (S.T.1 検出)



S.T.1 北壁



S.T.2 完掘状況(西側より)

図版 9 Ⅲ地区調査状況 1



表土除去作業





S.T.1 東壁





石積遺構1

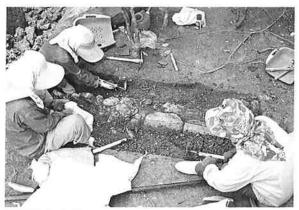




建物跡(S.T.5 検出)



完掘状況 (西側より)



遺構検出作業



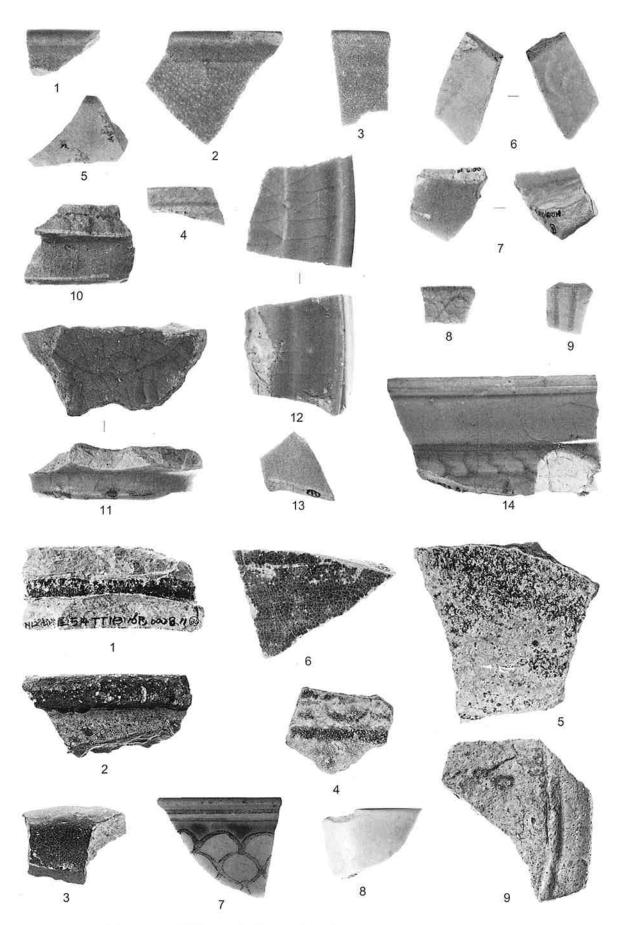
実測作業



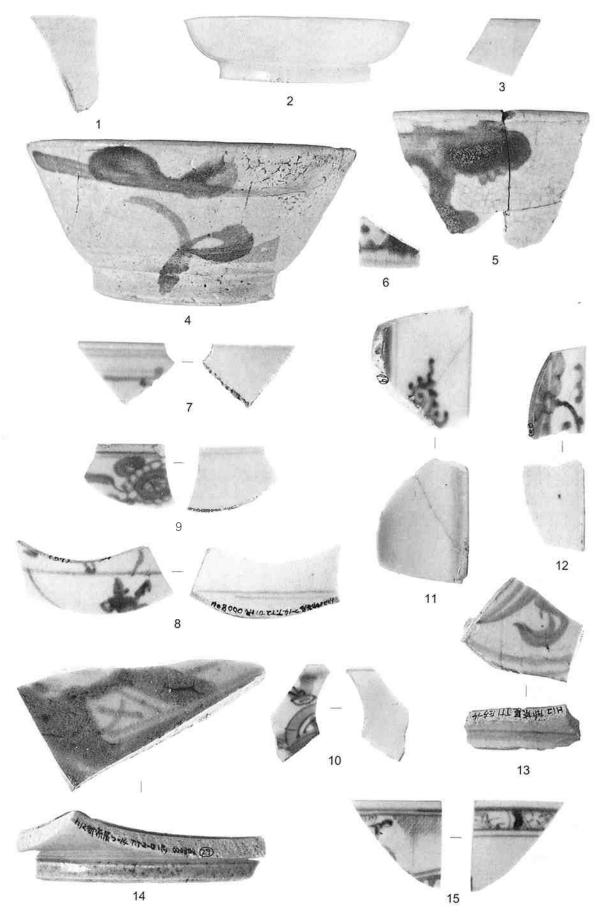
塩ビパイプ補修作業



図版 10 Ⅲ地区調査状況 2



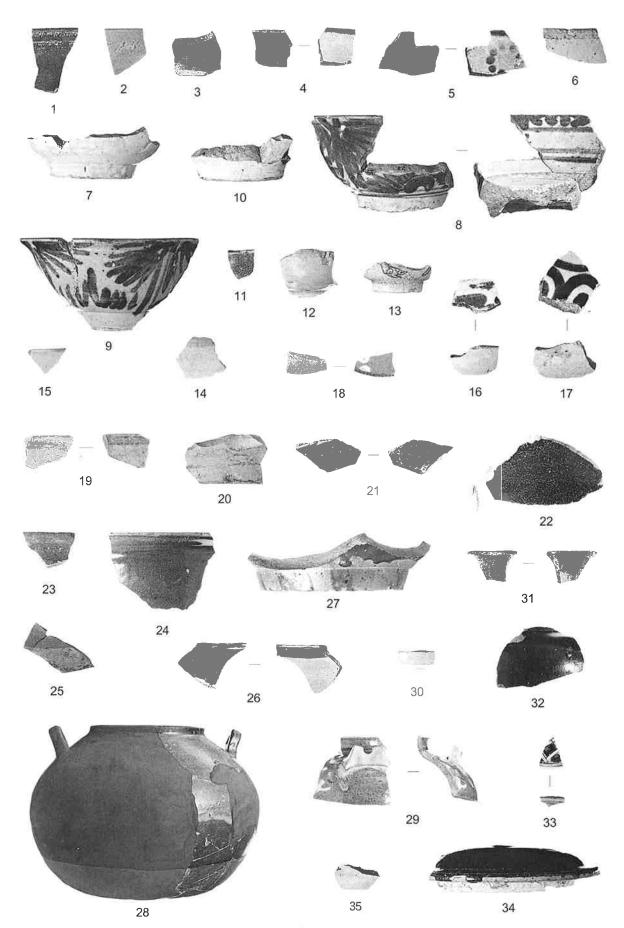
図版 11 上:青磁 下:褐釉陶器・色絵・タイ産半練



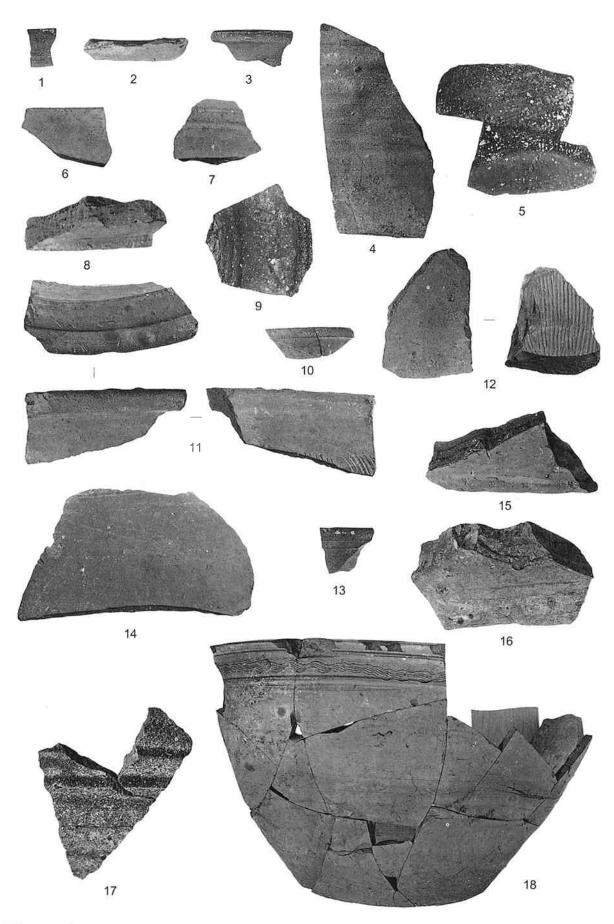
図版 12 白磁・染付



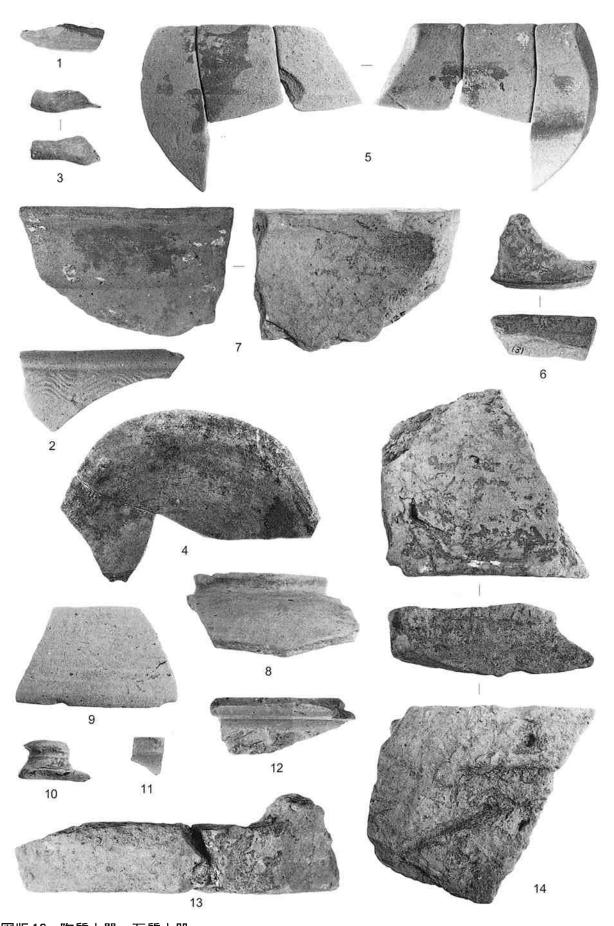
図版 13 上:本土産陶磁器 1 下:本土産陶磁器 2



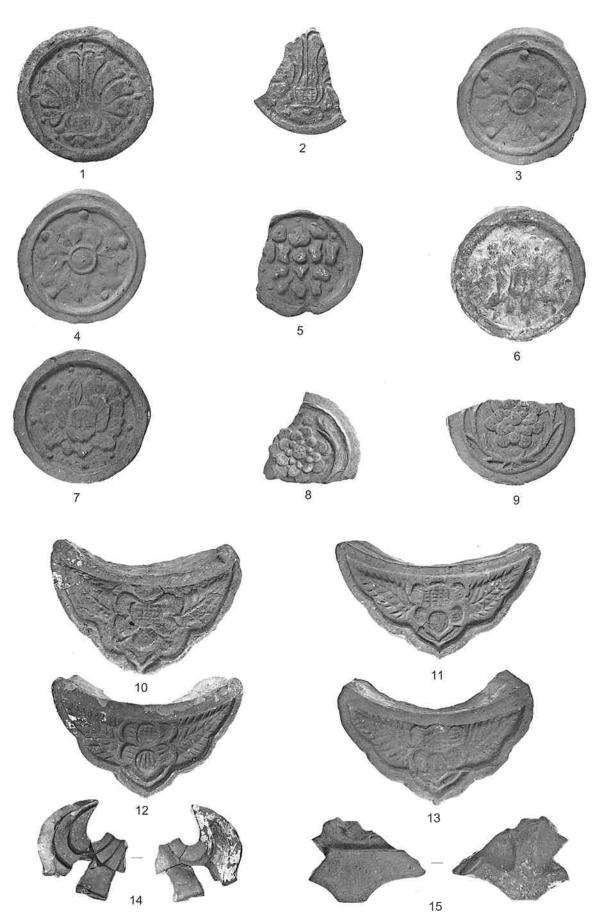
図版 14 上:沖縄産施釉陶器 1 下:沖縄産施釉陶器 2



図版 15 沖縄産無釉陶器



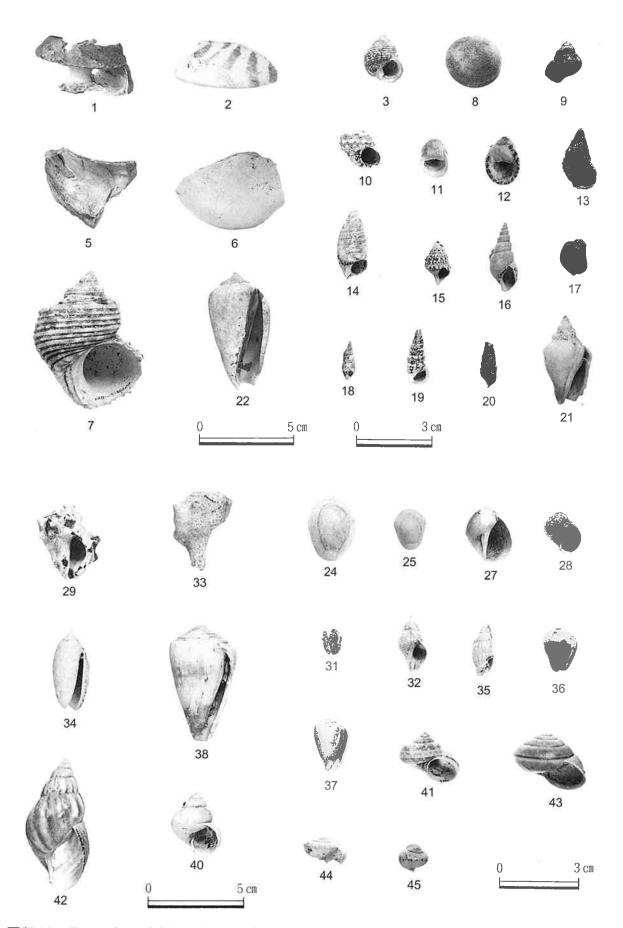
図版 16 陶質土器・瓦質土器



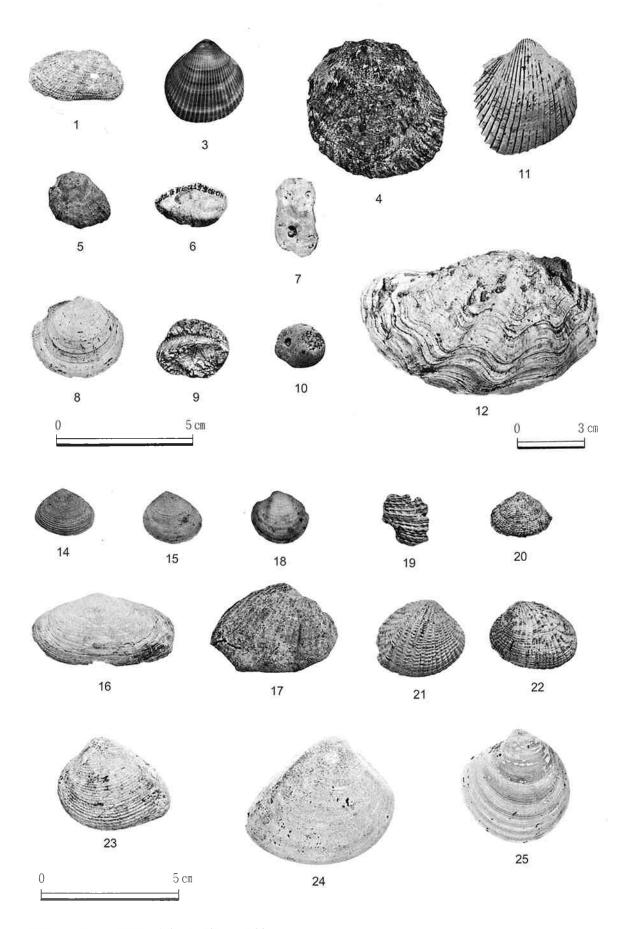
図版17 上:瓦1 下:瓦2



図版 21 上:金属製品 下:石製品



図版22 貝1 巻貝(番号は表と一致)



図版23 貝2 二枚貝(番号は表と一致)

図版 24

Ŀ

ノコギリガサミ

1. ハサミ脚

サメ

2. 歯

魚類

- 3. フエフキダイ科 ハマフエフキ 左 前上顎骨
- 4. フエフキダイ科 ハマフエフキ 左 主上顎骨
- 5. ハタ科 ハタ科の一種 左 擬鎖骨

カモ類 (アイサ)

- 6. 左 大腿骨 遠位部
- 7. 左 脛骨 骨体

ニワトリ

- 8. 右 烏口骨 遠位端
- 9. 右 上腕骨 骨体~遠位部
- 10. 右 尺骨 近位部~遠位部
- 11. 左 脛骨 近位端~遠位部 切痕
- 12. 左 中足骨 近位端
- 13. 左 中足骨 遠位部 3

T

ブタ

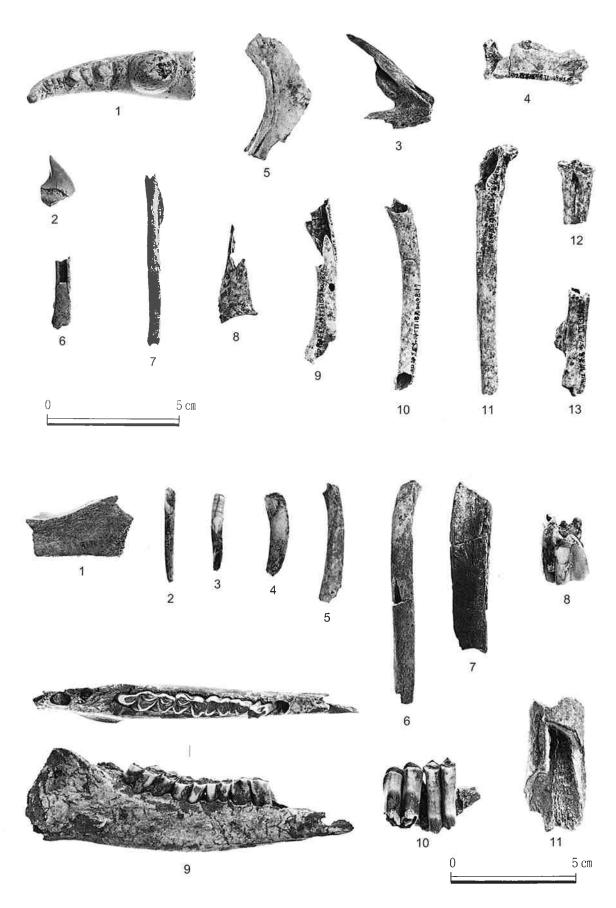
- 1. 左 頭骨 頭頂骨
- 2. 左 下顎骨 I₁
- 3. 右 下顎骨 I₂
- 4. 左 下顎骨 犬歯 ♀
- 5. 左 肋骨
- 6. 右 肋骨
- 7. 右 脛骨 骨体 破片

ウシ

8. 左 上顎骨 P2

ヤギ

- 9. 右 下顎骨 P₃₄ M_{1,23}
- 10. 右 下顎骨 M₁₂
- 11. 中手骨 骨体



図版 24 上:ノコギリガザミ・サメ・魚類・カモ類(アイサ)・ニワトリ 下:ブタ・ヤギ



沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第17集

御茶屋御殿跡

遺構確認調查報告書

発 行 年 2003年 (平成15) 3月25日

発 行 沖縄県立埋蔵文化財センター

編 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒901-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7

TEL 098(835)8751

印 刷 あけぼの印刷株式会社

〒 901-1117 沖縄県島尻郡南風原町津嘉山 1688 番地

TEL 098(888)2980

©沖縄県立埋蔵文化財センター 2003 Printed in Japan 許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

